

元総社蒼海遺跡群(14) 元総社蒼海遺跡群(19)

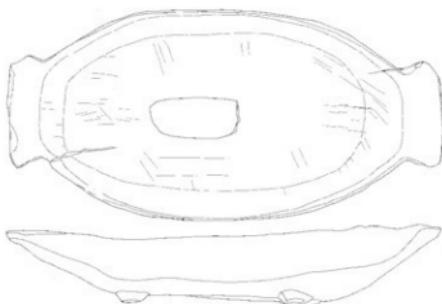
前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 8 . 3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

元総社蒼海遺跡群(14) 元総社蒼海遺跡群(19)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



元総社蒼海遺跡群(19) 出土の舟形容器

2 0 0 8 . 3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



元總社蒼海遺跡群(19) 出土の舟形容器（表）



元總社蒼海遺跡群(19) 出土の舟形容器（裏）



元總社蒼海遺跡群(19) 2号井戸跡出土の漆器椀（表）



元總社蒼海遺跡群(19) 2号井戸跡出土の漆器椀（裏）



元總社蒼海遺跡群(19) 全景（上が北）



元總社蒼海遺跡群(14) 遠景（西から）



元總社蒼海遺跡群(14) 出土遺物（中世以降）

はじめに

前橋市の北にそびえる赤城山は、往古から人々とかかわりが深く、親しまれ愛される逍遙の山であります。とりわけ、赤城山南麓は、その悠久と裾野を広げる台地を中心として、岩宿遺跡に代表されるように遠い旧石器時代から現在まで人々のさまざまな生活が繰り広げられました。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野の国の中核地として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区には山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺、國府など上野國の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。

近代では、横浜港が開港されると、輸出の花形商品として生糸をもって一番乗りしたのが、前橋の糸商人でした。前橋藩は、藩をあげて蚕糸に力を注ぎ、我が国初の製糸の機械化に取り組みました。生糸は、横浜と前橋を結び、文化交流が始まりました。まさに、歴史性豊かなまちです。

今回、報告書を上梓する元總社蒼海遺跡群は古代上野國の中核地域の調査であります。國府推定区域に隣接することから調査は多くの注目を集めております。今回の調査では、國府そのものに関する遺構の検出はかないませんでしたが、古墳時代の木器や奈良・平安時代の堅穴住居跡が検出されました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や各方面のご配慮の結果といえます。また、寒風の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成20年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 砂川次郎

例　　言

1. 本報告書は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社遺跡群発掘調査報告書である。

2. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。

3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

調　　査　　場　　所　　群馬県前橋市総社町3598-3番ほか〔蒼海(14)〕

群馬県前橋市元総社町3070-1〔蒼海(19)〕

発　　掘　　調　　査　　期　　間　　平成19年5月21日～平成19年10月25日〔蒼海(14)〕

平成19年10月29日～平成19年12月14日〔蒼海(19)〕

整理・報告書作成期間　　平成19年12月17日～平成20年3月21日

発　　掘　　・　　整　　理　　担　　当　　者　　近藤雅順・真下　晃・村越純子(発掘調査係員)

4. 本書の原稿執筆・編集は蒼海(14)を近藤・蒼海(19)を村越が行った。

5. 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。

大木伸二・小澤香代・佐藤佳子・下境弥・関根その子・曾我仁・瀧上政信・西山勝久・藤平進

町田妙子・町田敏彦・眞庭武志・峰岸あや子

6. 発掘調査で出土した遺物は、当発掘調査団より前橋市教育委員会に保管を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1. 挿図中に使用した北は、座標北である。

2. 挿図に国土地理院発行の1:200,000地形図(宇都宮、長野)、1:25,000地形図(前橋)、1:6,000前橋市現形図を使用した。

3. 本遺跡の略称は、蒼海(14)が19A130-14、蒼海(19)が19A130-19である。

4. 遺構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

H…古墳・奈良・平安時代の堅穴住居跡　　T…堅穴状遺構　　B…掘立柱建物跡　　W…溝跡

I…井戸跡　　D…土坑　　P…ピット　　O…落ち込み

5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は、原則的に次のとおりである。

遺構　　全体図…1:100、150、200　　住居跡・堅穴状遺構・掘立柱建物跡…1:30・1:60

溝跡…1:60、80、100、120、160　　井戸跡・土坑・ピット…1:60

遺物　　土器・漆器…1/3・1/4　　瓦…1/4　　鉄製品・古錢…1/2

石製品…1/3・1/4　　木器…1/4・1/8

6. 計測値については、(　)は現存値、〔　〕は復元値を表す。

7. セクション注記の記号は、締まり・粘性の順で示し、それぞれ以下のように表現する。

◎ 非常に締まり・粘性あり、○ 締まり・粘性あり、△ 締まり・粘性ややあり、× 締まり・粘性なし

8. 遺構平面図の-----は推定線を-----は堅微面を表す。

9. スクリントーンの使用は、次のとおりである。

遺構平面図　炭化物…　粘土…

遺構断面図　構築面…

遺物実測図　須恵器断面…　灰釉陶器・綠釉陶器断面…　灰釉陶器表面…

煤付着…　粘土付着…　油煙付着…　内黒…

10. 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B　　(浅間B軽石：供給火山・浅間山、1108年)

Hr-FP　(榛名ニッ岳伊香保テフラ：供給火山・榛名山、6世紀中葉)

Hr-FA　(榛名ニッ岳浄川テフラ：供給火山・榛名山、6世紀初頭)

As-C　(浅間C軽石：供給火山・浅間山、4世紀前半～中葉)

目 次

はじめに	i
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地	1
2 歴史的環境	1
III 調査方針と経過	
1 調査方針	6
2 調査経過	8
IV 元總社蒼海遺跡群(14)	
1 全体図	9
2 基本層序	13
3 1トレンチ造構と遺物	14
4 2トレンチ造構と遺物	21
5 3トレンチ造構と遺物	22
6 4トレンチ造構と遺物	25
7 5トレンチ造構と遺物	26
8 6トレンチ造構と遺物	37
9 まとめ	46
V 元總社蒼海遺跡群(19)	
1 全体図	47
2 基本層序	53
3 造構と遺物	53
4 まとめ	65
VI 自然科学分析	
1 元總社蒼海遺跡群(14)	68
2 元總社蒼海遺跡群(19)	78

図 版

- 口絵 元總社蒼海遺跡群(19)出土の舟形容器
元總社蒼海遺跡群(19) 2号井戸跡出土の漆器椀
元總社蒼海遺跡群(19) 全景
元總社蒼海遺跡群(14) 5トレンチ遠景
元總社蒼海遺跡群(14) 5トレンチ出土遺物

図 版

- P.L. 1 蒼海(14) 1 トレンチ
 2 蒼海(14) 1 トレンチ・3 トレンチ
 3 蒼海(14) 3 トレンチ・4 トレンチ
 4 蒼海(14) 5 トレンチ
 5 蒼海(14) 5 トレンチ
 6 蒼海(19)
 7 蒼海(14) 1 トレンチ出土遺物
 8 蒼海(14) 1 トレンチ・3 トレンチ出土遺物

- 9 蒼海(14) 3 トレンチ・5 トレンチ出土遺物
 10 蒼海(14) 5 トレンチ・6 トレンチ出土遺物
 11 蒼海(19) 出土遺物①
 12 蒼海(19) 出土遺物②
 13 蒼海(19) 出土木器①
 14 蒼海(19) 出土木器②
 15 蒼海(19) 出土木器③

挿 図

- Fig. 1 元絶社蒼海遺跡群位置図
 2 周辺遺跡図
 3 元絶社蒼海遺跡群位置図とグリッド設定図
 4 蒼海(14) 全体図①
 5 蒼海(14) 全体図②
 6 蒼海(14) 全体図③
 7 蒼海(14) 全体図④
 8 蒼海(14) 基本層序
 9 蒼海(14) 1 トレH - 1号住居
 10 蒼海(14) 1 トレH - 2号住居①
 11 蒼海(14) 1 トレH - 2号住居②
 12 蒼海(14) 1 トレH - 3号住居①
 13 蒼海(14) 1 トレH - 3号住居②
 14 蒼海(14) 1 トレH - 4号住居①
 15 蒼海(14) 1 トレH - 4号住居②
 16 蒼海(14) 1 トレH - 5号住居
 17 蒼海(14) 1 トレH - 6号住居
 18 蒼海(14) 1 トレH - 7号住居
 19 蒼海(14) 1 トレH - 10号住居
 20 蒼海(14) 1 トレH - 8号住居
 21 蒼海(14) 1 トレH - 9号住居
 22 蒼海(14) 1 トレW - 1号溝跡
 23 蒼海(14) 1 トレス坑・ピット
 24 蒼海(14) 1 トレグリッド等出土遺物①
 25 蒼海(14) 1 トレグリッド等出土遺物②
 26 蒼海(14) 2 トレンチ
 27 蒼海(14) 3 トレ歛状遺構
 28 蒼海(14) 3 トレH - 11号住居
 29 蒼海(14) 3 トレ掘立柱建物跡
 30 蒼海(14) 3 トレス坑・ピット・グリッド
 31 蒼海(14) 4 トレス坑遺構
 32 蒼海(14) 4 トレグリッド等出土遺物
 33 蒼海(14) 5 トレH - 31・33号住居
 34 蒼海(14) 5 トレH - 32号住居①
 35 蒼海(14) 5 トレH - 32号住居②
 36 蒼海(14) 5 トレH - 34号住居
 37 蒼海(14) 5 トレH - 35号住居
 38 蒼海(14) 5 トレH - 36号住居
 39 蒼海(14) 5 トレH - 37号住居
 40 蒼海(14) 5 トレH - 38・39号住居
 41 蒼海(14) 5 トレH - 40号住居
 42 蒼海(14) 5 トレT - 31号堅穴状遺構
 43 蒼海(14) 5 トレW - 33号溝跡
 44 蒼海(14) 5 トレW - 31号溝跡
 45 蒼海(14) 5 トレ溝跡
 46 蒼海(14) 5 トレ土坑
 47 蒼海(14) 5 トレス坑跡
 48 蒼海(14) 5 トレ土坑・井戸跡出土遺物①
 49 蒼海(14) 5 トレ土坑・井戸跡出土遺物②
 50 蒼海(14) 5 トレ落ち込み・グリッド等出土遺物
 51 蒼海(14) 6 トレンチ
 52 蒼海(19) As-C 下現況図
 53 蒼海(19) 木器・土器出土状況
 54 蒼海(19) Hr-FA 下現況図
 55 蒼海(19) 基本層序
 56 蒼海(19) 水田下面出土遺物
 57 蒼海(19) W - 5 出土遺物
 58 蒼海(19) 調査区西壁土層断面図
 59 蒼海(19) 調査区東壁土層断面図
 60 蒼海(19) 調査区中央畦畔土層断面図
 61 蒼海(19) 調査区南大畦畔土層断面図
 62 蒼海(19) 水田下面出土遺物
 63 蒼海(19) W - 1 出土遺物
 64 蒼海(19) 試掘調査出土遺物
 65 蒼海(19) W - 2 出土遺物
 66 蒼海(19) W - 3 出土遺物
 67 蒼海(19) W - 4 出土遺物
 68 蒼海(19) 泥炭層出土遺物①
 69 蒼海(19) 泥炭層出土遺物②
 70 蒼海(19) 泥炭層出土遺物③
 71 蒼海(19) 泥炭層出土遺物④
 72 蒼海(19) 泥炭層出土遺物⑤
 73 蒼海(19) 泥炭層出土遺物⑥
 74 蒼海(19) 井戸跡
 75 蒼海(19) I - 2 出土遺物

表

- Tab. 1 周辺遺跡概要一覧表
 2 蒼海(14) 1 トレンチ遺構計測表
 3 蒼海(14) 2 トレンチ遺構計測表
 4 蒼海(14) 3 トレンチ遺構計測表
 5 蒼海(14) 5 トレンチ遺構計測表
 6 蒼海(14) 6 トレンチ遺構計測表
 7 蒼海(14) 遺物観察表
 8 蒼海(19) 遺構計測表
 9 蒼海(19) 土器観察表
 10 蒼海(19) 木器観察表

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、8年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年に渡って行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

平成19年4月17日付けで、前橋市長 高木政夫より前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査№14の依頼が前橋市教育委員会に提出され、平成19年5月7日、調査依頼者である前橋市長 高木政夫と前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 砂川次郎との間で、本発掘調査の委託契約を締結し、5月21日に現地での発掘調査を開始するに至った。

さらに、平成19年10月16日付けで、前橋市長 高木政夫より前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査№19の依頼が前橋市教育委員会に提出され、平成19年10月26日、調査依頼者である前橋市長 高木政夫と前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 砂川次郎との間で、本発掘調査の委託契約を締結し、10月29日に現地での発掘調査を開始するに至った。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群(14)」(遺跡コード:19A130-14)と「元総社蒼海遺跡群(19)」(遺跡コード:19A130-19)の「元総社蒼海遺跡群」は区画整理事業名を採用し、数字の「(14)・(19)」は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地利根川左岸、東部の広瀬川低地帯という4つの地域に分けられる。

本遺跡の立地する前橋台地は、約24000年前の浅間山爆発によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層(水成)から成り立っている。台地の東部は広瀬川低地帯と直線的な崖で画されていて、台地の中央には現利根川が貫流している。現在の利根川の流路は中世以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域と推定される。台地の西部には榛名山麓の相馬ヶ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって流下し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。総社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比較3m~5mを測り、段丘崖上は高燥な台地で、桑畑を主とした畠地として利用されてきた。

本遺跡は、前橋市街地から利根川を隔て、西へ約2.5kmの地点、前橋市元総社町地内に所在している。南東へ約0.5kmの所に上野国総社神社があり、西方約0.5kmには関越自動車道が南北に走っている。さらに、遺跡地の南側には国道17号、主要地方道前橋・群馬・高崎線が東西に走り、東側には市道大友・石倉線が南北に走り、これらの幹線道路を中心にオフィスビルや大規模小売店が進出している。本遺跡はこれらの幹線道路から奥に入ったところに位置し、周囲には田畠が多い住宅地という静かで落ち着いた環境である。

2 歴史的環境

本遺跡地周辺には、古墳時代後期から終末までの上野地域と中央政権との関連をうかがわせる総社古墳群と山王庵寺、古代の中心地であった上野国府、さらに、中世には長尾氏により国府の駆削りを利用し築かれたとされる蒼海城があり、歴史的環境に優れている。周辺の埋蔵文化財発掘調査によって、これまで連続と続いてきた歴史を物語る多くの新しい知見が集積されている。

縄文時代の遺跡としては、前期・中期の集落跡が検出された産業道路東・西遺跡や上野国分僧寺・尼寺中間地

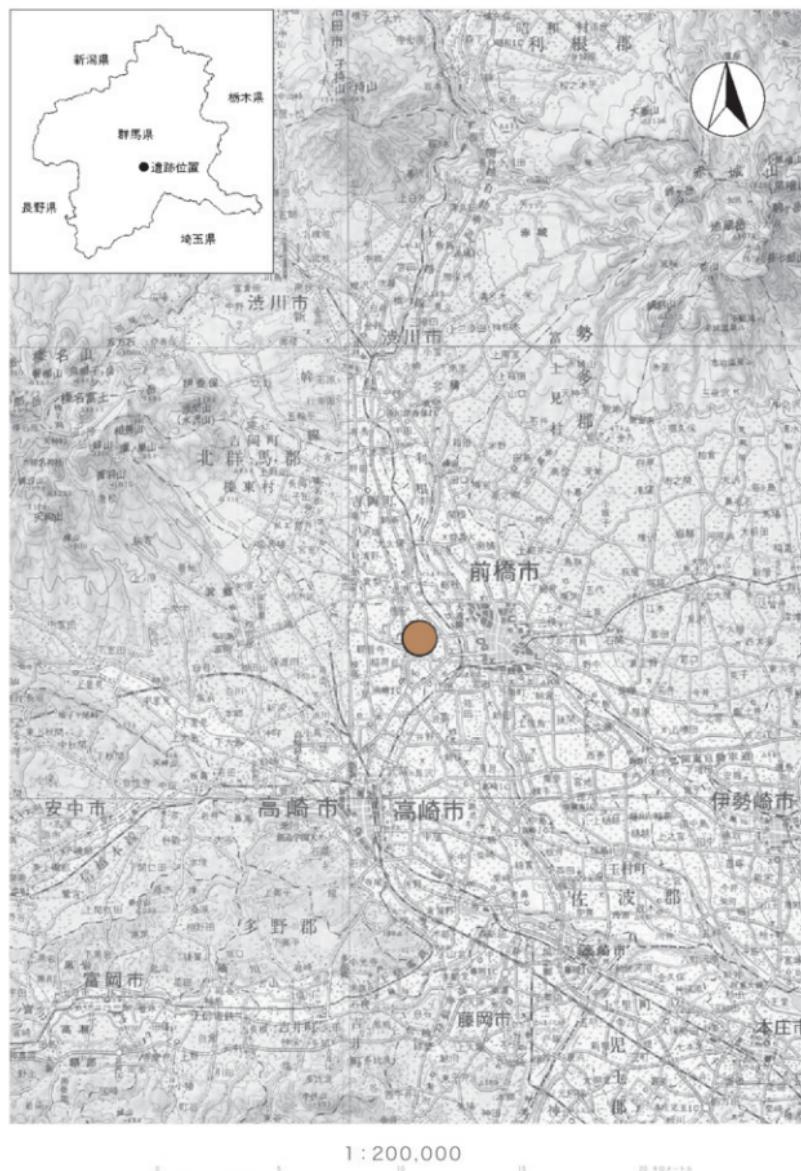


Fig. 1 元總社蒼海遺跡位置図

域が筆頭に挙げられ、縄文文化を考える上で重要な資料といえる。

弥生時代の調査例は少ない。当時の稻作の様子を示す水田・集落跡等が検出された日高遺跡、後期住居跡が検出された上野国分僧寺・尼寺中間地域や桜ヶ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけである。

古墳時代の遺跡としては、まず本遺跡のうちに北に広がる総社古墳群が挙げられる。総社古墳群を代表するものには、前方後円墳である遠見山古墳、川原石を用いた積石塚である王山古墳、前方部と後円部にそれぞれ石室をもつ二段に築造された前方後円墳の総社二子山古墳、横穴式石室をもつ方墳の愛宕山古墳、県内終末期と考えられ佛教文化の影響を強く受けた方墳の宝塔山古墳・蛇穴山古墳がある。また、宝塔山古墳の南西500mには白鳳期の建立と考えられる山王庵寺跡(放光寺)がある。さらにこの寺の塔心礎や石製鶴尾、根巻石等の石造物群は、宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術を駆使して加工されている。これらのことから、この寺は上野地域を治めていた「上毛野氏」の氏寺であり、この古墳群には「上毛野氏」一族が葬られているとも考えられている。これらから、この地が「車評」の中心地として、仏教文化が古墳文化と併存しながら機能していた様子が窺える。なお、平成18年度から5カ年計画で「山王庵寺範囲内容確認調査」が実施され、平成18年度では「講堂」の版築基壇や「回廊」の北東根石、平成19年度では「金堂」の版築基壇や「回廊」の西側根石が確認された。

奈良・平安時代に至ると、上野国府、国分僧寺、国分尼寺の建設と相まって、本地域は古代の政治的・経済的・文化的中心地としての様相を呈てくる。律令期における国司の政治活動の拠点で地方を統治する機能をもつ国府は、元総社地区に置かれたとされる。

国府に関連する遺跡には、県下最大級の掘立柱建物跡が検出された元総社小学校校庭遺跡や、「國厨」「曹司」「國」「邑厨」等と書かれた墨書き土器や人形が出土した元総社寺田遺跡などがある。また、国府城の推定を可能にした大規模な東西方向の溝跡が検出された闘泉橋遺跡や元総社蒼海遺跡群(7)(9)(10)と南北方向の溝跡が検出された元総社明神遺跡の調査成果により、国府城の東北外郭線が想定されるに至った。さらに、周辺遺跡からは官人の用いたと考えられる円面鏡、巡方(腰袋具)、綠釉陶器も出土し、国府について考えるうえで貴重な資料となっている。

国分僧寺は大正15年に国指定史跡となり、昭和40年代からは部分的ながら調査が進められるようになった。本格的な発掘調査は昭和55年12月から始まり、主要伽藍の礎石、築垣、堀等が確認されている。さらに国分尼寺の調査では、昭和44・45年に推定中軸線上のトレンチ調査が行われ伽藍配置が推定できるようになった。さらに平成12年に前橋市埋蔵文化財発掘調査團で南辺の寺域確認調査を行い、東南隅と西南隅の築垣、それと平行する溝跡や道路状遺構が確認された。国分僧寺・尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、上野国分僧寺・尼寺中間地域では、当時の大規模な集落跡や掘建柱建物跡群が検出されている。

また、群馬町の調査等により、本遺跡から約1.5km南の地点にN-64°-E方向の東山道(国府ルート)があることが推定されている。さらに、推定日高道は、日高遺跡で検出された幅約4.5mの道路状遺構を国府方面へ延長したものである。これらは、当時の交通網を物語る重要な遺構である。

中世に至り、永享元年(1429)、上野国守護代の長尾氏によって古代国府跡に築かれた蒼海域は城郭としての機能を有し県内でも最古級に位置づけられる。しかも、県下最初の城下町を形成したと考えられている。蒼海域の縄張りは国府と関係が深く、現在の本地域の主要道路はこの縄張りに沿って作られていると推測される。

このように歴史的に重要な役割を果たしてきた総社・元総社地区であるが、その中でも上野国府が所在したと推定される元総社地区は注目される地域の一つである。元総社蒼海土地区画整理事業に伴い、平成11年より継続的に本地域の発掘調査が行われていく。これにより、手つかず状態であった本地域の全容が明らかになっていくであろう。今後、この調査の進捗によって、上野国府や蒼海域が解明されていくことを期待する。

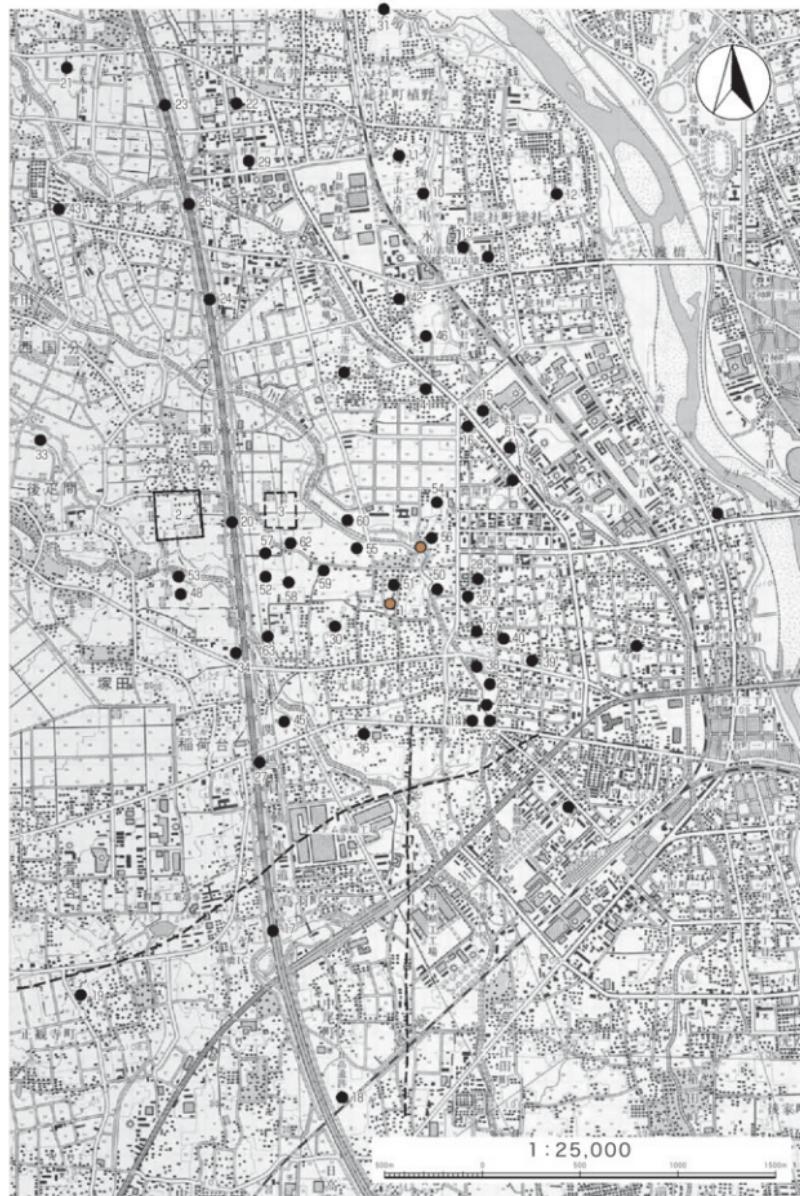


Fig. 2 周辺遺跡図

Tab. 1 周辺遺跡概要一覧表

番号	道 路 名	調査年度	時代：主な遺構・出土遺物
1	元龜社舊海道跡群(14)・(19)	2007	本遺跡
2	上野国分寺跡(県教委)	1980~88	奈良：金堂基壇・塔基壇
3	上野国分尼寺跡	(1999)	奈良：西南隅・東南隅塗垣
4	山王庵寺跡	(1974)	古墳：塔心礎・根巻石
5	東山道(推定)		
6	日高道(推定)		
7	玉山古墳	1972	古墳：前方後円墳(6C中)
8	蛇穴山古墳	1975	古墳：方墳(8C初)
9	稲荷山古墳	1988	古墳：円墳(6C後半)
10	愛宕山古墳	1996	古墳：円墳(7C初)
11	龜社二子山古墳	未調査	古墳：前方後円墳(6C末~7C初)
12	遠見山古墳	未調査	古墳：前方後円墳(5C後半)
13	宝塔山古墳	未調査	古墳：方墳(7C末)
14	元龜社小学校校庭遺跡	1962	平安：掘立柱建物跡・柱穴群・周濠跡
15	産業道路東遺跡	1966	礎文：住居跡
16	産業道路西遺跡		
17	中尾遺跡(事業団)	1976	奈良：平安：住居跡
18	日高遺跡(事業団)	1977	弥生：水田跡・方形周溝墓・住居跡・木製農耕具・平安：条里制水田跡
19	正觀院跡 I~IV(高崎市)	1979~81	弥生：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：溝跡
20	上野国分寺跡・尼寺中間地域(事業団)	1980~83	國文：住居跡・配石遺構・弥生：住居跡・方形周溝墓・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・中世：掘立柱建物跡・溝状遺構・道路状遺構
21	清里南部遺跡群・Ⅲ	1980	ビット：奈良・平安：住居跡・溝跡
22	中島遺跡	1980	奈良：平安：住居跡
23	下東西遺跡(事業団)	1980~84	國文：屋外埋甕・弥生：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・横列・中世：住居跡・溝跡
24	国分境遺跡(事業団)	1990	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
	国分境Ⅱ遺跡	1991	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
	国分境Ⅲ遺跡(群馬町)	1991	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・高踏・中世：土塼墓
25	元龜社明神北跡 I~XII	1982~96	古墳：住居跡・水田跡・堀跡・奈良・平安：住居跡・溝跡・大形人形・中世：住居跡・溝跡・天日系櫛
26	北原遺跡(群馬町)	1982	國文：土坑・集石遺構・古墳：水田跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡
27	鳥羽遺跡(事業団)	1978~83	古墳：住居跡・歌冶場跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡(神殿跡)
28	関泉寺遺跡	1983	奈良・平安：溝跡(上幅6.5~7m、下幅3.24m、深さ2m)
29	柿本遺跡・Ⅱ遺跡	1983, 88	奈良・平安：住居跡・溝跡
30	草作遺跡	1984	古墳：住居跡・平安：住居跡・中世：戸門跡
31	桜ヶ丘遺跡		弥生：住居跡
	龜社桜ヶ丘遺跡・Ⅱ遺跡	1985, 87	奈良・平安：住居跡
32	関泉橋南遺跡	1985	古墳：住居跡・奈良・平安：溝跡
33	後醍醐遺跡 I~Ⅲ(群馬町)	1985~87	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：道路状遺構
34	塙田村東遺跡(群馬町)	1985	平安：住居跡
35	寺田遺跡	1986	平安：溝跡・木製品
36	天神遺跡・Ⅱ遺跡	1986, 88	奈良・平安：住居跡
37	星敷遺跡・Ⅱ遺跡	1986, 95	古墳：住居跡・平安：住居跡・中世：聚跡・石敷遺構
38	大友屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡	1987	古墳：住居跡・平安：住居跡・溝跡・地下式土坑
39	坂越遺跡	1987	奈良・平安：住居跡・溝跡
40	坂越Ⅱ遺跡	1988	平安：住居跡
41	昌榮寺側面遺跡・Ⅱ遺跡	1988	奈良・平安：住居跡
42	村東遺跡	1988	古墳：住居跡・溝跡・奈良・平安：住居跡・中世：堀跡
43	熊野谷遺跡	1988	國文：住居跡・平安：住居跡・溝跡
44	元龜社寺田遺跡 I~Ⅲ(事業団)	1988~91	古墳：水田跡・溝跡・奈良・平安：住居跡・溝跡・人形・童串・墨書き土器・中世：溝跡
45	弥勒遺跡・Ⅱ遺跡	1989, 95	古墳：住居跡・平安：住居跡
46	大屋敷遺跡 I~VI	1992~2000	國文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：掘立柱建物跡・地下水土坑・溝跡
47	元龜社植葉遺跡	1993	國文：土坑・平安：住居跡・瓦塔
48	上野国分寺参道遺跡	1996	古墳：住居跡・平安：住居跡
49	大友宅地添遺跡	1998	平安：水田跡
50	龜社関泉明神北遺跡	1999	古墳：畠跡・水田跡・溝跡・中世：溝跡
	龜社関泉明神北Ⅱ遺跡	2001	古墳：住居跡・溝跡・平安：住居跡・溝跡
	龜社関泉明神北Ⅴ遺跡	2004	古墳：水田跡・奈良・平安：住居跡
	元龜社舊海道跡群(7)	2005	奈良・平安：住居跡・溝跡
	元龜社舊海道跡群(9)・(10)	2006	古墳：住居跡・奈良・平安：掘立柱建物跡・住居跡・溝跡・中世：溝跡

番号	遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・出土遺物
51	元総社宅地遺跡1~23トレンチ	2000	古墳：住居跡、平安：住居跡・掘立柱建物跡、鍛冶場跡、溝跡、道路状遺構、中世：溝跡、近世：住居跡、五輪塔、輪
52	元総社小見遺跡	2000	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・溝跡
53	元総社西川遺跡（事業団）	2000	古墳：住居跡、墓跡、奈良・平安：住居跡・溝跡
54	元総社甲種荷塚大道西遺跡	2001	奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：墓跡、近世：溝跡
	元総社甲種荷塚大道西Ⅱ遺跡	2001	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・溝跡、近世：溝跡
55	元総社小見内Ⅳ遺跡	2001	古墳：住居跡、墓跡、奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：掘立柱建物跡・溝跡
	元総社小見内Ⅴ遺跡	2003	奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：井戸跡
	元総社蒼海遺跡群(12)	2006	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世：井戸跡
56	元総社甲種荷塚大道西Ⅲ遺跡	2002	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・墓跡・溝跡
	元総社南泉明神北遺跡	2002	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡
	元総社甲種荷塚大道西Ⅳ遺跡	2003	古墳：墓跡、中世：墓跡
57	元総社小見Ⅱ遺跡	2002	縄文：住居跡、古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・中世：溝跡、道路状遺構
	元総社小見Ⅳ・V遺跡	2003	縄文：住居跡、古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：溝跡・掘立柱建物跡
	元総社小見Ⅴ・VI遺跡	2004	縄文：住居跡、古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
	元総社蒼海遺跡群(4)	2005	縄文：住居跡、古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
58	元総社小見Ⅲ遺跡	2002	縄文：住居跡、古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：溝跡、道路状遺構
	元総社草作Ⅴ遺跡	2002	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：溝跡
59	元総社小見内Ⅳ遺跡	2002	奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・中世：土壤墓・掘立柱建物跡・溝跡
	元総社小見内Ⅴ・X遺跡	2003	奈良・平安：住居跡・溝跡・中世：整穴状遺構
	元総社小見内Ⅴ・X遺跡	2004	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・工具跡・粘土採掘坑・金粒・金粒、中世：溝跡・土壤墓
	元総社蒼海遺跡群(2)、(6)	2004	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・井戸跡・鍛冶工房跡・中世：溝跡
	元総社蒼海遺跡群(11)	2005	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
60	元総社北川遺跡（事業団）	2002~04	古墳：水田跡・奈良・平安：住居跡・墓跡、中世：掘立柱建物跡・水田跡・火葬墓
61	桶荷塚道東遺跡（事業団）	2003	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・溝跡・遺構築材採掘痕・井戸跡
62	元総社小見内Ⅳ遺跡	2003	縄文：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・中世：墓跡・溝跡
	元総社蒼海遺跡群(1)、(5)	2005	奈良・平安：住居跡・溝跡・中世：溝跡・土坑墓
63	元総社蒼海遺跡群(8)	2006	奈良・平安：住居跡・縁石陶器

* 調査年度の欄の（ ）は調査開始年度を表す。

* 調査名の欄の（事業団）は御群馬県埋蔵文化財調査事業団を表す。

III 調査方針と経過

1 調査方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業の道路予定地及び盛土地で、調査面積は元総社蒼海遺跡群(14)が1,176m²、元総社蒼海遺跡群(19)が336m²である。グリッド座標については、国家座標（日本測地系）X = +44.000・Y = -72.200を基点(X0・Y0)とする4 mピッチのものを使用し、西から東へX270、X271、X272…、北から南へY74、Y75、Y76…となる。グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。

元総社蒼海遺跡群(14) 3トレンチのX271・Y75の公共座標は以下のとおりである。

日本測地系	X = +43700.000	Y = -71116.000
世界測地系	X = +44054.899	Y = -71407.763

調査は、表土掘削・遺構確認・方眼杭等設置・遺構掘り下げ・遺構精査・写真撮影・測量の手順で行った。

図面作成は、平板・簡易造り方測量を用い、遺構平面図は原則として1/20、住居跡は1/10の縮尺で作成した。遺物については平面分布図を作成し、遺物台帳に各種記録をしながら収納した。包含層の遺物はグリッド単位で収納し、重要遺物については分布図・遺物台帳の記載を行ない収納した。

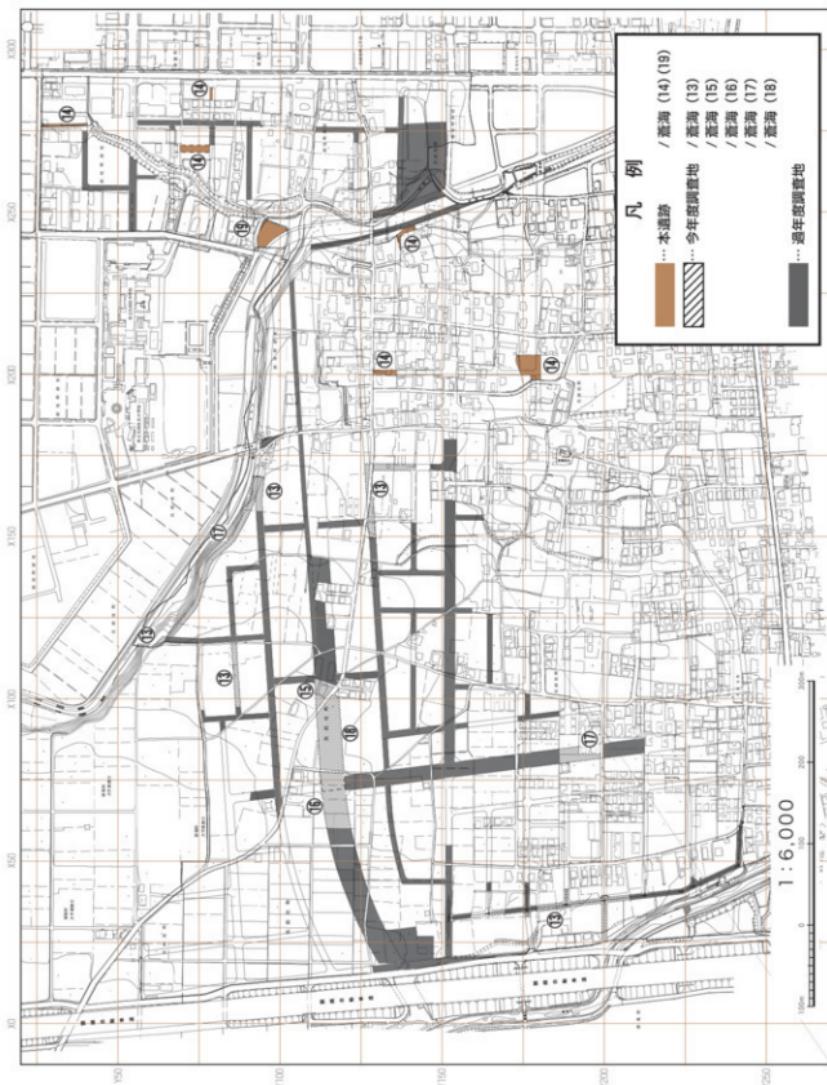


Fig. 3 元總社跡海遺跡群位置図とグリッド設定図

2 調査経過

元総社苔海遺跡群(14)は調査地が6カ所に分かれており、調査着手の順で1トレンチ・2トレンチ・3トレンチ…とした。

1トレンチは、平成19年5月21日より重機掘削を開始した。1トレンチは推定国府城そばに位置し慎重に調査を進める必要があり、As-B混土層まで重機掘削を行い、その後は鋤籠で少しづつ掘り下げていった。しかしながら国府に直接関わると考えられる遺構は検出されず、住居跡10軒・溝跡1条、土坑6基を検出し6月28日埋め戻しを終了した。

2トレンチは5月23日に重機掘削を行った。掘削深度が2mを越えたが遺構面まで達しないため、安全面を考慮して再度段掘りで調査を行うこととした。そして、9月10日調査を再開した。2m50cmほど掘削を進めると洪水層に埋もれた水田址を検出した。6mの道路幅での段掘りという厳しい条件であったため、1m幅のトレンチ調査と図面の記録を行い、9月13日埋め戻しを終了した。

3トレンチは6月4日より調査を行った。粘性の強い土で、乾くと硬くなり雨が降ると水がたまるなど太陽と雨に悩まされた。遺構は畝状遺構・住居跡1軒・掘立柱建物跡2棟を検出した。畝状遺構は新旧関係の判断に苦労したが3時期あることが確認できた。6月25日に全景写真撮影を行い、8月1日埋め戻しを終了した。

4トレンチは6月26日より調査を行った。まず、As-B純層まで重機掘削を行い、人力でAs-B純層を除去した。しかし、畦畔は確認できなかった。次に、As-C混土層まで再度重機掘削を行った。ここでは、3トレンチと同様な畝状遺構を確認した。そして、8月2日埋め戻しを終了した。

5トレンチは7月23日より重機掘削を開始した。遺構面までの深さは浅く、遺構の残存状況は良好ではなかつたが、畑地のため耕作土を分ける必要があり重機掘削に時間を要した。また、北側と西側に大溝があり、さらに、井戸跡が13基もあったため土量が多く掘り下げにも苦労した。9月25日に全景写真撮影を行い、10月4日埋め戻しを終了した。

6トレンチは下水管路設部のみの調査で、工事と平行して10月22日から25日まで図面の記録を行った。

元総社苔海遺跡群(19)は、10月29日より一面目の重機掘削を開始した。旧牛池川の流路が何本も入っていたが、調査区の南西部・中央部・北東部でHr-FA層を確認し、人力でそのHr-FA層を除去して水田址を検出した。本調査地は現牛池川から10mも離れておらず常に水が湧き出るため、調査区の周囲に10cm幅の溝を掘り、オートポンプ2台を設置し水を汲み出しながら作業を行った。11月21日にラジコンヘリコプターによる調査区全景写真撮影を行い、28までに一面目の調査を終了した。

二面目の調査は11月30日より行った。泥炭層を掘削していく過程で、大量の木器が出土したため、図面をとりながら掘り下げを進めていった。完形の「舟形容器」など貴重な木器が数点出土した。

三面目の調査は12月11日に行った。As-C混土層下からは遺構は確認できなかった。そして、12月14日埋め戻しを終了した。

12月17日より文化財保護課に戻り、整理作業を開始した。出土遺物の水洗い・注記・接合・復元・実測・写真撮影・収納、図面の修正・整理・収納、写真の整理・収納などのすべての作業を翌年3月21日までに終了した。

IV 元総社蒼海遺跡群(14)

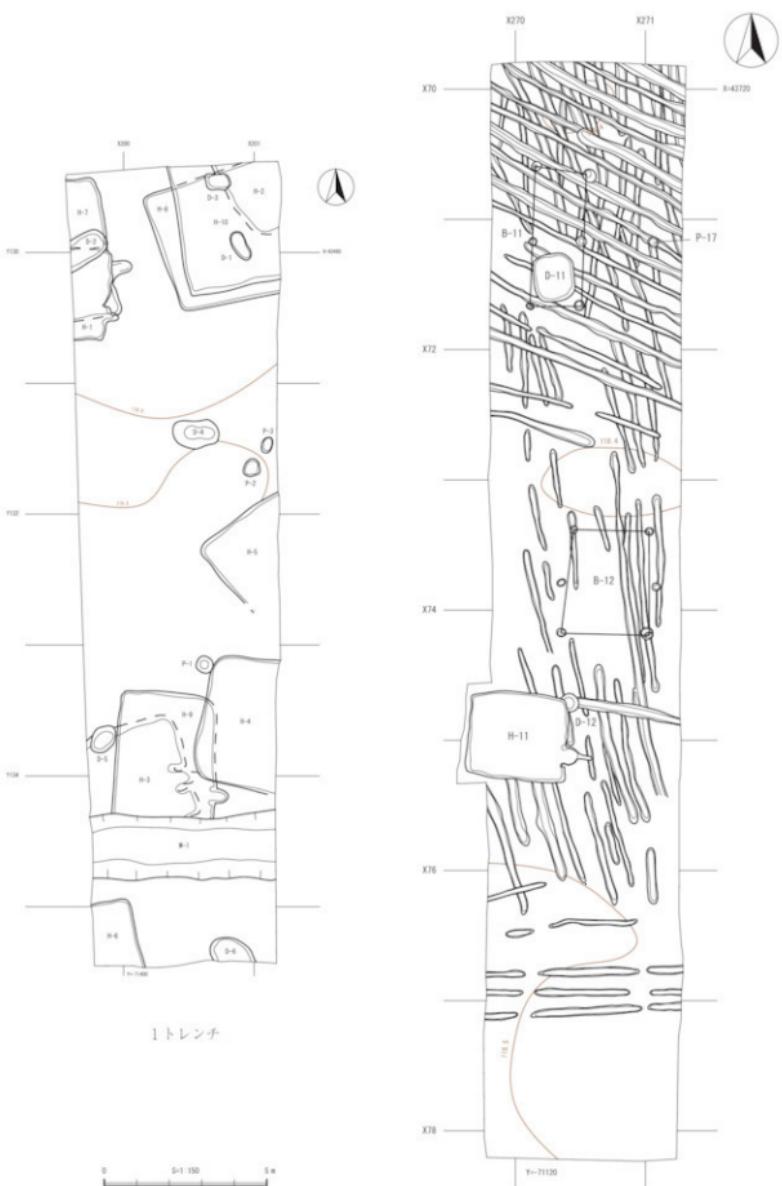


Fig. 4 蒼海(14) 全体図①

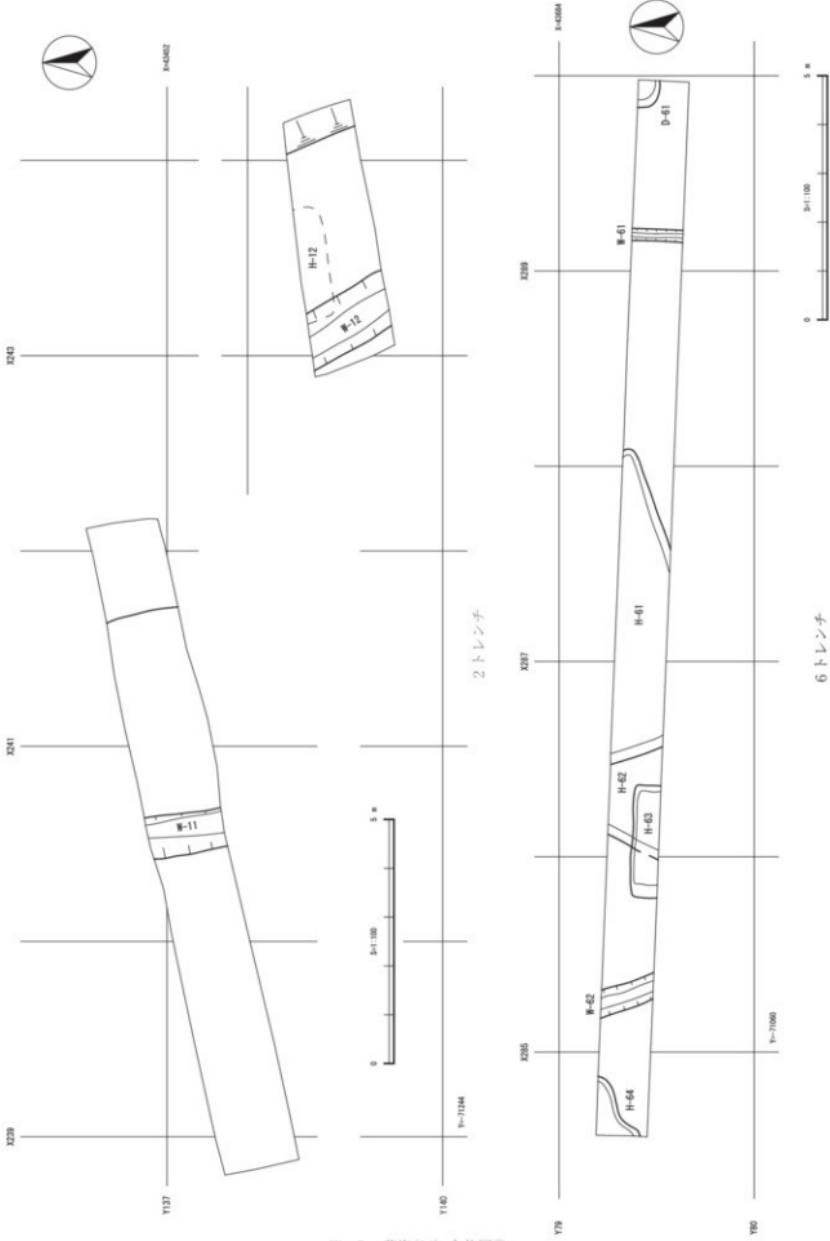


Fig. 5 茅海(14) 全体図②

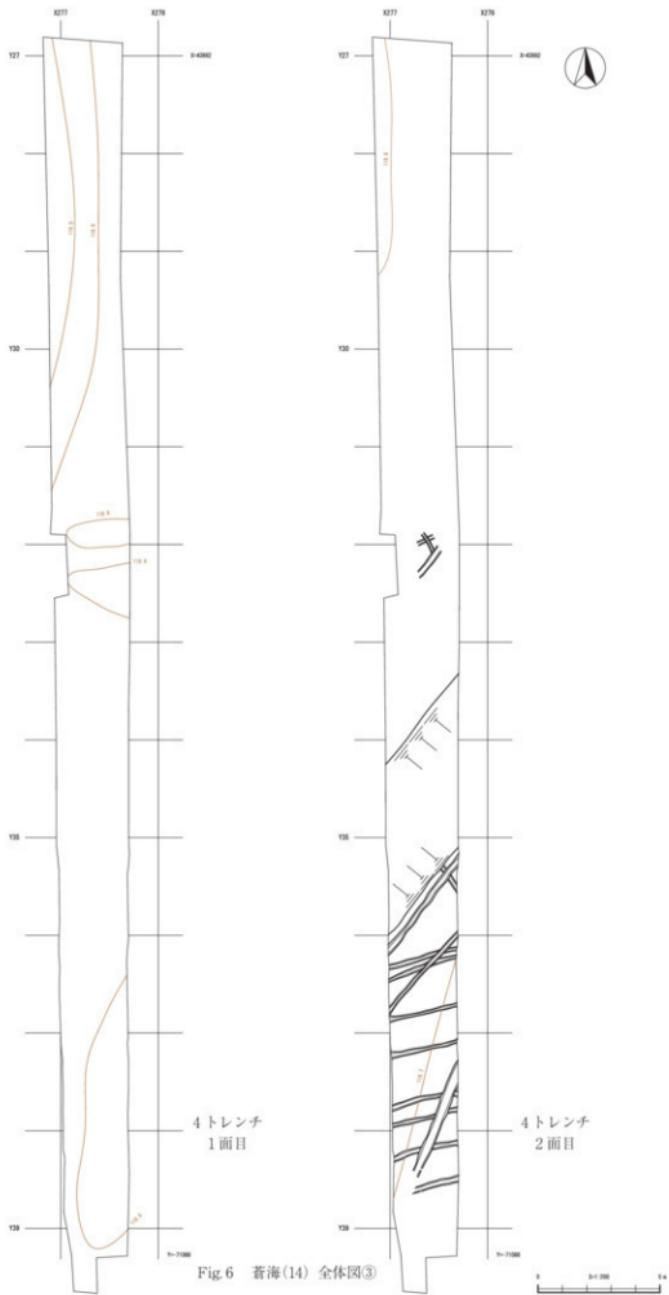




Fig. 7 蒼海(14) 全体図④

2 基本層序

121.0m

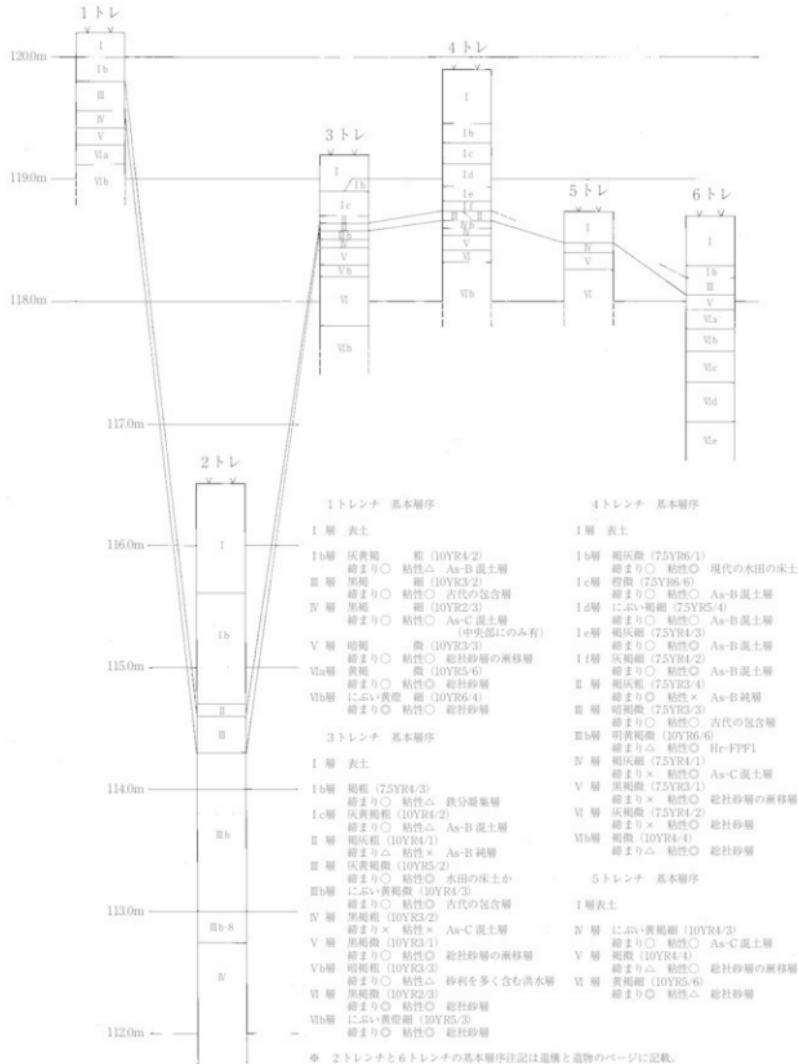


Fig. 8 茅海(14) 基本層序

3 1トレンチ遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

H-1号住居跡 (PL. 1)

位置 X190、Y129・130グリッド 主軸方向 N-94°-E 規模 東西(1.39)m、南北2.92m、壁現高21cm。面積 (3.26)m² 床面 平坦で堅緻な床面。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向N-100°-E、全長80cm、最大幅70cm、焚口部幅42cm。竈内より瓦片が出土。川原石とともに瓦も使用されていたと考えられる。柱穴 P6が南壁近くで検出されたが大部分が調査区外のため詳細は不明。重複 H-7・D-2と重複し、新旧関係はH-7→本遺構→D-2の順である。出土遺物 総数131点。そのうち須恵壺1点、瓦2点を図示。時期 覆土や出土遺物（羽釜部体部出土）から10世紀代と考えられる。

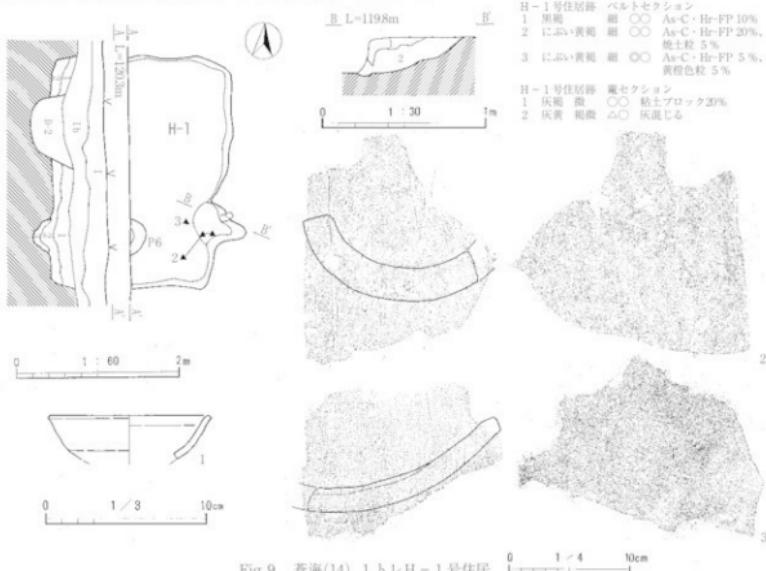


Fig. 9 著海(14) 1トレンチ H-1号住居

H-2号住居跡

位置 X200・201、Y129グリッド 主軸方向 N-60°-E 規模 東西(1.90)m、南北(2.80)m、壁現高30cm。面積 (3.20)m² 床面 平坦で堅緻な貼り床。竈 不明。柱穴 P6: 長径40cm、短径32cm、深さ55cmの円形。P 7: 長径65cm、短径(42)cm、深さ78cm。重複 H-8・H-10・D-3と重複し、新旧関係は本遺構→H-10→H-8→D-3の順である。出土遺物 総数50点。そのうち土師壺1点、土師甕1点を図示。時期 覆土や出土遺物から7世紀代と考えられる。

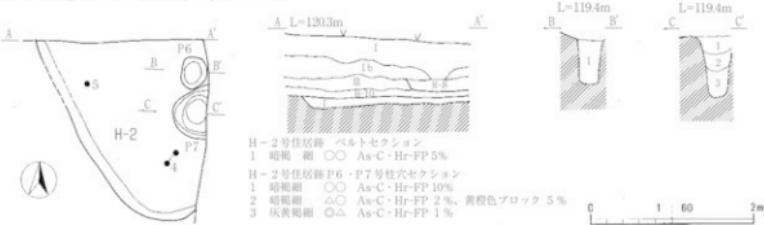


Fig. 10 著海(14) 1トレンチ H-2号住居①



Fig.11 蒼海(14) 1トレ H - 2号住居②

H - 3号住居跡 (PL. 1)

位置 X199・200 Y133・134グリッド 主軸方向 N - 74° - E 規模 東西 (3.12)m、南北 (3.30)m、壁現高33cm。面積 (8.48)m² 床面 平坦で堅敏な貼り床。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向 N - 77° - E、全長95cm、最大幅95cm、焚口部幅40cm。右袖に1個、天井に3個の土師壺を使用。貯蔵穴 P5 : 長径30cm、短径28cm、深さ43cmの円形。重複 H - 9 - W - 1 - D - 5と重複し、新旧関係は本遺構→H - 9 - D - 5→W - 1の順である。出土遺物 総数237点。そのうち土師壺1点、土師壺4点を図示。時期 覆土や出土遺物から7世紀後葉と考えられる。

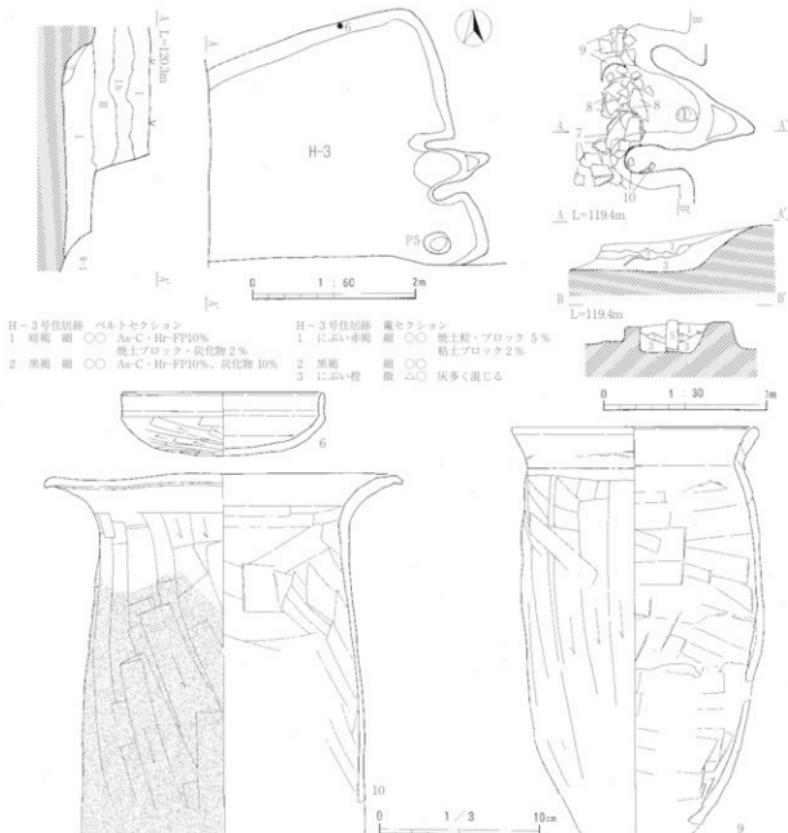


Fig.12 蒼海(14) 1トレ H - 3号住居①

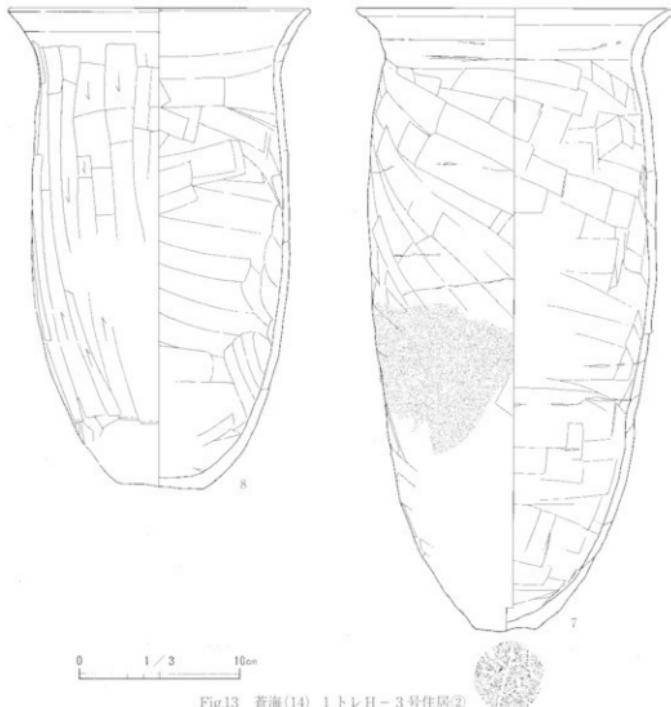


Fig.13 葦海(14) 1トレH-3号住居②

H-4号住居跡 (PL.2)

位置 X200・201、Y133・134グリッド 主軸方向 N-103°-E 規模 東西(2.75)m、南北4.08m、壁現高16cm。面積(8.90)m² 床面 平坦で堅緻な床面。竈 不明。貯藏穴 P5: 南西隅に位置し長径85cm、短径68cm、深さ51cmの楕円形。重複 H-9と重複し、新旧関係はH-9→本遺構の順である。出土遺物総数119点。そのうち須恵2点、須恵高台皿1点、須恵高台碗1点、釘1点を図示。時期 覆土や出土遺物から10世紀後半と考えられる。

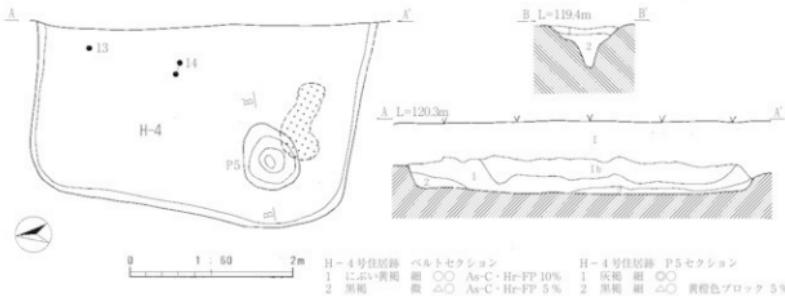


Fig.14 葦海(14) 1トレH-4号住居①

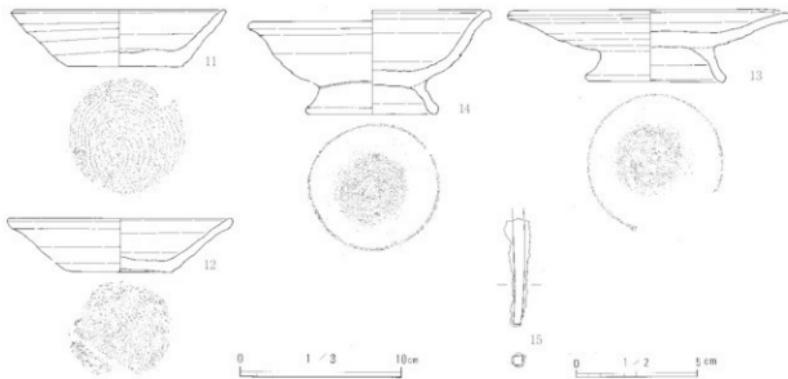


Fig. 15 蒼海(14) 1トレ H-5号住居②

H-5号住居跡 (PL. 2)

位置 X200・201、Y131・132グリッド 主軸方向 N-53°-E 規模 東西 (3.00)m、南北 (2.73)m、壁現高20cm。面積 (5.26)m² 床面 全体的に平坦で部分的に堅緻な床面。竈 不明。出土遺物 総数60点。そのうち土師杯3点を図示。時期 覆土や出土遺物から8世紀前葉と考えられる。

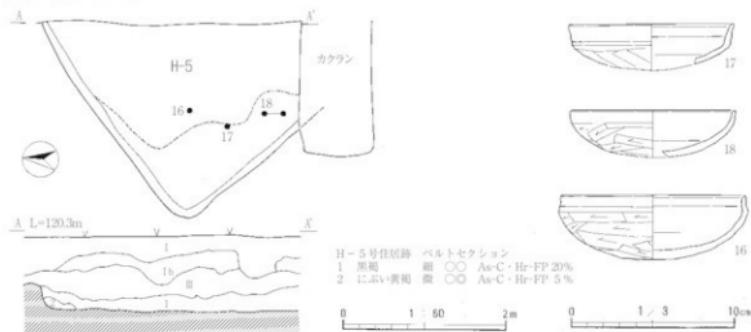


Fig. 16 蒼海(14) 1トレ H-5号住居

H-6号住居跡

位置 X199・200、Y134・135グリッド 主軸方向 N-77°-E 規模 東西 (1.55)m、南北 (2.6)m、壁現高14cm。面積 (2.62)m² 床面 平坦で堅緻な床面。竈 不明。出土遺物 総数2点。そのうち灰釉高台椀1を図示。時期 覆土や出土遺物から上層はHr-FP下層はAs-Bとされる。

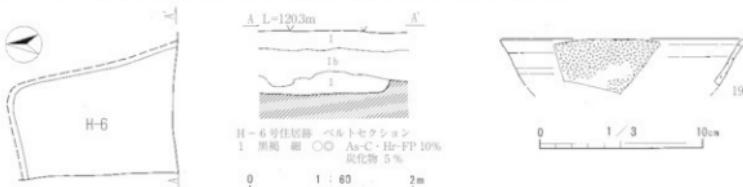


Fig. 17 蒼海(14) 1トレ H-6号住居

H-7号住居跡 (PL. 2)

位置 X 199・200、Y 129・130グリッド 主軸方向 N-80°-E 規模 東西 (143)m、南北435m、壁現高36cm。面積 (5.17) m² 床面 全体的に平坦な貼り床。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向 N-80°-E、全長 (141)cm、最大幅 (107)cm、袖石の設置穴や焼土・灰混じりの土を確認したが焚き口部ははつきりと確認できなかった。重複 H-1・D-2と重複し、新旧関係は本遺構→H-1→D-2の順である。出土遺物 総数243点。そのうち土師壺2点、須恵壺1点、土師甕3点を図示。時期 覆土や出土遺物から7世紀後葉と考えられる。

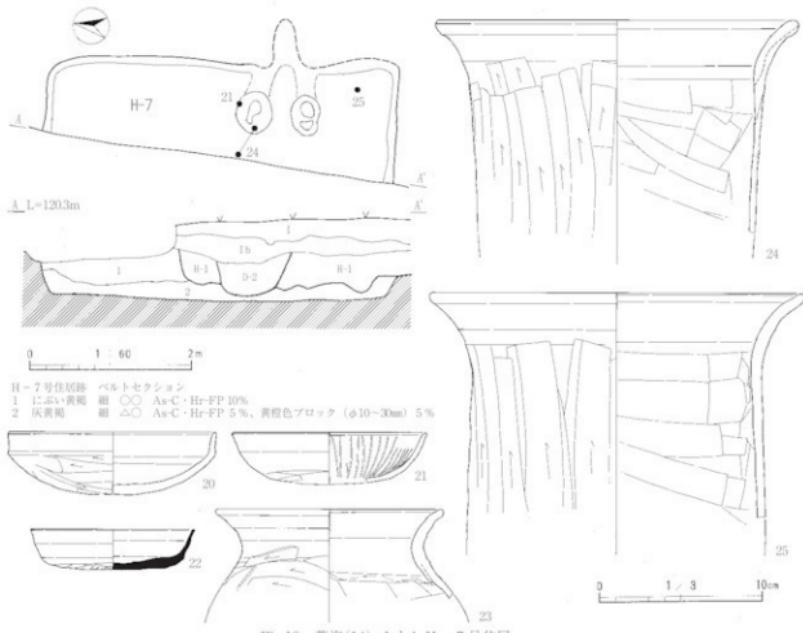


Fig.18 蒼海(14) 1トレH-7号住居

H-10号住居跡

位置 X 200・201、Y 129・130グリッド 主軸方向 N-80°-E 規模 東西 (3.40)m、南北 (4.00)m、壁現高15cm。面積 (11.89) m² 床面 平坦で部分的に堅緻な床面。竈 不明。重複 H-2・H-8・D-1・D-3と重複し、新旧関係はH-2→本遺構→H-8→D-1・D-3の順である。出土遺物 総数24点。時期 覆土や重複関係から上限は8世紀、下限はAs-B降下と考えられる。

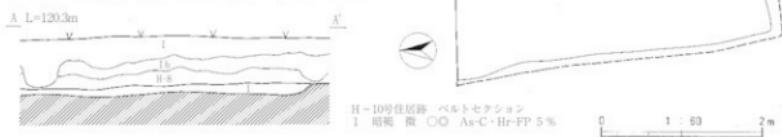


Fig.19 蒼海(14) 1トレH-10号住居

H-8号住居跡

位置 X200・201、Y129・130グリッド 主軸方向 N-70°-E 規模 東西(3.64)m、南北4.20m、壁現高5cm。面積(15.01)5m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 不明。重複 H-2・H-10・D-1・D-3と重複し、新旧関係はH-2→H-10→本遺構→D-1・D-3の順である。出土遺物 総数9点。時期 覆土や重複関係から上限は8世紀、下限はAs-B降下と考えられる。

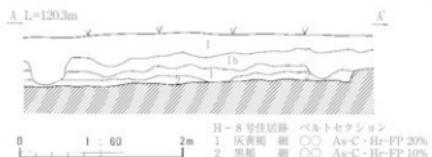


Fig.20 蒼海(14) 1トレ H-8号住居

H-9号住居跡

位置 X199・200、Y133・134グリッド 主軸方向 N-91°-E 規模 東西3.18m、南北(4.00)m、壁現高9cm。面積(11.49)m² 床面 平坦な床面。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向 N-98°-E、全長82cm、最大幅62cm、焚口部幅27cm。重複 H-3・H-4・W-1と重複し、新旧関係はH-3→本遺構→H-4→W-1の順である。出土遺物 総数21点。そのうち須恵壺3点を図示する。時期 覆土や出土遺物から10世紀前半と考えられる。

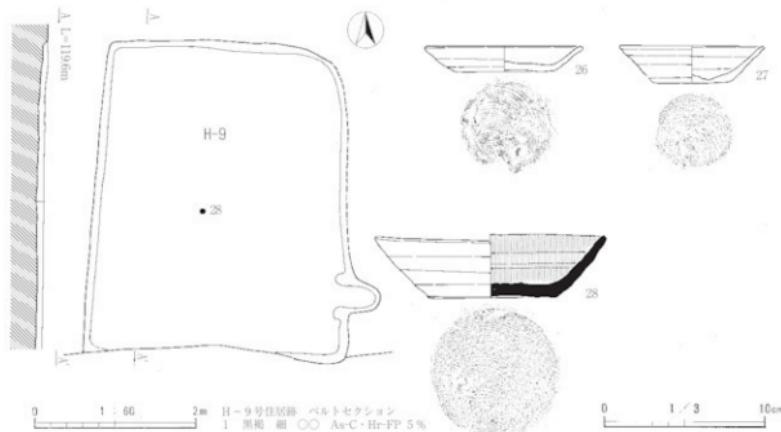


Fig.21 蒼海(14) 1トレ H-9号住居

(2) 溝跡

W-1号溝跡 (PL. 2)

位置 X199-201、Y134 主軸方向 N-90°-E 長さ 5.86m 最大幅 上幅2.18m、下幅1.13m 深さ 58cm 形状等 U字形。重複 H-3・H-9と重複し、新旧関係はH-3→H-9→本遺構の順である。出土遺物 総数84点。そのうち古銭1点を図示する。時期 覆土から中世以降と考えられる。

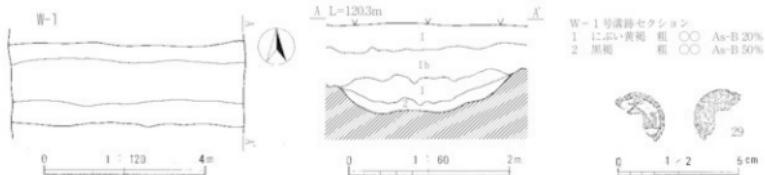


Fig.22 蒼海(14) 1トレW-1号溝跡

(3) 土坑・ピット

土坑・ピットについては、Tab.2 1トレンチ遺構計測表(3) 土坑・ピット(P.39)を参照。
そのうち、D-2出土の須恵高台椀1点、D-4出土の須恵壺1点、D-6出土の須恵壺1点、P-3出土の須恵壺1点を図示。

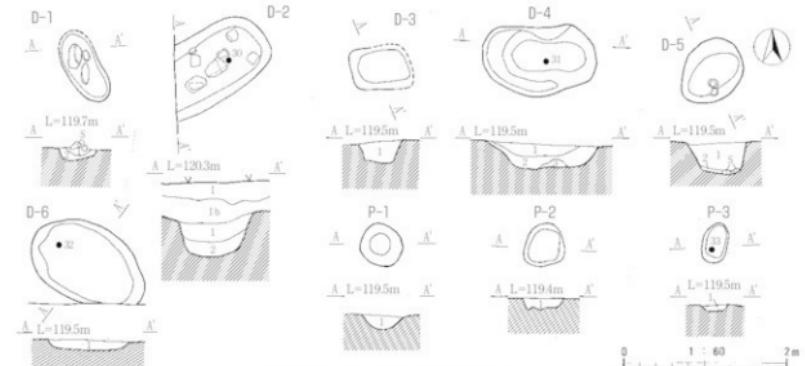


Fig.23 蒼海(14) 1トレ土坑・ピット

(4) グリッド等出土遺物

総数331点を出土。

そのうち須恵壺5点、須恵高台椀1点、羽釜1点、
砥石2点、古銭1点を図示。



Fig.24 蒼海(14) 1トレグリッド等出土遺物①

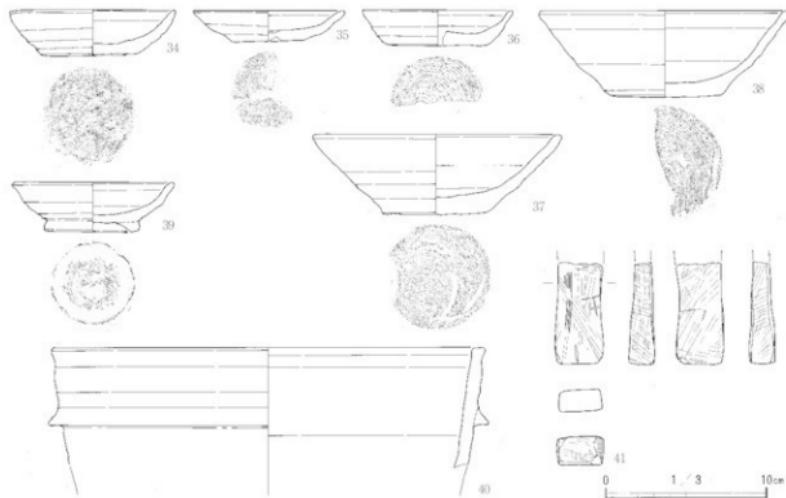


Fig.25 蒼海(14) 1トレグリッド等出土遺物②

4 2トレンチ遺構と遺物

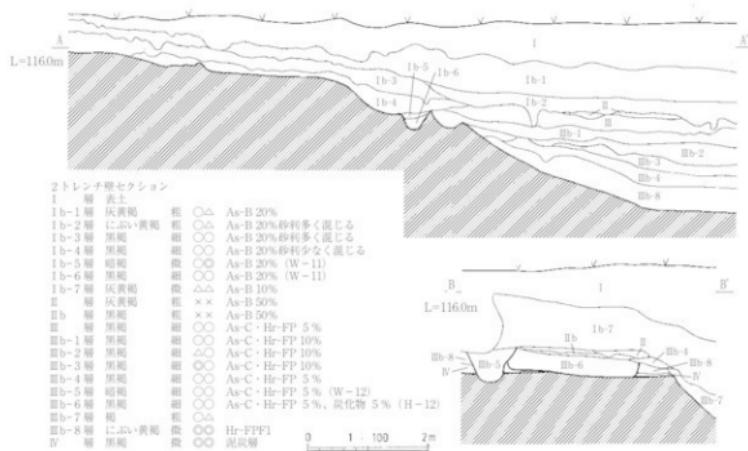


Fig.26 蒼海(14) 2トレンチ

(1) 穫穴住居跡

H-12号住居跡

位置 X243, Y139グリッド 構造 トレンチ調査のため詳細は不明であるが、東西2.62mを測る。時期 土層観察から上限はHr-FA、下限はAs-Bと考えられる。

(2) 溝跡

W-11溝跡

位置 X240、Y136・137グリッド 主軸方向 N-11°-W 長さ 1.5m 最大幅 上幅0.9m、下幅0.4m 深さ 42cm 形状等 U字形 時期 土層観察から中世以降と考えられる。

W-12号溝跡

位置 X242・243、Y139グリッド 主軸方向 N-32°-W 長さ 2.0m 最大幅 上幅1.1m、下幅0.5m 深さ 60cm 形状等 U字形 時期 土層観察から古代と考えられる。

5 3 トレンチ遺構と遺物

(1) 破壊遺構 (PL.2, 3)

位置 X269-271、Y69-77グリッド 主軸方向 3方向有り、一番古いものがN-3°-E、二番目がN-20°-W、一番新しいものがN-65°-W。 時期 覆土にHr-FAのブロックが認められるが上部がAs-C・Hr-PP混土層に削平されることと過年度調査の重複関係から、上限はHr-FA層下、下限は7世紀代と考えられる。

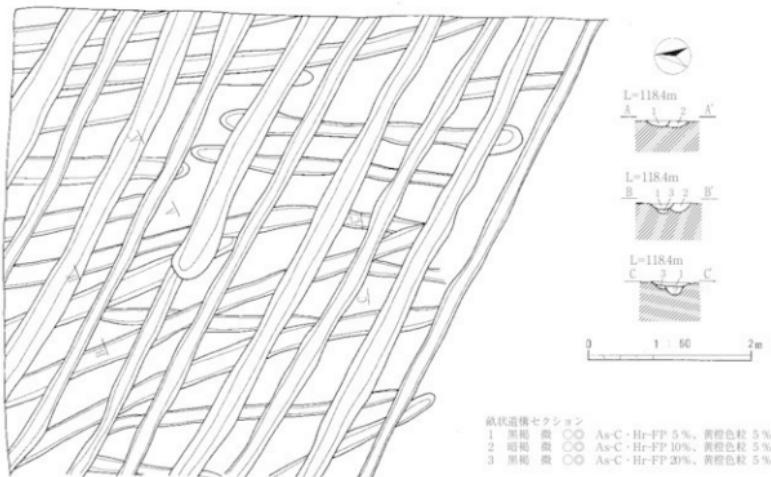


Fig.27 蒼海(14) 3 トレンチ状遺構

(2) 壁穴住居跡

H-11号住居跡 (PL.3)

位置 X269・270、Y74・75グリッド 主軸方向 N-93°-E 規模 東西3.14m、南北2.80m、壁現高38cm。面積 8.17m² 床面 平坦な床面。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向 N-95°-E、全長89cm、最大幅83cm、焚口部幅50cm。重複 D-12と重複し、新旧関係はD-12→本遺構の順である。出土遺物 総数151点。そのうち須恵壺1点、須恵高台碗4点、灰釉高台碗1点、羽釜1点、瓦1点、刀子1点、砥石1点を図示。時期 覆土や出土遺物から10世紀後半と考えられる。

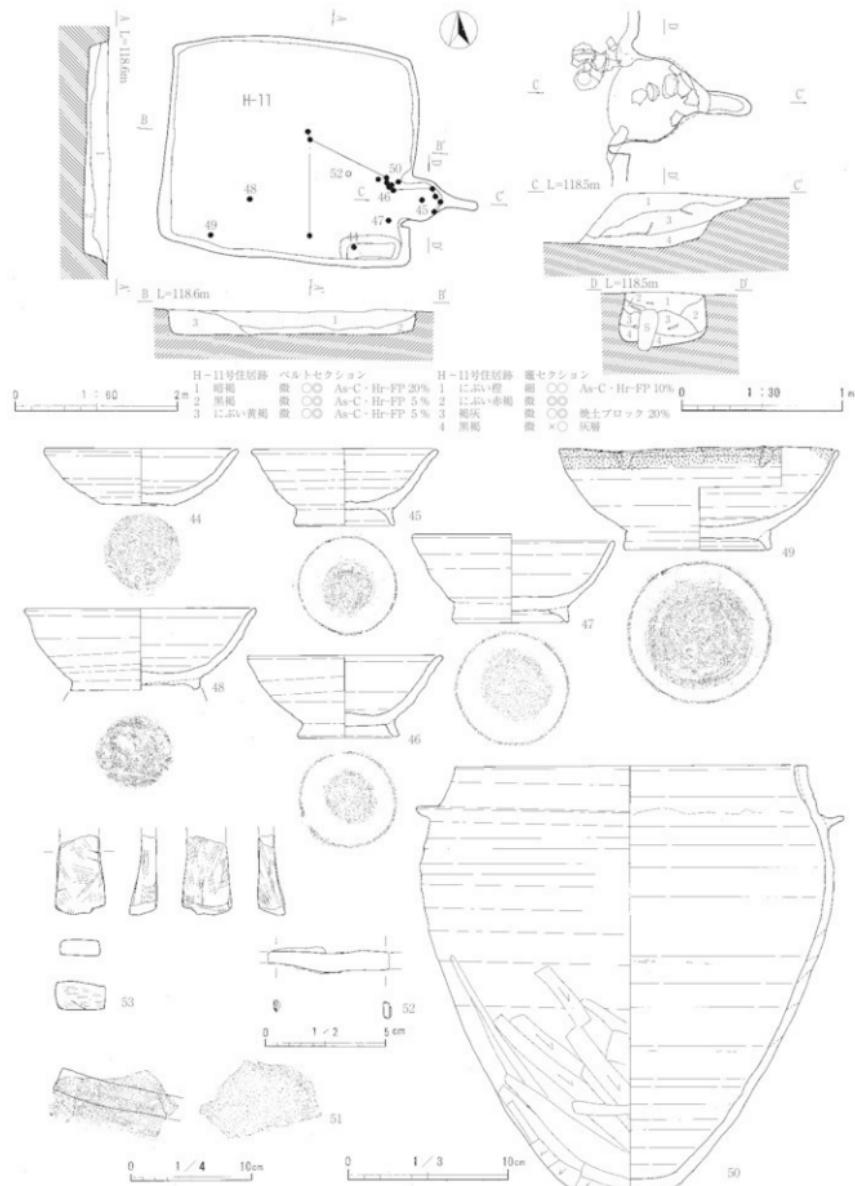


Fig.28 蒼海(14) 3トレ H-11号住居

(3) 挖立柱建物跡

B-11号掘立柱建物跡 (PL.3)

位置 X270、Y70・71グリッド 規模 柱穴 8 本の 1 間 × 2 間を想定、東西1.65m、南北4.20m。柱穴の詳細については、Tab.4 3 トレンチ造構計測表(2) 掘立柱建物跡を参照。面積 6.93m² 主軸方向 N-93°-E 重複 D-11と重複し、新旧関係は不明。時期 覆土や周りの造構の主軸方向との比較から10世紀代と考えられる。

B-12号掘立柱建物跡

位置 X270・271、Y73・74グリッド 規模 柱穴 8 本の 1 間 × 2 間を想定、東西2.70m、南北3.24m。柱穴の詳細については、Tab.4 3 トレンチ造構計測表(2) 掘立柱建物跡を参照。面積 8.74m² 主軸方向 N-91°-E 出土遺物 P 2 出土の須恵壺 1 点を図示。時期 覆土や出土遺物、造構の主軸方向から10世紀代と考えられる。備考 柱穴の P 2 と P 5 が南北柱間直線上にのってこないが、桁を先に組み梁を後からのせれば屋根部を組み上げることは可能であり、ここでは掘立柱建物跡と想定した。

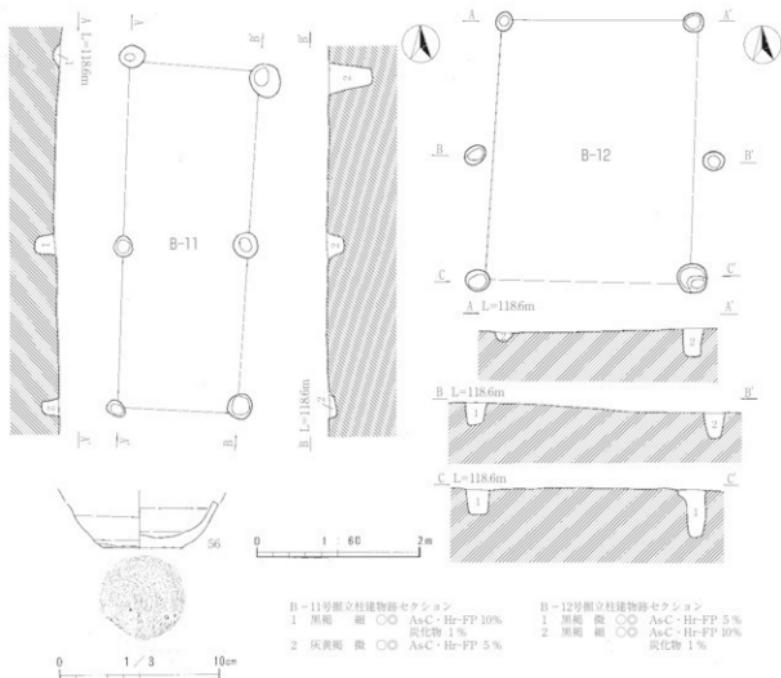


Fig.28 菅海(14) 3 トレ掘立柱建物跡

(4) 土坑・ピット

土坑・ピットについては、Tab.4 3 トレンチ造構計測表(3) 土坑・ピット (P40) を参照。そのうち、D-11出土の須恵高台輪 1 点、須恵壺 1 点を図示。

(5) グリッド等出土遺物

総数58点を出土。そのうち繩文深鉢 2 点、土師壺 2 点を図示。

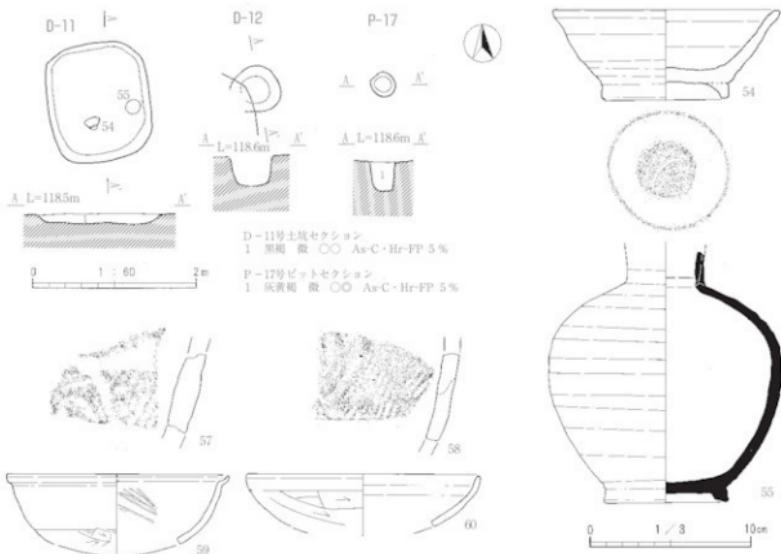


Fig.30 蒼海(14) 3トレ土坑・ピット・グリッド

6 4トレンチ遺構と遺物

(1) 窪状遺構 (PL.3)

位置 X276・277、Y31-38グリッド 主軸方向 3方向有り、一番古いものがN-77°-E、二番目がN-32°-W、一番新しいものがN-40°-E。時期 覆土にHr-FAのブロックが認められるが上部がAs-C・Hr-FP混土層に削平されることと過年度調査の重複関係から、上限はHr-FA降下、下限は7世紀代と考えられる。

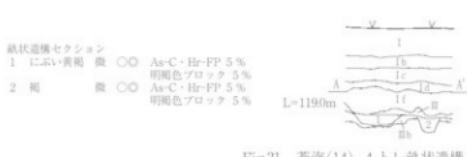


Fig.31 蒼海(14) 4トレ窓状遺構

(2) グリッド等出土遺物

総数36点を出土。そのうち綠釉陶1点を図示。



Fig.32 蒼海(14) 4トレグリッド等出土遺物

7 5 トレンチ遺構と遺物

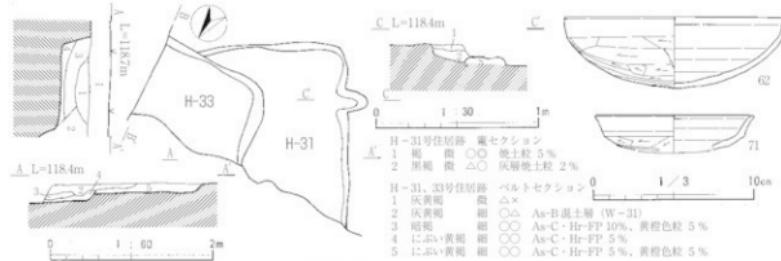
(1) 竪穴住居跡、竪穴状遺構

H-31号住居跡 (PL. 4)

位置 X204・205、Y175・176グリッド 主軸方向 N-116°-W 規模 東西 (1.84)m、南北 (2.33)m、壁現高10cm。面積 (2.38)m² 床面 平坦な床面。竪穴 大部分が壊されているが、西壁に位置する。主軸方向 N-118°-E、全長 (38)cm、最大幅 (46)cm、焚口部幅 (20)cm。重複 H-33・W-31と重複し、新旧関係は本遺構→H-33→W-31の順である。出土遺物 総数134点。そのうち土師壺1点を図示。時期 覆土や出土遺物、重複関係から7世紀後葉から8世紀前葉と考えられる。

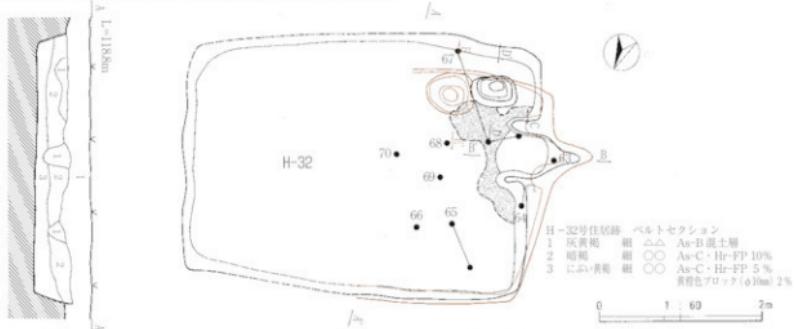
H-33号住居跡 (PL. 4)

位置 X205、Y175-176グリッド 主軸方向 N-92°-E 規模 東西 (1.53)m、南北 (1.12)m、壁現高16cm。面積 (1.46)m² 床面 平坦で堅緻な床面。竪穴 不明。重複 H-31・W-31と重複し、新旧関係はH-31→本遺構→W-31の順である。出土遺物 最初重複が分からずH-31で遺物を取り上げており、H-31床面より低い点で取り上げた土師壺1点を図示。時期 覆土や出土遺物、重複関係から7世紀後葉から8世紀前葉と考えられる。



H-32号住居跡 (PL. 4)

位置 X201~203、Y177・178グリッド 主軸方向 N-97°-W 規模 東西4.38m、南北3.34m、壁現高34cm。面積 13.03m² 床面 全体的に平坦な床面。竪穴 西壁中央南寄りに位置する。主軸方向 N-95°-W、全長89cm、最大幅83cm、焚口部幅50cm。貯蔵穴 P5: 長径54cm、短径38cm、深さ70cmの隅丸方形。P5: 長径55cm、短径55cm、深さ52cmの円形。重複 W-34と重複し、新旧関係は本遺構→W-34の順である。出土遺物 総数197点。そのうち土師壺5点、須恵器1点、土師壺1点、須恵器1点を図示。時期 覆土や出土遺物から7世紀後葉と考えられる。備考 竪掘り方調査の際、現竪のやや西側に壊れた竪を確認。竪を作り直し、住居も南側へ40cmほど拡張している可能性が考えられる。



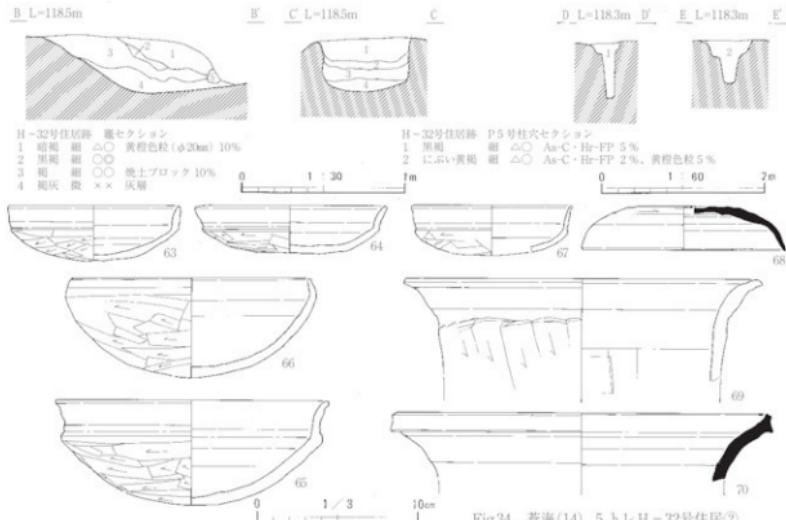


Fig.34 蒼海(14) 5トレ H-32号住居②

H-34号住居跡 (PL. 4)

位置 X200・201, Y178グリッド 主軸方向 N-74°-E 規模 東西 (3.06)m、南北3.42m、壁現高18cm。面積 (7.71)m² 床面 全体的に平坦な床面。電 不明。周溝 北壁・東壁の一部・南壁を巡る。重複D-44と重複し、新旧関係は本遺構→D-44の順である。出土遺物 総数161点。そのうち土師壺1点、土師瓶1点、土師甕1点を図示。時期 覆土や出土遺物から7世紀後葉と考えられる。

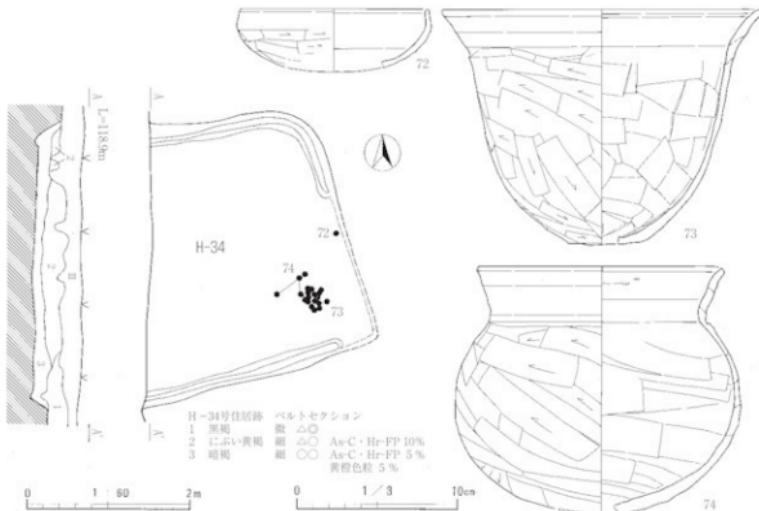


Fig.34 蒼海(14) 5トレ H-34号住居

H-35号住居跡

位置 X200、Y176・177グリッド 主軸方向 N-70°-E 規模 東西(1.55)m、南北(3.66)m、壁現高14cm。面積(2.09)m² 床面部分的に堅硬な貼り床。竈不明。周溝東壁の一部・南壁を巡る。重複D-38と重複し、新旧関係は本遺構→D-38の順である。出土遺物 総数6点。そのうち土師壺1点を図示。

時期 覆土や出土遺物から7世紀代と考えられる。

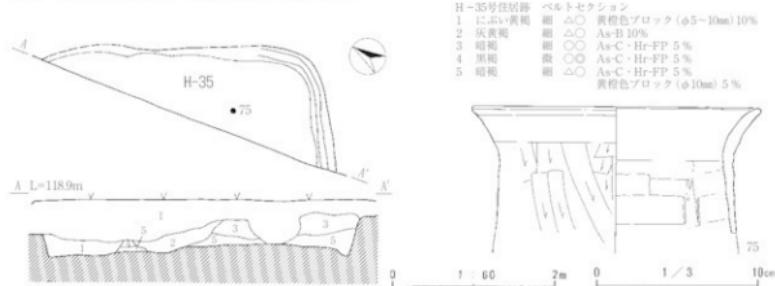


Fig.37 蒼海(14) 5トレ H-35号住居

H-36号住居跡

位置 X202・203、Y180グリッド 主軸方向 N-77°-E 規模 東西(5.32)m、南北(1.93)m、壁現高15cm。面積(5.49)m² 床面部分的に堅硬な貼り床。竈不明。周溝北壁を巡る。重複 D-32・D-49と重複し、新旧関係は本遺構→D-32・D-49の順である。出土遺物 総数74点。そのうち土師壺1点を図示。

時期 覆土や出土遺物から7世紀代と考えられる。

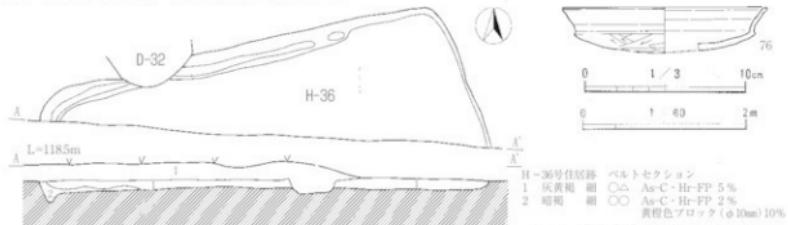


Fig.38 蒼海(14) 5トレ H-36号住居

H-37号住居跡

位置 X203・204、Y180グリッド 主軸方向 N-82°-E 規模 東西(4.62)m、南北(1.40)m、壁現高19cm。面積(7.84)m² 床面平坦で堅硬な床面。竈不明。重複 D-46・I-37と重複し、新旧関係は本遺構→D-46・I-37の順である。出土遺物 総数70点。そのうち土師壺1点を図示。時期 覆土や出土遺物から7世紀代と考えられる。

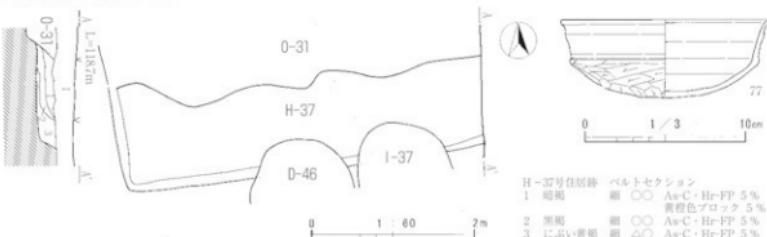


Fig.39 蒼海(14) 5トレ H-37号住居

H-38号住居跡

位置 X202・203、Y178・179グリッド 主軸方向 N-78°-E 規模 東西(4.54)m、南北(1.40)m、壁現高30cm。面積 (4.79)m² 床面 全体的に平坦な床面。電 不明。重複 H-39・O-31と重複し、新旧関係はH-39→本構造→O-31の順である。出土遺物 総数5点。そのうち土師壺1点、土師甕1点を図示。時期 覆土や出土遺物から7世紀後葉と考えられる。

H-39号住居跡

位置 X203・204、Y178・179グリッド 主軸方向 N-89°-E 規模 東西4.26m、南北(1.77)m、壁現高18。面積 (4.40)m² 床面 平坦な床面。電 不明。重複 H-38・O-31と重複し、新旧関係は本構造→H-38→O-31の順である。出土遺物 総数35点。そのうち須恵壺1点を図示。時期 覆土や出土遺物、重複関係から7世紀代と考えられる。

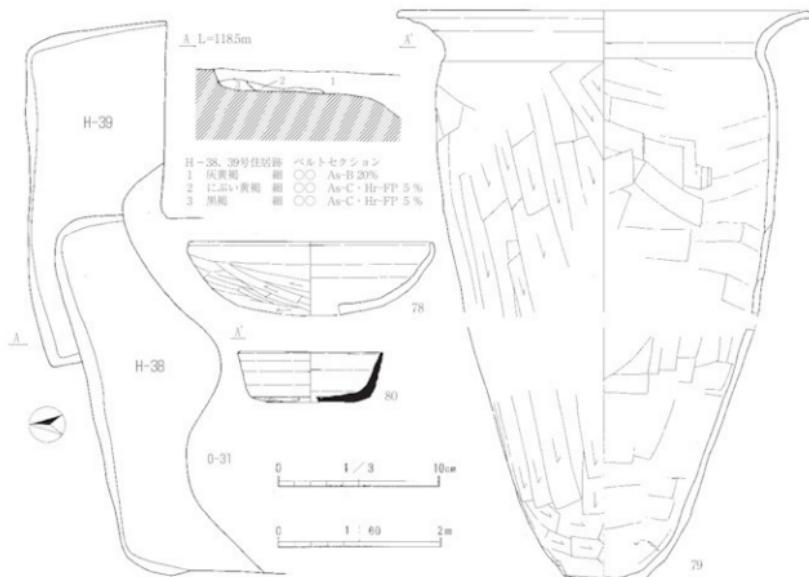


Fig.40 蒼海(14) 5トレH-38・39号住居

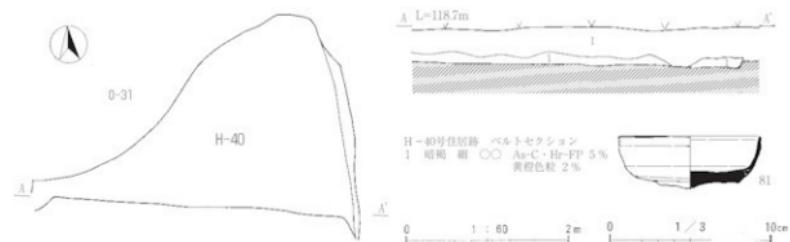


Fig.41 蒼海(14) 5トレH-40号住居

H-40号住居跡

位置 X200~201、Y180グリッド 主軸方向 N-84°-E 規模 東西(4.00)m、南北(2.84)m、壁現高8cm。面積 (5.41)m² 床面 平坦な床面。竪 不明。重複 W-33・D-45・O-31と重複し、新旧関係は本遺構→W-33・D-45・O-31の順である。出土遺物 総数14点。そのうち須恵窯1点を図示。時期 覆土や出土遺物から7世紀代と考えられる。

T-31号堅穴状遺構

位置 X205、Y179グリッド 主軸方向 N-90°-E
規模 東西(1.84)m、南北(1.08)m、壁現高24cm。
面積 (1.131)m² 床面 平坦な床面。重複 W-35
と重複し、新旧関係はW-35→本遺構の順である。出土遺物 総数3点。時期 覆土から中世以降と考えられる。



Fig.42 蒼海(14) 5トレT-31号堅穴状遺構

(2) 溝跡

W-31号溝跡 (PL.5)

位置 X199~205、Y173~176グリッド 主軸方向 N-88°-E 長さ 24.3m 最大幅 上幅(8.0)m、下幅1.6m 深さ 448cm 形状等 U字形 重複 H-31・H-32と重複し、新旧関係はH-31→H-32→本遺構の順である。出土遺物 総数143点。そのうち擂り鉢1点、培塿1点、石臼1点、銅錢1点を図示。時期 覆土から中世以降と考えられる。備考 蒼海域の古絵図には載っていないが、蒼海域の堀跡と考えられる。また、上層部より鉄さい500kgを出土。出土位置から、これらの鉄さいは本溝跡に直接関係するものとは考えられない。

W-32号溝跡 (PL.5)

位置 X198~200、Y177~180グリッド 主軸方向 N-10°-W 長さ 14.0m 最大幅 上幅(5.0)m、下幅3.5m 深さ 117cm 形状等 逆台形 重複 I-31と重複し、新旧関係は本遺構→I-31の順である。出土遺物 総数474点。そのうち土師器台1点、須恵高台窯1点を図示。時期 覆土にAs-B純層の堆積は認められないが、最下部の土層観察と出土遺物から古代と考えられる。

W-33号溝跡 (PL.5)

位置 X201、Y176~180グリッド 主軸方向 N-1°-W 長さ 18.9m 最大幅 上幅1.42m、下幅1.10m 深さ 16cm 形状等 U字形 重複 H-34・W-31・D-45・I-32・I-33・O-31と重複し、新旧関係はH-34・W-31・O-31→本遺構→D-45・I-32・I-33の順である。出土遺物 総数59点。時期 覆土から中世以降と考えられる。

W-34号溝跡

位置 X202~205、Y177~178グリッド 主軸方向 N-80°-E 長さ 9.0m 最大幅 上幅1.63m、下幅1.0m 深さ 25cm 形状等 U字形 重複 H-32と重複し、新旧関係はH-32→本遺構の順である。出土遺物 総数143点。時期 覆土から古代と考えられる。

W-35号溝跡

位置 X204~205、Y178~179グリッド 主軸方向 N-80°-E 長さ 4.3m 最大幅 上幅1.0m、下幅0.5m 深さ 36cm 形状等 U字形 重複 T-31と重複し、新旧関係は本遺構→T-31の順である。出土遺物 総数79点。時期 覆土から古代と考えられる。

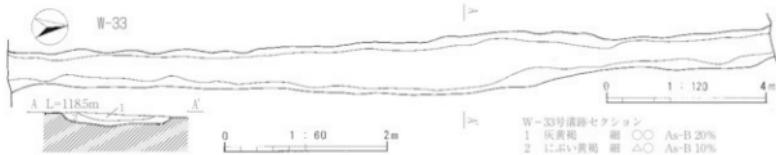


Fig.43 蒼海(14) 5トレW-33号溝跡

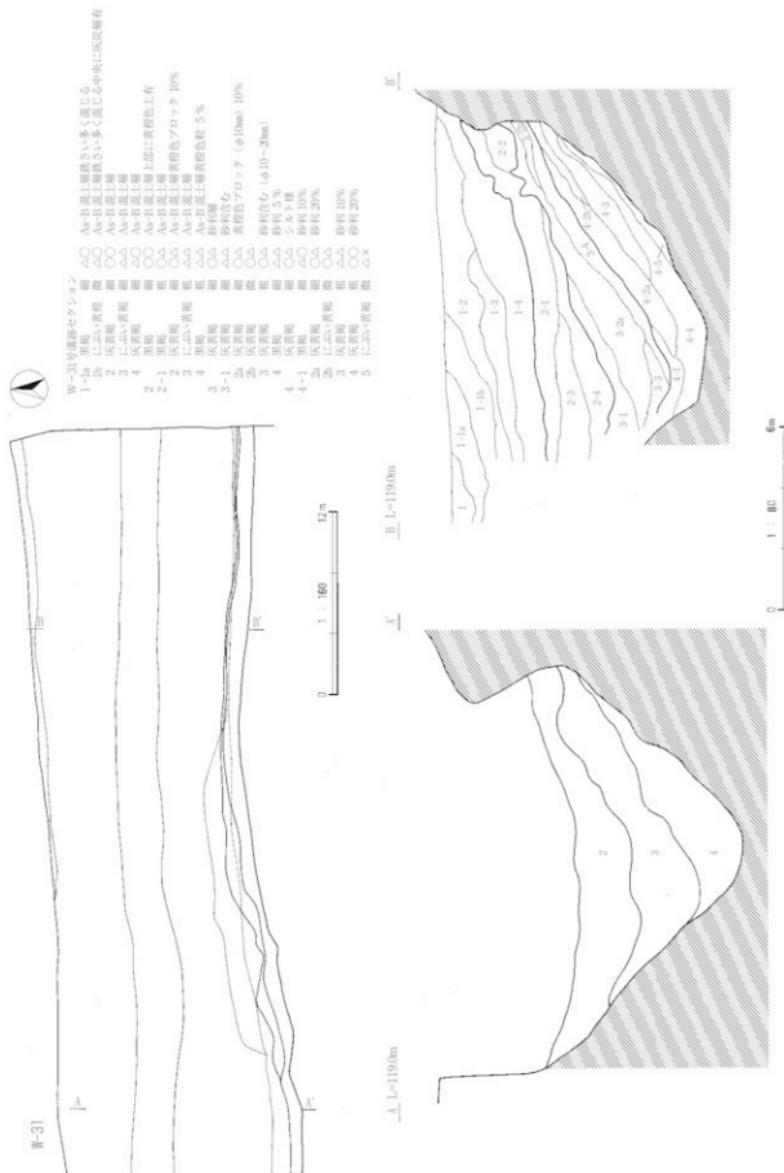


Fig.44 薦海(14) 5ト LW-31号満跡

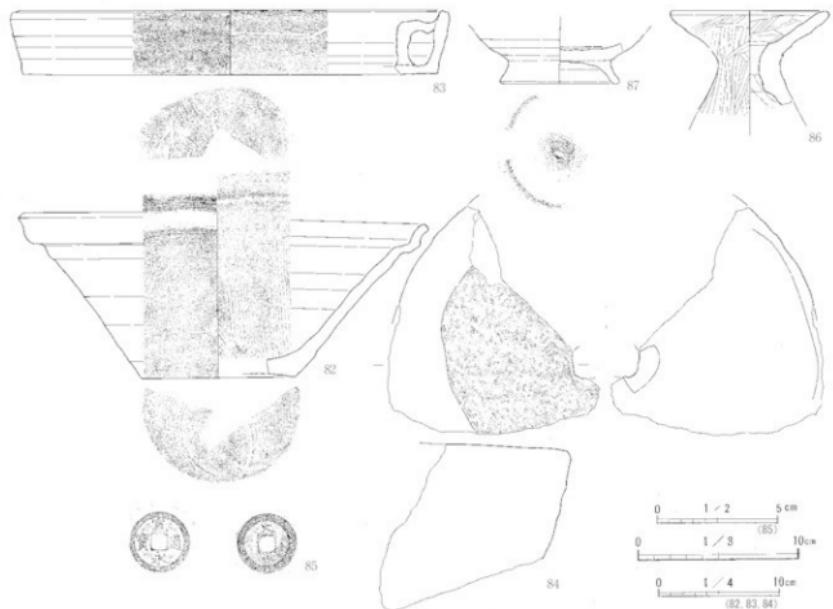
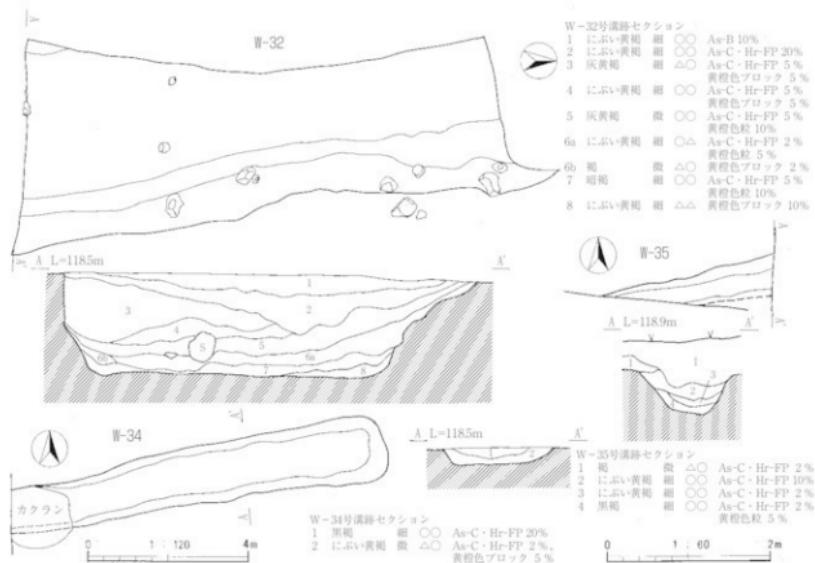
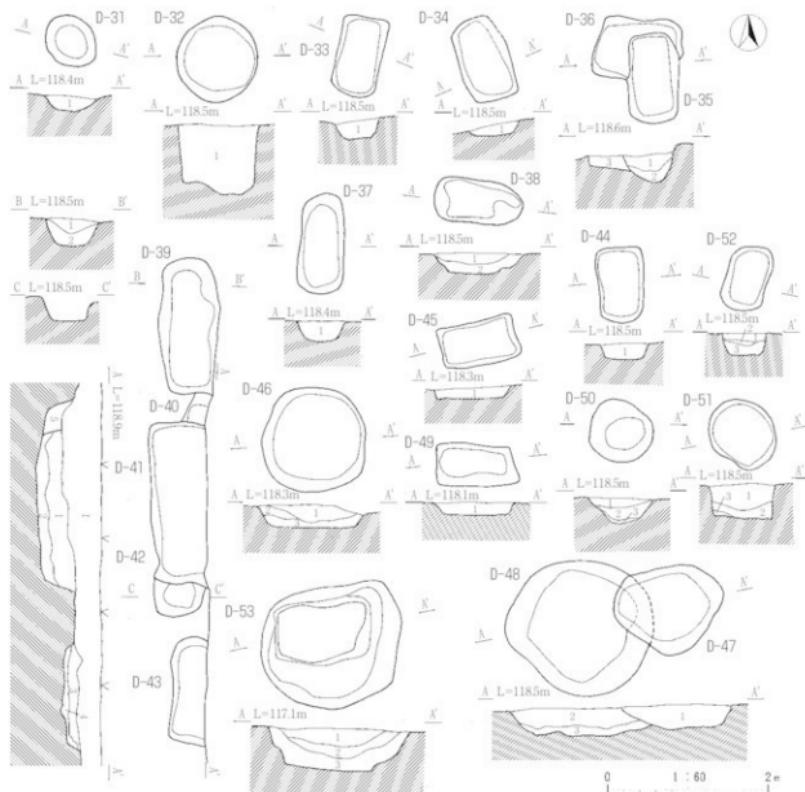


Fig.45 萩海(14) 5トレ溝跡

(3) 土坑・井戸跡 (PL.5)

土坑・井戸跡については、Tab.5 5トレチ造構計測表(3)土坑・井戸跡(P.41)を参照のこと。

そのうち、D-51出土の須恵壺1点、I-33出土の石臼1点、I-36出土の碇1点、I-36出土の石臼1点、I-36出土の板碑1点、I-37出土の内耳鍋1点、I-37出土の瓦1点、I-39出土の石臼1点、I-40出土のカワラケ2点、I-40出土の内耳鍋2点、I-40出土の火鉢1点、I-40出土の石臼1点、I-41出土の鍋1点、I-41出土の内耳鍋1点を図示。



D-31, 32号土坑セクション

1 黒褐 織 ○○ As-B 10%

D-33, 34, 36号土坑セクション

1 黑褐 織 △△ As-B 20%

2 にい黄褐 織 ○○ As-B 10%

3 黄褐 織 △△ As-B 10%

D-37号土坑セクション

1 黑褐 織 △× As-B 10%

D-38号土坑セクション

1 にい黄褐 織 ○○ As-C-H-FP 5%

2 にい黄褐 織 ○○ As-C-H-FP 5%

D-39号土坑セクション

1 にい黄褐 織 ○△ As-B 20%

2 黄褐 織 △△ As-B 20%

D-40, 41, 43号土坑セクション

1 黑褐 織 ○○ As-B 20% (D-41)

2 黄褐 織 ○△ As-B 20%

3 黄褐 織 ○○ As-B 10%、黄褐色2 5% (D-41)

4 にい黄褐 織 ○○ As-B 10% (D-43)

5 にい黄褐 織 ○○ As-B 20%、黄褐色 5% (D-40)

D-44, 45, 49号土坑セクション

1 黑褐 織 ○○ As-B 10%

D-50号土坑セクション

1 にい黄褐 織 ×× As-B 5%

2 黑褐 織 △△ As-B 10%、黄褐色 5%

3 黄褐 織 ○○ 黄褐色10%

D-51号土坑セクション

1 黑褐 織 ○○ As-B 10%

2 黑褐 織 △△ As-B 10%、黄褐色 5%

3 にい黄褐 織 ○○ 黄褐色10%

D-52号土坑セクション

1 黑褐 織 ○○ As-B 20%

2 黄褐 織 ○○ As-B 20%

3 にい黄褐 織 ○○ As-B 20%

D-53号土坑セクション

1 黑褐 織 ○○ As-C-H-FP 5%、黄褐色 5%

2 にい黄褐 織 ○○ As-C-H-FP 5%、黄褐色 5%

3 にい黄褐 織 ○○ As-C-H-FP 5%、黄褐色 5%

D-47, 48号土坑セクション

1 黑褐 織 ○○ As-B 10%、黄褐色 20%

2 にい黄褐 織 ○○ As-B 10%、黄褐色 ブロック 5%

3 にい黄褐 織 ○○ As-B 10%、黄褐色 10%

D-49号土坑セクション

1 にい黄褐 織 ×× As-B 20%

2 黑褐 織 ○○ As-B 20%

3 にい黄褐 織 ○○ As-B 20%

Fig.46 菅海(14) 5トレ土坑

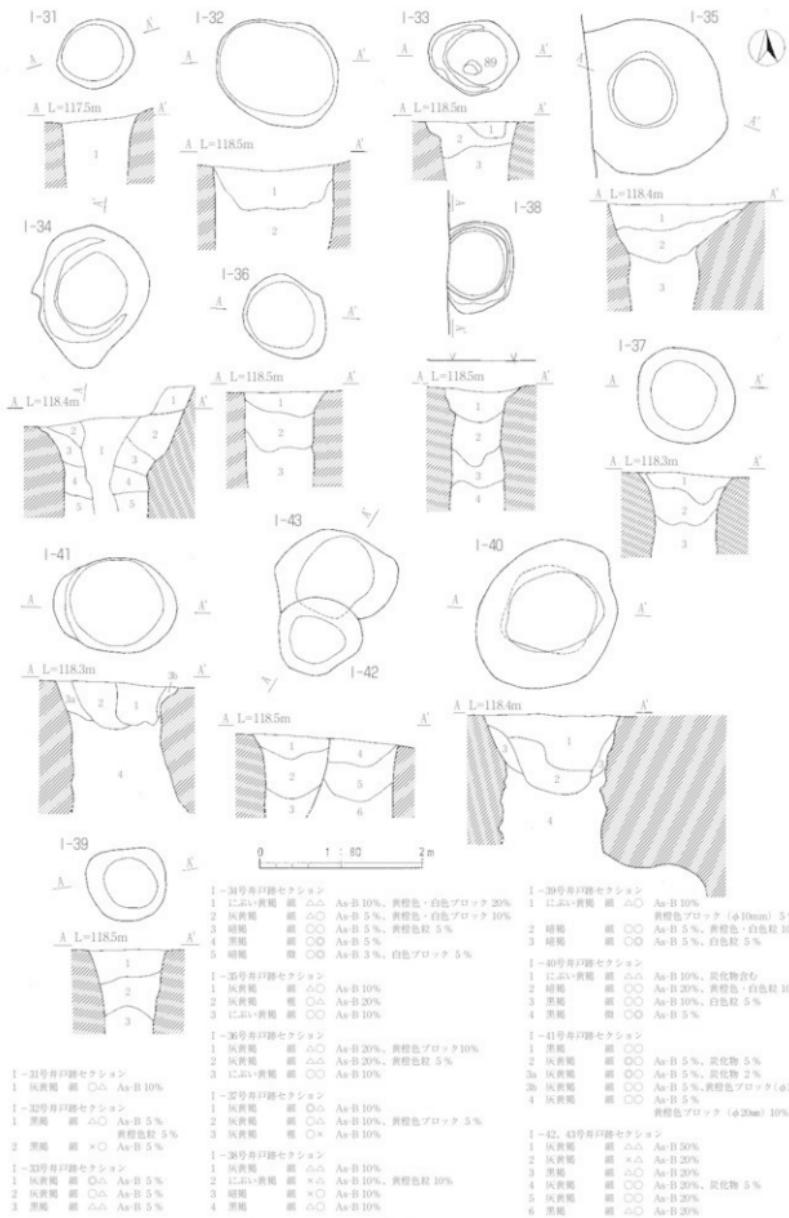


Fig.47 菲海(14) 5トレ井戸跡

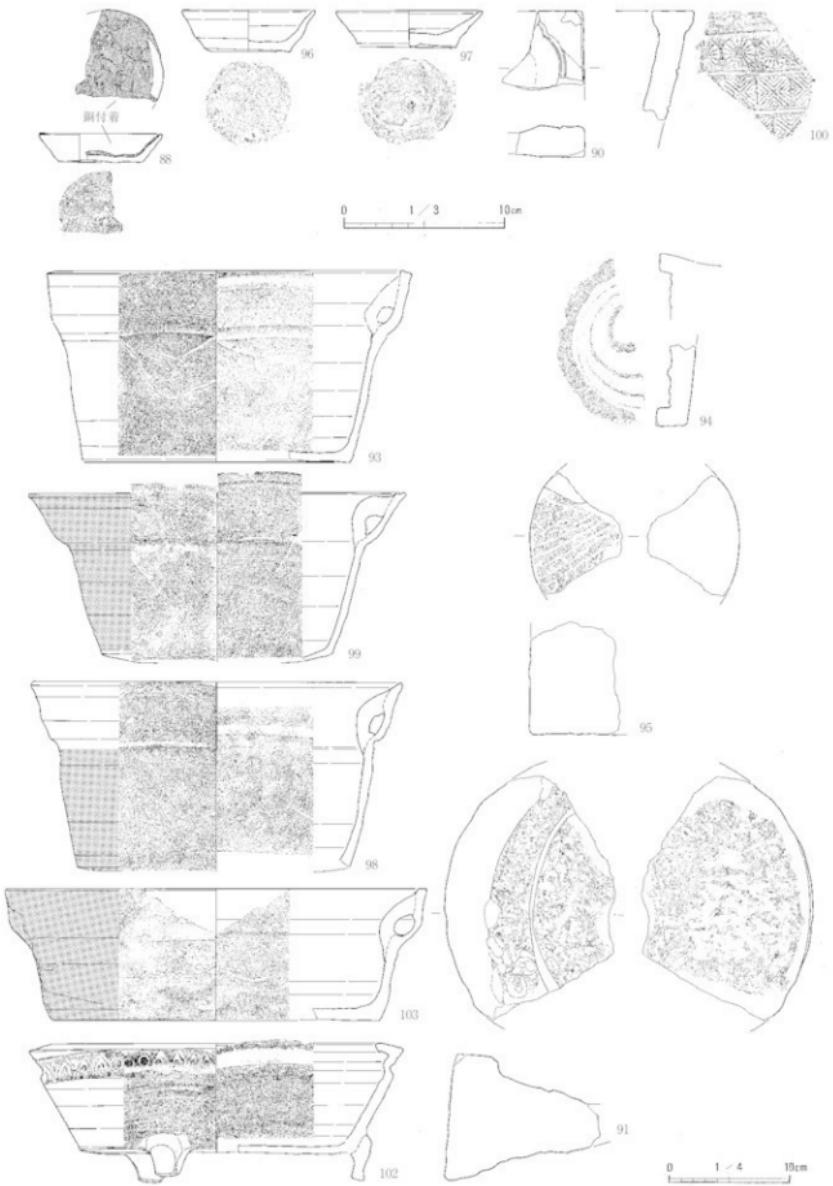


Fig.48 蒼海(14) 5トレンチ坑・井戸跡出土遺物①



Fig.49 葛海(14) 5トレス坑・井戸跡出土遺物②

(4) 落ち込み

位置 X200~204、Y178~180グリッド 重複 H-37・H-38・H-39・H-40・W-33・D-31・D-37・I-34・I-40・I-41と重複し、新旧関係はH-37・H-38・H-39・H-40→本造構→W-33・D-31・D-37・I-34・I-40・I-41の順である。 出土遺物 総数405点。そのうち埴輪1点、綠釉陶器2点を図示。
時期 覆土から中世以降と考えられる。

(5) グリッド等出土遺物

総数2054点を出土。そのうち土師壺1点、須恵壺1点、鏡1点、鐵鏃1点、板碑1点を図示。

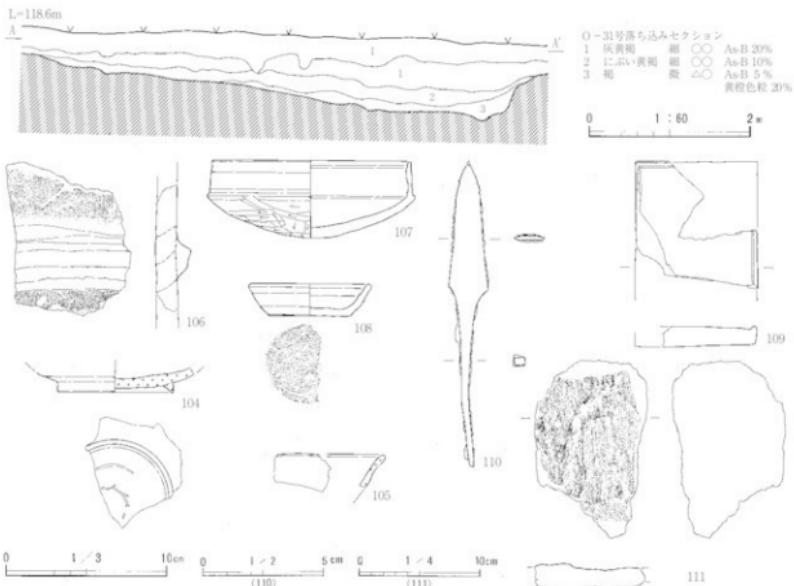


Fig.50 蒼海(14) 5トレ落ち込み・グリッド等出土遺物

8 6トレンチ遺構と遺物

(1) 壊穴住居跡

H-61号住居跡

位置 X287・288、Y79グリッド 主軸方向 N-72°-E 規模 東西 [6.0]m、南北 (2.5)m 電 不明。重複 H-62と重複し、新旧関係はH-62→本造構の順である。 出土遺物 総数7点。そのうち土師壺1点を図示。
時期 覆土や出土遺物から8世紀代と考えられる。

H-62号住居跡

位置 X285・286、Y79グリッド 主軸方向 N-117°-E 規模等 詳細は不明。重複 H-61・H-63と重複し、新旧関係は本造構→H-61・H-63の順である。 出土遺物 総数5点。
時期 覆土や出土遺物、重複関係から上限はHr-FP降下、下限は8世紀代と考えられる。

H-63号住居跡

位置 X285・286、Y79グリッド 規模等 詳細は不明。 重複 H-62重複し、新旧関係は本遺構→H-62の順である。 出土遺物 総数4点。そのうち灰釉高台椀1点を図示。 時期 覆土や出土遺物から10世紀代と考えられる。

H-64号住居跡

位置 X284、Y79グリッド 規模等 詳細は不明。 電 灰層の抜がりから東壁に位置すると考えられるが詳細は不明。 出土遺物 総数3点。そのうち灰釉高台椀1点を図示。 時期 覆土や出土遺物から上限はHr-FP下段、下限はAs-B下段と考えられる。

(2) 溝跡

W-61号溝跡

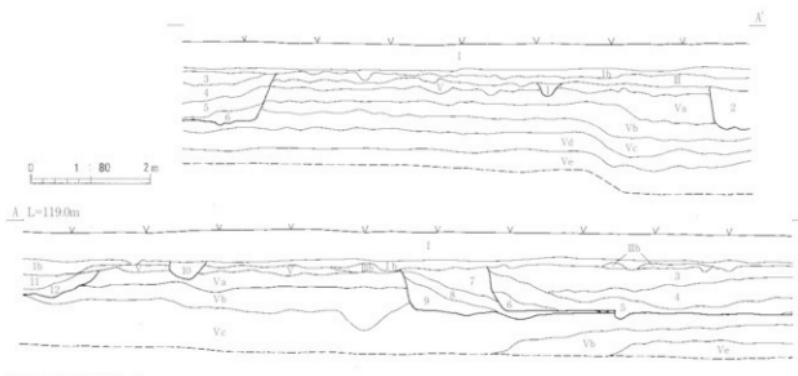
位置 X289、Y79グリッド 主軸方向 N-2°-E 長さ 10m 最大幅 上幅0.25m、下幅0.10m 深さ 22cm 形状等 U字形 時期 覆土から古代と考えられる。

W-62号溝跡

位置 X285、Y79グリッド 主軸方向 N-18°-W 長さ 13m 最大幅 上幅0.55m、下幅0.22m 深さ 28cm 形状等 U字形 時期 覆土から古代と考えられる。

(3) 土坑

土坑については、Tab.6 6 トレンチ遺構計測表(3) 土坑(P.42)を参照のこと。



6トレンチ 北壁セクション

I 层 表土	1. 暗褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP 20% (W-61)
Ib層 明褐色	2. 暗褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP 10%, 灰化物 5% (D-61)
前まり○ 粘性○ 鉄分凝集層	3. 暗褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP 2% (D-61)
II 層 黒褐色	4. 黒褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP 5%, 灰化物 1% (H-61)
前まり○ 粘性○ 古代の包含層	5. 暗褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP 5% (H-61)
III 層 にごい黄土	6. 黑褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP 3% (H-61)
前まり○ 粘性○ Hr-FP1	7. 黑褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP 10% (H-62)
V 层 黄褐色	8. 黑褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP 10% (H-62)
前まり○ 粘性○ 破片層の薄移層	9. 黑褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP 2% (H-62)
Vla層 明褐色	10. 黑褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP 5% (W-62)
前まり○ 粘性○ 破片層	11. 黑褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP 20% (H-64)
Vlb層 黄褐色	12. 黑褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP 10%, 灰混じる (H-64)
Vlc層 黒褐色	
前まり○ 粘性○ 破片層	
Vld層 底黄褐色	
前まり○ 粘性○ 破片層	
Vle層 底黄褐色	
前まり○ 粘性○ 破片層	



0 1 / 3 10cm

Fig.51 蒼海(14) 6トレンチ

Tab.2 1トレンチ遺構計測表

(1) 壁穴住居跡

遺構名	位 置	規 模			面積 (m ²)	主軸方向	遺		周 講	主な出土遺物		
		東西 (m)	南北 (m)	壁厚高 (cm)			位 置	構築材		土師器	須恵器	その他
H-1	X199 Y129・130	(139)	292	21	(326)	N-94°-E	東壁 中央南寄り	川原石	無	环・羽釜	瓦	
H-2	X200・201 Y129	(190)	(280)	30	(320)	N-60°-E	-	-	無	环・甕		
H-3	X199・200 Y133・134	(312)	(330)	33	(848)	N-74°-E	東壁 中央南寄り	土師甕	無	环・甕		
H-4	X200・201 Y133・134	(275)	408	16	(890)	N-103°-E	-	-	無	环・高台輪	釘	
H-5	X200・201 Y131・132	(300)	(273)	20	(526)	N-53°-E	-	-	無	环		
H-6	X199・200 Y134・135	(126)	(227)	14	(262)	N-77°-E	-	-	無		灰積	
H-7	X199・200 Y129・130	(143)	435	36	(517)	N-80°-E	東壁 中央南寄り	-	無	环・甕	环	
H-8	X200・201 Y129・130	(364)	420	5	(1501)	N-70°-E	-	-	無			
H-9	X199・200 Y133・134	318	(400)	6	(1149)	N-91°-E	東壁 中央南寄り	-	無		环	
H-10	X200・201 Y129・130	(340)	(400)	15	(1189)	N-80°-E	-	-	無			

(2) 溝跡

遺構名	位 置	長さ (m)	深さ (cm)		上幅 (cm)		下幅 (cm)		主軸方向	断面形	備 考
			最大	最小	最大	最小	最大	最小			
W-1	X199・201 Y134	5.86	58	32	218	200	113	92	N-90°-E	U字形	銅錢、中世以降

(3) 土坑・ピット

遺構名	位 置	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	形 状		備 考
					最大	最小	
D-1	X200 Y129・130		94	45	14	楕円形	土師1
D-2	X199 Y129・130	(150)		86	45	隅丸方形か	土師2、須恵1
D-3	X200 Y129		78	55	21	隅丸方形	須恵1
D-4	X200 Y131		140	84	33	楕円形	須恵1
D-5	X199 Y133		94	68	39	楕円形	土師1、須恵1
D-6	X200・201 Y135	(153)	(104)	14	14	楕円形	土師6、須恵1
P-1	X200 Y133		52	51	16	円形	土師2
P-2	X200・201 Y131		55	50	14	円形	土師5、須恵1
P-3	X201 Y131		50	30	8	楕円形	土師1、須恵1

Tab.3 2トレンチ遺構計測表

(1) 壁穴住居跡

遺構名	位 置	規 模			面積 (m ²)	主軸方向	遺		周 講	主な出土遺物		
		東西 (m)	南北 (m)	壁厚高 (cm)			位 置	構築材		土師器	須恵器	その他
H-12	X243 Y139	262	-	-	-	-	-	-	-			

(2) 溝跡

遺構名	位 置	長さ (m)	深さ (cm)		上幅 (cm)		下幅 (cm)		主軸方向	断面形	備 考
			最大	最小	最大	最小	最大	最小			
W-11	X240 Y136・137	1.50	42	-	90	-	40	-	N-11°-W	U字形	中世以降
W-12	X242・243 Y139	2.00	60	-	110	-	50	-	N-32°-W	U字形	古代

Tab. 4 3 レンチ造構計測表

(1) 壁穴住居跡

遺構名	位 置	規 横			面積 (m ²)	主軸方向	遺		周溝	主な出土遺物		
		東西 (m)	南北 (m)	壁現高 (cm)			位置	構築材		土師器	須恵器	その他
H-11	X269・270 Y74・75	3.14	2.80	38	8.17	N-93°-E	東壁 中央寄り	川原石	無	环	高台輪・瓦・紙石・羽釜	刀子

(2) 据立柱建物跡

遺構名	位 置	規 横			面積 (m ²)	主軸方向	柱穴			備 考	
		東西 (m)	南北 (m)	壁現高 (cm)			番号	長軸(cm)	短軸(cm)		
B-11	X270 Y70・71	8	1.65	4.20	6.93	N-93°-E	P1	30	28	10	円形
							P2	26	22	25	円形
							P3	24	18	20	円形
							P4	32	30	10	円形
							P5	30	30	20	円形
							P6	42	38	54	円形
B-12	X270・271 Y73・74	8	2.70	3.24	8.74	N-91°-E	P1	23	20	10	円形
							P2	25	21	28	円形
							P3	28	24	31	円形
							P4	40	35	58	円形
							P5	26	22	32	円形
							P6	24	22	32	円形

(3) 土坑・ピット

遺構名	位 置	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	形 状	備 考
D-11	X270 Y71	150	125	10	隅丸方形	須恵2
D-12	X270 Y74	58	(55)	36	円形	土師4、須恵1
P-17	X271 Y71	32	30	39	円形	

Tab. 5 5 レンチ造構計測表

(1) 壁穴住居跡、壁穴状造構

遺構名	位 置	規 横			面積 (m ²)	主軸方向	遺		周溝	主な出土遺物		
		東西 (m)	南北 (m)	壁現高 (cm)			位置	構築材		土師器	須恵器	その他
H-31	X204・205 Y175・176	(1.84)	(2.33)	10	(2.38)	N-116°-W	西壁		無	环		
H-32	X201・203 Y177・178	4.38	3.34	34	13.03	N-97°-W	西壁 中央寄り		無	环・堺	堺・堺	
H-33	X205 Y175・176	(1.53)	(1.12)	16	(1.46)	N-92°-E	-	-	無	环		
H-34	X200・201 Y178	(3.06)	3.42	18	(7.71)	N-74°-E	-	-	有	环・堺・瓶		
H-35	X200 Y176・177	(1.55)	(3.66)	14	(2.09)	N-70°-E	-	-	有	堺		
H-36	X202・203 Y180	(5.32)	(1.93)	15	(5.49)	N-77°-E	-	-	有	环		
H-37	X203・204 Y180	(4.62)	(1.40)	19	(7.84)	N-82°-E	-	-	無	环		
H-38	X202・203 Y178・179	(4.54)	(1.40)	30	(4.79)	N-78°-E	-	-	無	环・堺		
H-39	X203・204 Y178・179	4.26	(1.77)	18	(4.40)	N-89°-E	-	-	無		环	
H-40	X200・201 Y180	(4.00)	(2.84)	8	(5.41)	N-84°-E	-	-	無		环	
T-31	X205 Y179	(1.84)	(1.08)	24	(1.13)	N-90°-E	-	-	無			

(2) 溝跡

遺構名	位置	長さ (m)	深さ (cm)		上幅 (cm)		下幅 (cm)		主軸方向	断面形	備考
			最大	最小	最大	最小	最大	最小			
W-31	X199-205 Y173-176	24.30	448	415	(800)	-	160	135	N-88°-E	U字形	すり鉢・焰焰、中世以降
W-32	X198-200 Y177-180	14.00	117	89	(500)	-	350	-	N-10°-W	逆台形	器台・高台楕、古代
W-33	X201 Y176-180	18.90	16	6	142	65	110	40	N-1°-W	U字形	中世以降
W-34	X202-205 Y177-178	9.00	25	13	163	112	100	78	N-80°-E	U字形	古代
W-35	X204-205 Y178-179	4.30	36	18	100	70	50	38	N-80°-E	U字形	古代

(3) 土坑・井戸跡

遺構名	位 置	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	形 状	備 考
D-31	X202 Y180	70	57	19	梢円形	
D-32	X202 Y180	105	99	76	円形	
D-33	X199 Y178	100	56	27	隅丸方形	
D-34	X199 Y178	104	63	14	隅丸方形	
D-35	X199 Y177	110	62	46	隅丸方形	
D-36	X199 Y177	110	74	19	隅丸方形	
D-37	X202 Y179-180	124	58	22	隅丸方形	土師10
D-38	X200-201 Y177	110	52	29	隅丸方形	
D-39	X199-200 Y176	166	73	31	隅丸方形	
D-40	X200 Y176	(40)	(20)	23	不明	
D-41	X199-200 Y176-177	196	(68)	44	隅丸方形	
D-42	X199-200 Y177	60	40	33	不明	
D-43	X200 Y177	132	(40)	17	隅丸方形	
D-44	X200-201 Y178	94	52	16	隅丸方形	
D-45	X201 Y180	90	52	15	隅丸方形	
D-46	X203 Y180	128	126	28	円形	土師10
D-47	X206 Y178	140	110	32	不整形	土師1
D-48	X204-205 Y178	170	165	30	円形	
D-49	X201-202 Y180	95	50	30	隅丸方形	土師5、鉄3
D-50	X202-203 Y176	80	70	31	円形	
D-51	X201-202 Y177	90	80	42	円形	土師2、須恵2、鉄4、硬2
D-52	X199 Y177	86	53	27	隅丸方形	
D-53	X204 Y176	170	150	55	不整形	土師1、須恵1
I-31	X199 Y178	93	84	-	円形	土師1、瓦1、鉄8
I-32	X201 Y176-177	156	130	-	梢円形	土師6、須恵2、石1、陶器3
I-33	X201 Y177	110	92	-	梢円形	土師23、須恵3、瓦1、石2、陶器33
I-34	X200 Y180	172	127	-	梢円形	土師1、須恵5
I-35	X199 Y176-177	190	(160)	-	円形	

遺構名	位 置	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	形 状	備 考
I - 36	X201 Y177 - 178	110	92	—	橢円形	土師7、須恵8、磚1、石2
I - 37	X203 - 204 Y180	120	116	—	円形	土師5、須恵3、瓦1、陶器42
I - 38	X199 Y176	110	(80)	—	橢円形	土師5、石2
I - 39	X204 Y177	99	88	—	円形	土師1、須恵3、石4
I - 40	X203 - 204 Y179	203	162	—	橢円形	土師29、須恵14、石4、陶器24
I - 41	X203 Y179	122	113	—	円形	土師43、須恵5、瓦2、鉄1、石3、陶器26
I - 42	X203 Y175 - 176	102	95	—	円形	土師6、須恵2、瓦6、石9、陶器85
I - 43	X203 Y175 - 176	152	110	—	橢円形	

Tab. 6 6トレンチ遺構計測表

(1) 壁穴住居跡

遺構名	位 置	規 模			面積 (m ²)	主軸方向	遺 墓		周溝	主な出土遺物		
		東西 (m)	南北 (m)	壁現高 (cm)			位 置	構築材		土師器	須恵器	その他の
H - 61	X287 - 288 Y79	[6.0]	(250)	—	—	N-72°-E	—	—	—	坏		
H - 62	X285 - 286 Y79	—	—	—	—	N-117°-E	—	—	—			
H - 63	X285 - 286 Y79	—	—	—	—	—	—	—	—		坏	
H - 64	X284 Y79	—	—	—	—	東壁			—			灰釉

(2) 溝跡

遺構名	位 置	長さ (m)	深さ (cm)		上幅 (cm)		下幅 (cm)		主軸方向	断面形	備 考
			最大	最小	最大	最小	最大	最小			
W - 61	X289 Y79	1.00	22	—	25	—	10	—	N-2°-E	U字形	古代
W - 62	X285 Y79	1.30	28	—	55	—	22	—	N-18°-W	U字形	古代

(3) 土坑

遺構名	位 置	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	形 状	備 考
D - 61	X289 Y79	—	—	70	—	

注) 1 壁穴住居跡等の主軸方向は、東西辺の傾きで計測。

2 溝跡の備考には、主な出土遺物と時期を記載。

3 土坑等の備考には、出土した遺物の種類と数を記載。

Tab.7 遺物觀察表

(1トレンド)

番号	出土遺物 名	器種名	①口径 ②底径	③器高 ④厚度	①黏土 ②焼成 ③色調 ④過存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	H-1 覆土	陶器 环	①(160) ② (27) ③ -	④(10) ⑤ 2.5 ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3にふい黄 ⑩3にふい黄 ⑪3にふい黄	輪縁整形。口縁・体部・外縁、内・外面擦で。底部：欠損。 一粒作り。前面：布目有。凸面：撫で。側面：面取り1回。	31はか	小型、 焼成化
2	H-1 覆土	瓦 平瓦	①長さ(180) ②厚さ(28) ③ -	④(180) ⑤ 28 ⑥ -	⑦細粒、白色粒子含む ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	一粒作り。前面：布目有。凸面：撫で。側面：面取り2回。	25	
3	H-1 覆土	瓦 平瓦	①長さ(180) ②厚さ(28) ③ -	④(180) ⑤ 28 ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：短くやや外縁、内・外面擦で。底部：欠損。 2、4	37	
4	H-2 覆土	土器 环	①(120) ② (27) ③ -	④(120) ⑤ 27 ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：短くやや外縁、内・外面擦で。底部：欠損。	6	
5	H-2 床直	土器 小要	①(132) ② (47) ③ -	④(132) ⑤ 47 ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：外縁、内・外面擦で。脇部：やや膨らみを持つ。底部：欠損。	46はか	藏天井
6	H-3 覆土	土器 环	①(124) ② 39 ③ -	④(124) ⑤ 39 ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：短くやや外縁、内・外面擦で。交換点に弱い接合。 底部：浅い丸底、内面擦で、外縁面削り。	36	
7	H-3 覆土	土器 要	① 195 ② 38.0 ③ 36	④ 195 ⑤ 38.0 ⑥ 36	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：大きく外縁、内・外面擦で。 底部：膨らみはほとんどなく、内面擦で。外縁斜位削削り。 底径：約36cmの丸底。木箱有。	55はか	藏天井
8	H-3 覆土	土器 要	① 186 ② 29.5 ③ 51	④ 186 ⑤ 29.5 ⑥ 51	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：大きくて、内・外面擦で。 底部：膨らみはほとんどなく、内面擦で。外縁斜位削削り。 底径：約51cmの丸底。	73はか	藏天井
9	H-3 覆土	土器 要	① 152 ② (244) ③ -	④ 152 ⑤ (244) ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：外縁、内・外面擦で。 底部：丸底、内面擦で、外縁斜位削削り。	77はか	藏天井
10	H-3 覆土	土器 要	① 220 ② (204) ③ -	④ 220 ⑤ (204) ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：大きくて外縁、内・外面擦で。 底部：膨らみはほとんどなく、内面擦で、外縁斜位削削り。	77はか	藏右端
11	H-4 覆土	陶器 环	① 132 ② 35 ③ -	④ 132 ⑤ 35 ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・外縁、内・外面擦で、外縁斜位削削り。	7	
12	H-4 覆土	陶器 环	① 139 ② 33 ③ 60	④ 139 ⑤ 33 ⑥ 60	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・外縁、内・外面擦で、外縁斜位削削り。	12はか	
13	H-4 床直	陶器 高台皿	① 174 ② 4.5 ③ 86	④ 174 ⑤ 4.5 ⑥ 86	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・大きくて外縁、内・外面擦で。 底部：内面擦で、外縁斜位削削りや丸い付け高台。	1	焼成化
14	H-4 床直	陶器 高台皿	① 148 ② 6.4 ③ 78	④ 148 ⑤ 6.4 ⑥ 78	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・外縁から端部外反、内・外面擦で。底部：丸底。	12はか	焼成化
15	H-4 床直	鉢製品 最大	① (43) ② -	④ (43) ⑤ -	⑦最大幅 ⑧ (0.5) ⑨ 重5 ⑩ (5.3) ⑪ 通存度 上：下端部欠損	最大幅：(0.5) 重5 (5.3) 通存度：上：下端部欠損	角釘	
16	H-5 床直	土器 环	① 114 ② 40 ③ -	④ 114 ⑤ 40 ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：短くやや外縁、内・外面擦で。 底部：丸底、内面擦で、外縁面削り。	14	
17	H-5 床直	土器 环	① (102) ② (25) ③ -	④ (102) ⑤ (25) ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：短く外縁、内・外面擦で。	7	
18	H-5 床直	土器 环	① (102) ② (29) ③ -	④ (102) ⑤ (29) ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：短く外縁、内・外面擦で。	3、5	
19	H-6 覆土	白陶高 輪	① (151) ② (29) ③ -	④ (151) ⑤ (29) ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：外縁、内・外面擦で。輪葉は潰けかけ。		
20	H-7 床直	土器 环	① (128) ② 39 ③ -	④ (128) ⑤ 39 ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：短く立つ立、内・外面擦で。交換点に弱い接合。 底部：丸底、内面擦で、外縁面削り。		
21	H-7 覆土	土器 环	① (120) ② (31) ③ -	④ (120) ⑤ (31) ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：短く外縁、内・外面擦で。口唇部無押さえ。 底部：丸底、内面擦で、磨き、外縁削り。	55	暗文
22	H-7 覆土	土器 环	① (101) ② 25 ③ 76	④ (101) ⑤ 25 ⑥ 76	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・小さく外縁、内・外面擦で。 底部：(約7cm)の丸底、内面擦で、外縁手持ち削削り。		
23	H-7 覆土	土器 小要	① (140) ② (3.2) ③ -	④ (140) ⑤ (3.2) ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：外縁、内・外面擦で。 底部：やや膨らみを持つ。底部：欠損。		
24	H-7 覆土	土器 奥	① (223) ② (130) ③ -	④ (223) ⑤ (130) ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：大きくて外縁、内・外面擦で。 底部：膨らみはほとんどなく、内面擦で、外縁斜位削削り。	54はか	
25	H-7 覆土	土器 奥	① (230) ② (137) ③ -	④ (230) ⑤ (137) ⑥ -	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	口縁部：大きくて外縁、内・外面擦で。口唇部無押さえ。 底部：(約13cm)の丸底、内面擦で、外縁面削り角形の潰け高台。	19	
26	H-9 覆土	土器 环	① 98 ② 1.6 ③ 60	④ 98 ⑤ 1.6 ⑥ 60	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・大きく外縁、内・外面擦で。 底部：(約6cm)の丸底、内面擦で、外縁斜位削削り。		小型、 焼成化
27	H-9 覆土	土器 环	① (89) ② 24 ③ 48	④ (89) ⑤ 24 ⑥ 48	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・大きく外縁、内・外面擦で。 底部：(約4.8cm)の丸底、内面擦で、外縁斜位削削り。		小型、 焼成化
28	H-9 床直	土器 环	① 142 ② 39 ③ 80	④ 142 ⑤ 39 ⑥ 80	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・外縁、内・外面擦で。 底部：(約4cm)の丸底、内面擦で、外縁斜位削削り。	H-3-8	油押付着 焼成化
29	W-1 覆土	古鏡 名称	大○通○	材質	銅 初期 後	-	鏡類 渡米鏡	
30	D-2 床直	土器 高台 皿	① 108 ② 4.1 ③ 61	④ 108 ⑤ 4.1 ⑥ 61	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・丸みを持ち腰や立ち外縁、内・外面擦で。 底部：内面擦で、外縁斜位削削り角形の潰け高台。	1	油押付着 焼成化
31	D-4 覆土	土器 环	① 96 ② 22 ③ 56	④ 96 ⑤ 22 ⑥ 56	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・外縁、内・外面擦で。 底部：(約5cm)の丸底、内面擦で、外縁斜位削削り。	1	小型、 焼成化
32	D-6 床直	土器 环	① (91) ② 19 ③ 49	④ (91) ⑤ 19 ⑥ 49	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・大きく外縁、内・外面擦で。 底部：(約4.9cm)の丸底、内面擦で、外縁斜位削削り。	1	小型、 焼成化
33	P-3 土器 环	① 91 ② 20 ③ 57	④ 91 ⑤ 20 ⑥ 57	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。厚い器身、口縁・体部・外縁、内・外面擦で。 底部：(約5.7cm)の丸底、内面擦で、外縁斜位削削り。	1	小型、 焼成化	
34	1レ 表様	土器 环	① 102 ② 2.9 ③ 60	④ 102 ⑤ 2.9 ⑥ 60	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。厚い器身、口縁・体部・外縁、内・外面擦で。 底部：(約6cm)の丸底、内面擦で、外縁斜位削削り。	1	小型、 焼成化
35	1レ 表様	土器 环	① 93 ② 19 ③ 47	④ 93 ⑤ 19 ⑥ 47	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・大きく外縁、内・外面擦で。 底部：(約4.7cm)の丸底、内面擦で、外縁斜位削削り。	1	小型、 焼成化
36	1レ 表様	土器 环	① 91 ② 22 ③ 60	④ 91 ⑤ 22 ⑥ 60	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。厚い器身、口縁・体部・外縁、内・外面擦で。 底部：(約6cm)の丸底、内面擦で、外縁斜位削削り。	1	小型、 焼成化
37	1レ 表様	土器 环	① (151) ② 19 ③ 65	④ (151) ⑤ 19 ⑥ 65	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。厚い器身、口縁・体部・外縁、内・外面擦で。 底部：(約6.5cm)の丸底、内面擦で、外縁斜位削削り角形の潰け高台。	1	油押付着 焼成化
38	1レ 表様	土器 环	① (153) ② 52 ③ 66	④ (153) ⑤ 52 ⑥ 66	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・外縁、内・外面擦で。 底部：(約6.6cm)の丸底、内面擦で、外縁斜位削削り。	1	油押付着 焼成化
39	1レ 表様	土器 高台 皿	① 109 ② 30 ③ 58	④ 109 ⑤ 30 ⑥ 58	⑦細粒 ⑧良好 ⑨3灰 ⑩3灰 ⑪3灰	輪縁整形。口縁・体部・丸みを持ち外縁、内・外面擦で、外縁斜位削削り接し口字形で、部分形に削られた付け高台。	1	小型、 焼成化

番号	出土遺物 層級	種類名	①口仔 底	②都部 底	③柄部 底	④柄部 色調 (4道存度)	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
40	1レ・表 表様	羽形	①(264) ②(7.1) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (口部縫合)	無縫形。口部: 外縫、底部拵え、内・外面撫で。			酸化焰
41	1レ・表 表様	石製品 砾石	石材	砾灰岩	最大長	6.2	最大幅 2.9 最大厚 1.5 重さ 56.0 道存度 不明		5面使用
42	1レ・表 表様	石製品 砾石	石材	砾灰岩	最大長	5.6	最大幅 2.9 最大厚 1.3 重さ 46.5 道存度 不明		4面使用
43	1レ・表 表様	古瓦	名称	張地元家	材質	銅	招請年 1004	種類	洗米鉢

(3 レンゲ)

44	H-11 底直	須磨器 環	①(118) ②(3.5) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (2-3)	無縫形。口縫・体部: やや丸みを持ち外縫、内・外面撫で。底部: 径4cmの平底。内面凹で、外周縫合糸切り未調整。	16	酸化焰	
45	H-11 底直	須磨器 高台柄	①(114) ②(4.7) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (完形)	無縫形。口縫・体部: やや丸みを持ち外縫、内面凹で、外周縫合糸切り未付高台。内・外面撫で。	33	小型、酸化 焰	
46	H-11 底直	須磨器 高台柄	①(119) ②(5.0) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (はがけ完形)	無縫形。口縫・体部: やや丸みを持ち外縫、内面凹で、外周縫合糸切り未付高台。内・外面撫で。	33	小型、酸化 焰	
47	H-11 底直	須磨器 高台柄	①(124) ②(5.1) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (4-2.3)	無縫形。口縫・体部: やや丸みを持ち外縫、内・外面撫で。	2, 19	酸化焰	
48	H-11 底直	須磨器 高台柄	①(142) ②(5.0) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (2-2.5)	無縫形。口縫・体部: やや丸みを持ち外縫、内・外面撫で。	8	酸化焰	
49	H-11 底直	須磨器 高台柄	①(172) ②(6.3) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (はがけ完形)	無縫形。口縫・体部: やや丸みを持ち外縫、内・外面撫で。	40	梅花文	
50	H-11 裏	羽加 羽加	①(215) ②(26.0) ③(56)	③柄部 底	④良好 に付く 模 (4-1/2)	無縫形。口縫・体部: やや丸みを持ち外縫、内・外面撫で。口部: 5cmの平底。内面凹で、外周縫合糸切り未付高台。稟葉は清けがひ。	25はか	酸化焰	
51	H-11 裏	瓦 瓦	①(長さ5) ②厚さ5 (22)	③柄部 底	④良好 に付く 模 (破片)	一作り行。面面: 平面有。凸面: 撥。側面: 面取り1剣。	7		
52	H-11 底直	鉄製品	最大長 —	(49)	最大幅 —	最大厚 0.03 重さ 1.5 道存度 2号部・柄部の一部			
53	H-11 裏覆	石製品 砾石	石材	砾灰岩	最大長	4.9	最大幅 3.0 最大厚 1.5 重さ 322 道存度 不明	10	5面使用
54	D-11 裏覆	須磨器 高台柄	①(138) ②(5.5) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (完形)	無縫形。口縫・体部: 外縫、内・外面撫で。	1	酸化焰	
55	D-11 裏覆	須磨器 高台柄	①(—) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (のみ)	無縫形。口縫: 次脚・脚部: 球状で、内・外面撫で。	2		
56	B-12 P'2 底	須磨器 环	①(—) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (4-1/3)	無縫形。口縫・体部: やや丸みを持ち外縫、内・外面撫で。	40cmの平底。	酸化焰	
57	3レ 表 表様	彌文 彌文	①(—) —	②(—) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (3mm)	摩打が激しいが、隠帶による区画とし斜彌文が確認できる。	加賀利長3	
58	3レ 表 表様	彌文 彌文	①(—) —	②(—) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (3mm)	摩打が激しいが、隠帶による区画とし斜彌文が確認できる。	加賀利長3	
59	3レ 表 表様	土師器 环	①(135) ②(4.0) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (4mm)	口縫部: 大きく外縫、底部僅かに直し、内・外面撫で。		昭文	
60	3レ 表 表様	土師器 环	①(142) ②(3.2) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (4mm)	口縫部: 狹く直し外縫、内・外面撫で。			

(4 レンゲ)

61	4レ表 表様	絆軸輪	①(150) ②(1.4) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (破片)	無縫形。口縫部: 外縫、口羽部拵え。内・外面撫で。		
----	-----------	-----	--------------------	----------	----------------------	---------------------------	--	--

(5 レンゲ)

62	H-31 底直	土師器 环	①(136) ②(4.4) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (1/2)	口縫部: 狹く直し外縫。内・外面撫で。	2	
63	H-32 底直	土師器 环	①(106) ②(3.4) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (完形)	口縫部: 狹く直し、内・外面撫で。交換点で別縫い。	56	
64	H-32 底直	土師器 环	①(118) ②(2.9) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (完形)	口縫部: 狹く外縫。内・外面撫で。交換点で別縫い。	57	
65	H-32 底直	土師器 环	①(167) ②(6.4) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (1/2)	口縫部: 狹く直し。内・外面撫で。交換点で別縫い。	28はか	
66	H-32 底直	土師器 环	①(148) ②(6.2) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (1/2)	口縫部: 狹く内縫。内・外面撫で。外面部拵り。	181はか	
67	H-32 底直	土師器 环	①(199) ②(2.9) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (1/4)	口縫部: 直し。内・外面撫で。交換点で別縫い。	48はか	
68	H-32 底直	須磨器 环	①(125) ②(2.7) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (1/4)	無縫形。天井部: 水平から縦やかに傾き端部希少。内・外面撫で。直し。	5	
69	H-32 底直	土師器 环	①(220) ②(6.2) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (破片)	口縫部: 外縫、内・外面撫で。底部: 内面撫で。直し。	17	
70	H-32 底直	須磨器 环	①(233) ②(4.0) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (4mm)	無縫形。口縫部: 外反気味。内・外面撫で。底部拵え。	61はか	
71	H-33 土覆	土師器 环	①(98) ②(2.2) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (3mm)	口縫部: 狹くやや外縫。内・外面撫で。交換点に別縫い。	H-31 土覆	
72	H-34 底直	土師器 环	①(116) ②(3.5) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (破片)	口縫部: 狹く直し外縫。内・外面撫で。	11	
73	H-34 底直	土師器 环	①(197) ②(14.4) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (4.5)	口縫部: 外縫、内・外面撫で。底部: 緩やかに傾きながら底部に至る。内面撫で。外面部拵り。	421はか	小型
74	H-34 底直	土師器 小要	①(152) ②(15.1) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (4mm)	口縫部: 外縫、内・外面撫で。底部: 中位に膨らみを持ち、内面撫で、外面部拵り。底部: 径1.8cmの穿孔有。	271はか	
75	H-35 土覆	土師器 要	①(178) ②(7.7) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (破片)	口縫部: 外縫、内・外面撫で。底部: 内面撫で、外面部拵り。	5	
76	H-36 土覆	土師器 要	①(126) ②(2.7) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (3mm)	口縫部: 外縫、内・外面撫で。交換点に後縫。		
77	H-37 土覆	土師器 要	①(128) ②(4.8) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (1.3)	口縫部: 外縫気味。底部僅かに外反、内・外面撫で。交換点に後縫。		
78	H-38 土覆	土師器 要	①(148) ②(4.5) —	③柄部 底	④良好 に付く 模 (1/4)	口縫部: 狹く内縫、内・外面撫で。外面部拵り。		

番号	出土遺物 反	種類名	①口径 ②底径	③高 さ	④動土 ⑤地盤 ⑥透徹度	⑦地盤 ⑧成形	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
79	H-28 覆土 灰土	土師器 灰土	①(254) ② - ③ 49	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥3/4	⑦良好 ⑧成形	口縁部・大きくて外輪。底部・上位にやや膨らみを持ち、内面横擦で、外輪斜削削り。底部・径49cmの平底。		
80	H-29	灰地器 覆土	①(90) ② 31 ③ 73	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥1/3	⑦良好 ⑧成形	輪轍整形。口縁・体部・小さく外輪。内面横擦で。成形・径73cmの平底。内面削で、外輪手持ち削り。		
81	H-40	灰地器 覆土	①(88) ② 32 ③ 57	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥3/4	⑦良好 ⑧成形	輪轍整形。口縁・体部・直立気味。外輪削で。成形・径57cmの平底。内面削で、外輪手持ち削り。		
82	W-21 覆土	敷石陶器 敷石	①336 ② 137 ③ 126	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥3/2	⑦良好 ⑧成形	軸上部形成、輪轍整形。口縁部・外輪に1cm程窪みそこから外輪。内・外輪削で、体部内側・幅5.2cmの側面が放散傾斜に8単位有。底部・回転姿勢未調整。		
83	W-31 覆土 培塿	敷石陶器 培塿	①(358) ② 53 ③(340)	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥破片	⑦良好 ⑧成形	粘土耕形成、輪轍整形。口縁・体部・内壁気味に外輪。成形・平底。内耳は2カ所か3カ所か不明。		
84	W-31 覆土 白石	石製品 口絆	…	-	成形	-	高さ 340 石材 安山岩 部位 粉挽臼の下臼		
85	W-31 覆土	古鏡 名称	寛永造家	材質	鋼	初鋳年 1668	種類		裏面「文」
86	W-32 覆土 漆台	土師器 漆台	①(98) ②(58) ③ -	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥4/3	⑦良好 ⑧成形	器受部・外輪。内・外輪削で。外輪窪き。厚い内部。 底部・緩やかに開き、外沿窪き。		
87	W-32 覆土 高台輪	土師器 高台輪	① - ②(36) ③ (72)	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥1/3	⑦良好 ⑧成形	輪轍整形。口縁・体部・直輪。内・外輪削で。外輪斜削切り後や高い付け高台。		輪轍化
88	D-51 覆土 灰	土師器 灰	①(76) ②18 ③ (50)	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥1/3	⑦良好 ⑧成形	輪轍整形。口縁・体部・外輪。内・外輪削で。外輪斜削切り。内面に側付着。		小型、輪轍化 鏡、転用用途
89	I-33 覆土	石製品 口絆	…	-	底径	-	高さ 139 石材 安山岩 部位 粉挽臼の下臼		一部砥石に 転用
90	I-36 覆土	石製品 鏡	①(45) ②(28) ③(21) ④(19) ⑤(色調 灰) ⑥透徹度 鉛片	-	-	-	形状は方形と思われる。側面が激しく摩耗。		
91	I-36 覆土	石製品 口絆	…	-	底径	-	高さ 105 石材 安山岩 部位 粉挽臼の上臼		
92	I-26 覆土	石造品 火炎	…	323	最大幅 165	最大厚 28	石材 緑色 透徹度 破片		
93	I-27 敷石陶器 覆土	敷石陶器 内耳輪	①(299) ②(158) ③(218)	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥1/2	⑦良好 ⑧成形	粘土耕形成、輪轍整形。口縁部・内壁削。内耳輪・底部・平底。器内はやや厚い。		16世紀前半
94	I-27 覆土 丸瓦	瓦 丸瓦	①長さ - ②厚さ 5 -	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥1/2	⑦良好 ⑧成形	砂利味あり、赤褐色色付を混入する。瓦の内側は質と量での 違いで、外輪斜削り6cmの素面。右回りの文を配し、側面有す。		
95	I-29 覆土 白石	石製品 口絆	…	-	底径	-	高さ 92 石材 安山岩 部位 粉挽臼の上臼		
96	I-40 覆土 白石	石製品 口絆	①(82) ②(26) ③ 53	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥1/2	⑦良好 ⑧成形	輪轍整形。口縁・体部・外輪。内・外輪削で。 成形・径53cmの平底。内面削で、外輪斜削切り未調整。		
97	I-40 覆土 カワラケ	石製品 カワラケ	①(92) ②(23) ③ 60	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥1/2	⑦良好 ⑧成形	輪轍整形。口縁・体部・外輪。内・外輪削で。 成形・径60cmの平底。内面削で、外輪斜削切り未調整。		
98	I-40 覆土 内耳輪	石製品 内耳輪	①(304) ②(154) ③(190)	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥底部欠損 ⑦内耳輪 ⑧成形	⑦良好 ⑧成形	粘土耕形成、輪轍整形。口縁部・外輪。頭部にくびれ有。		15世紀後半
99	I-40 覆土 内耳輪	石製品 内耳輪	①(310) ②(138) ③(190)	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥1/4 ⑦内耳輪 ⑧成形	⑦良好 ⑧成形	粘土耕形成、輪轍整形。口縁部・外輪。頭部にくびれ有。		15世紀後半
100	I-40 覆土 火炎	石製品 火炎	① - ②(67) ③ -	-	底径	-	平面形状は丸形と思われる。正面に菊花文と豪文を配す。		
101	I-40 覆土 白石	石製品 口絆	…	-	成形	-	高さ 104 石材 安山岩 部位 粉挽臼の上臼		
102	I-41 覆土	敷石陶器 火炎	①(307) ②(113) ③ 222	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥3/4	⑦良好 ⑧成形	粘土耕形成、輪轍整形。口縁部・(口部が幅23cmで平底になり内側に強く張り出す)。外輪に珠文と山形の文を交互に配す。 足部・貼付の文が3單位有。		
103	I-41 覆土 内耳輪	敷石陶器 内耳輪	①(346) ②(108) ③(268)	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥破片	⑦良好 ⑧成形	粘土耕形成、輪轍整形。口縁部・内壁削。		16世紀前半
104	O-31 覆土 高台輪	土師器 高台輪	① - ②(15) ③ (71)	-	④オリーフ ⑤にふり黄 ⑥破片	⑦良好 ⑧成形	輪轍整形。底部・内面削で、外輪三角形の高台を付けた後撫で。		
105	O-31 覆土 高台輪	土師器 高台輪	① - ②(20) ③ -	-	④オリーフ ⑤にふり黄 ⑥破片	⑦良好 ⑧成形	輪轍整形。口縁部・外輪。薄壁僅かに外反、内・外輪削で。		
106	O-31 覆土 高台輪	土師器 高台輪	① - ② - ③ -	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥破片	⑦良好 ⑧成形	器口13cm。継縫の刷毛目口に厚さ9cmの台形状の突帯を付けた。		
107	5.5 表様	土師器 灰	①(121) ②(48) ③ -	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥3/2	⑦良好 ⑧成形	口縁部・直立。内・外輪削で。発達点に残有。		
108	5.5 表様	土師器 灰	①(73) ②(20) ③ (50)	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥1/2	⑦良好 ⑧成形	輪轍整形。口縁・体部・外輪。内・外輪削で。外輪斜削切り未調整。		
109	5.5 表様	土師器 灰	①(77) ②(横 75) ③厚さ 1.3cm (色調 灰) ④透徹度 鉛片	-	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥1/2	⑦良好 ⑧成形	形状は方形。周縁に幅0.3cm、高さ0.2cmの高まり有。		
110	5.5 表様	陶製品 鐵製品	最大大 底径	124	最大幅 17	最大厚 0.4	重さ 118 透徹度		短頭輪向 丸丸長三角 形式
111	5.5 表様	石造品	最大大 底径	146	最大幅 9.1	最大厚 0.4	石材 緑色 透徹度 鉛片		

(6) レンゲ

112	H-61 覆土 灰土	土師器 灰土	①(116) ② (37) ③ 3	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥破片	⑦良好 ⑧成形	口縁部・短く直立。内・外輪削で。			
113	H-63	土師器 灰土	①(102) ② (21)	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥破片	⑦良好 ⑧成形	輪轍整形。口縁・体部・外輪。内・外輪削で。			小型、 輪轍化
114	H-64 覆土 灰土	土師器 高台輪	①(136) ② 45 ③ 7.1	④細粒 ⑤にふり黄 ⑥1/2	⑦良好 ⑧成形	輪轍整形。口縁・体部・やや丸みを持ち外輪。内・外輪削で。口部に跳躍跡有。			範内

注 1 層層は「床面」：床面より10cm以内の層層から検出、「覆土」：床面より10cmを越える層層からの出土の2段階に分けた。竈内の検出については「竈」と記載した。

2 口径、底径等の単位はcm、重さの単位はgである。現存値を〔 〕、復元値を [] で示した。

3 勝土は細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm以下)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な鉛物等に入る場合に鉛物名等を記載した。

4 成形は、極良、良好、不良の3段階とした。

9　まとめ

蒼海(14)は、元總社蒼海遺跡群の東側でとびとびに調査を行った。トレンチ毎の調査面積が小さいため、周辺を含めた詳細について触ることは難しいので、ここではトレンチ毎の特徴を概観したい。

(1) 1トレンチ (145m²)

1トレンチは、國府を画すると考えられる東西方向の大溝の延長線上から北へ45mのところに位置する。

地形に関してはほぼ平坦で、土層の堆積に関しては、As-B 純層ではなく As-C 混土層が部分的に存在する。

遺構は、律令期以前の住居が4軒、律令期のものが無く、律令期以後のものが3軒、時期不明が3軒である。8世紀代、9世紀代の住居が検出されなかった。

遺物では、H-7から暗文の土師器坏が出土している。流れ込みの可能性もあるが、丸底気味の底部で、器内がかなり薄いのが特徴である。

(2) 2トレンチ (32m²)

2トレンチは、牛池川右岸に位置する。200m南の元總社明神遺跡Ⅲ（前橋市）、50m北の總社開泉明神北IV遺跡（県事業団）でも水田址が検出されている。

1m幅のトレンチ調査であったため自然化学分析を実施。詳細については「VI 自然化学分析」を参照。

(3) 3トレンチ (199m²)

過年度本トレンチの北側と東側の調査を実施しており、7世紀代の畝状遺構と10世紀代の集落の検出は予想された。しかし、重機掘削を進めていく段階でAs-B 純層を確認し、自然化学分析を実施した結果、12世紀初頭、ここあたりは、生産域であった可能性が非常に高いことが判明した。

(4) 4トレンチ (148m²)

元總社蒼海遺跡群の過年度の調査で実施されていなかった北東部の様子が判明した。

As-B 純層が堆積しており、水田址が抜がっていた可能性が高い。また、7世紀代の畝状遺構も確認され、この推定國府域と山王庵寺の間は、3トレンチ同様生産域であった可能性が指摘できる。

(5) 5トレンチ (629m²)

推定國府域に調査区の北側が一部入るトレンチである。

結論から言うと、調査区北側部は、中世「蒼海城」の堀跡により地表面から4m下まで掘られていた。古代の遺構は一つも確認できない状態であった。しかし、調査区西側で、上幅5mを越える走行方向が南北で断面が逆台形の大溝が検出された。覆土にAs-B 純層の堆積は認められないが、周りの遺構同様に上層部が削平されていることも考えられ、覆土の観察や出土遺物から時期は古代と考えられる。今後、推定國府域の西側部を考える上で一つの材料となると思われる。

検出された10軒の住居はすべて7世紀代と考えられる。羽釜や酸化焰の須恵器坏なども出土したが遺構の確認には至らず、1トレンチと似て8世紀代、9世紀代、10世紀代の住居が検出されなかった。今後調査が進むことで集落の変遷についても明らかになっていくであろう。

遺物では、堀跡や井戸跡から13世紀初頭と考えられる巴文の軒丸瓦や15世紀代の内耳鍋など中世以降のものが多く出土した。

(6) 6トレンチ (23m²)

6トレンチ周辺は、何時期かの集落が形成されていたことが想定される。

V 元総社蒼海遺跡群(19)



Fig.52 蒼海(19) As-C 下現況図

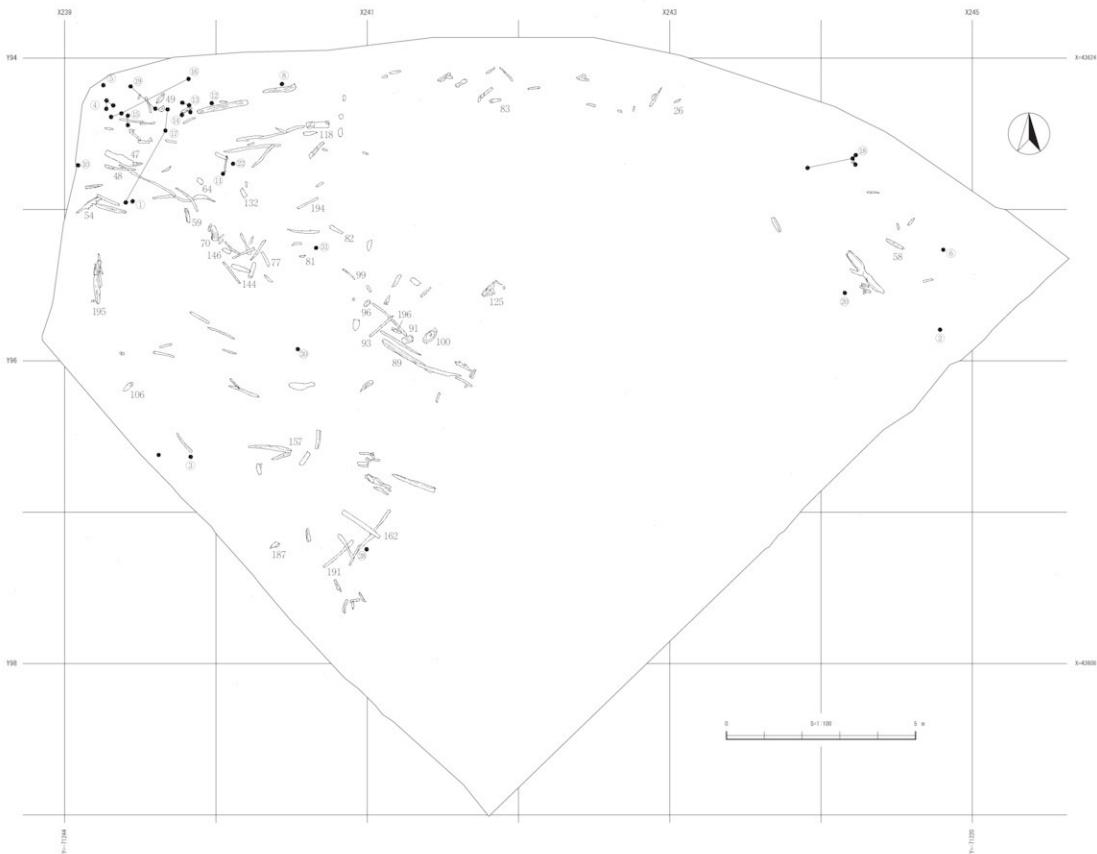


Fig.53 蒼海(19) 木器・土器出土状況

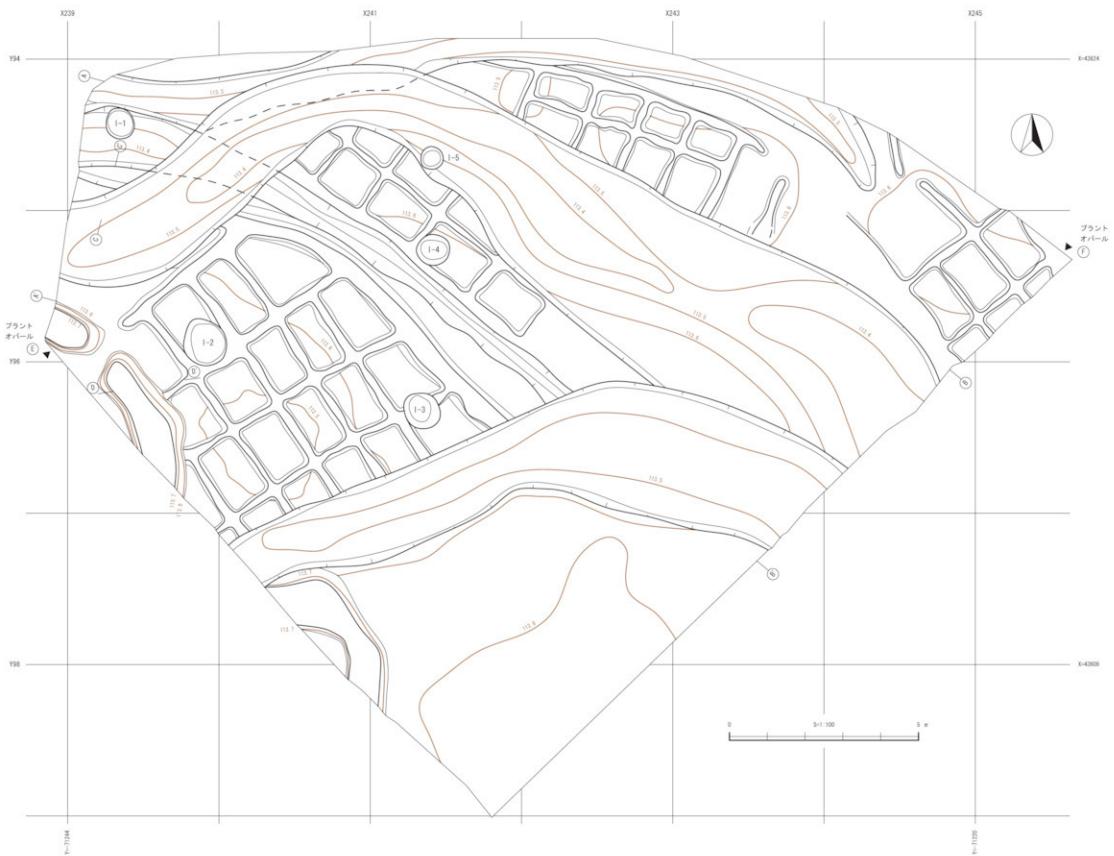


Fig.54 蒼海(19) Hr-FA 下現況図

2 基本層序



Fig.55 蒼海(19) 基本層序

3 遺構と遺物

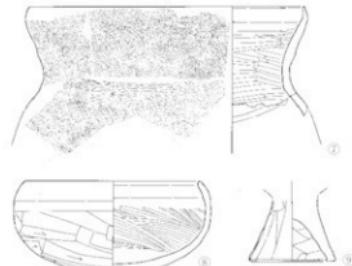


Fig.56 蒼海(19) 水田下面出土遺物

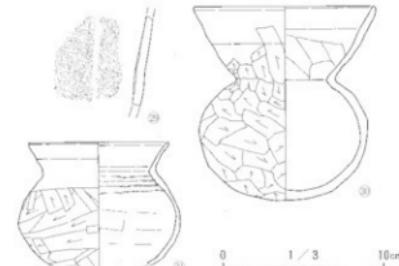


Fig.57 蒼海(19) W-5 出土遺物

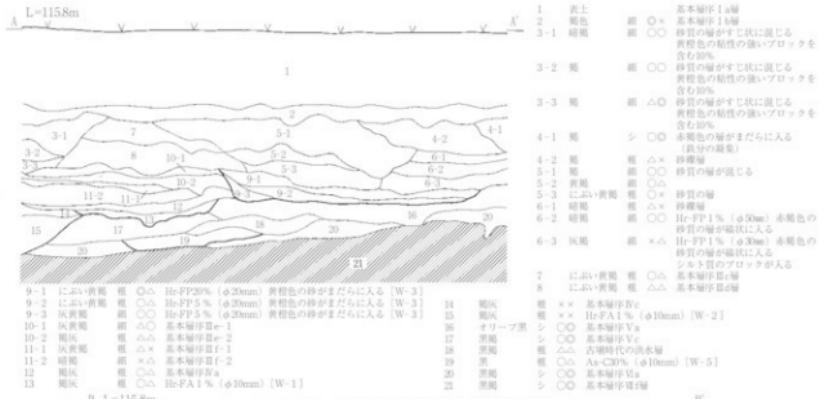


Fig.58 著海(19) 調査区西端土層断面図

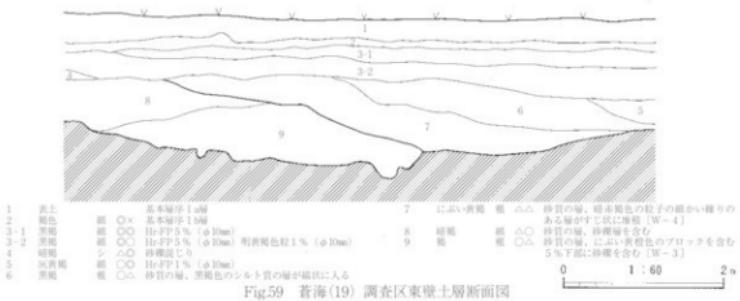


Fig.59 著海(19) 調査区東端土層断面図

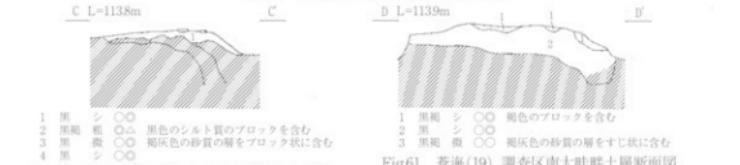


Fig.60 著海(19) 調査区中央大畦畔土層断面図

Fig.61 著海(19) 調査区南大畦畔土層断面図

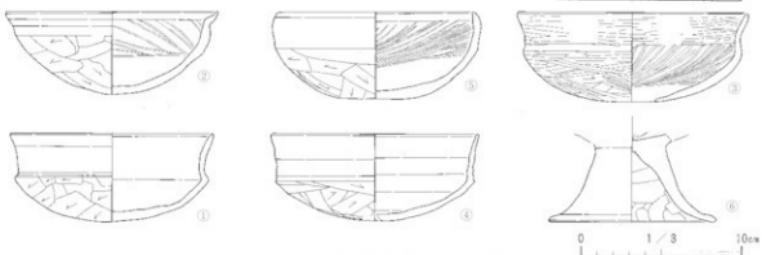


Fig.62 著海(19) 水田面出土遺物



Fig.63 蒼海(19) W-1出土遺物

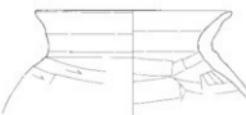


Fig.64 蒼海(19) 試掘調査出土遺物

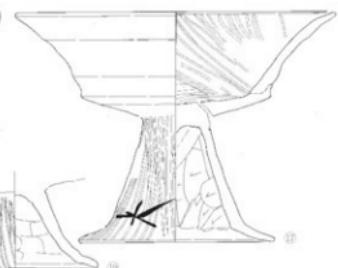
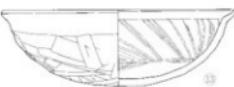
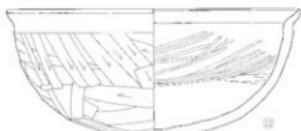


Fig.65 蒼海(19) W-2出土遺物

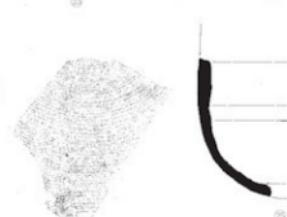
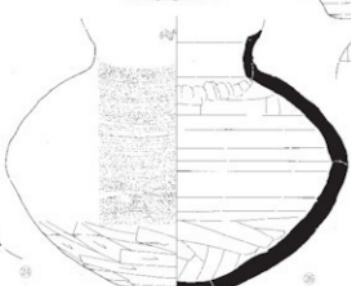
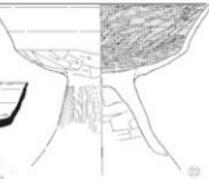
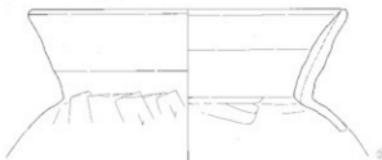
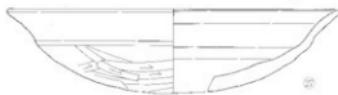


Fig.66 蒼海(19) W-3出土遺物



0 1 / 3 10cm

Fig.67 蒼海(19) W-4出土遺物

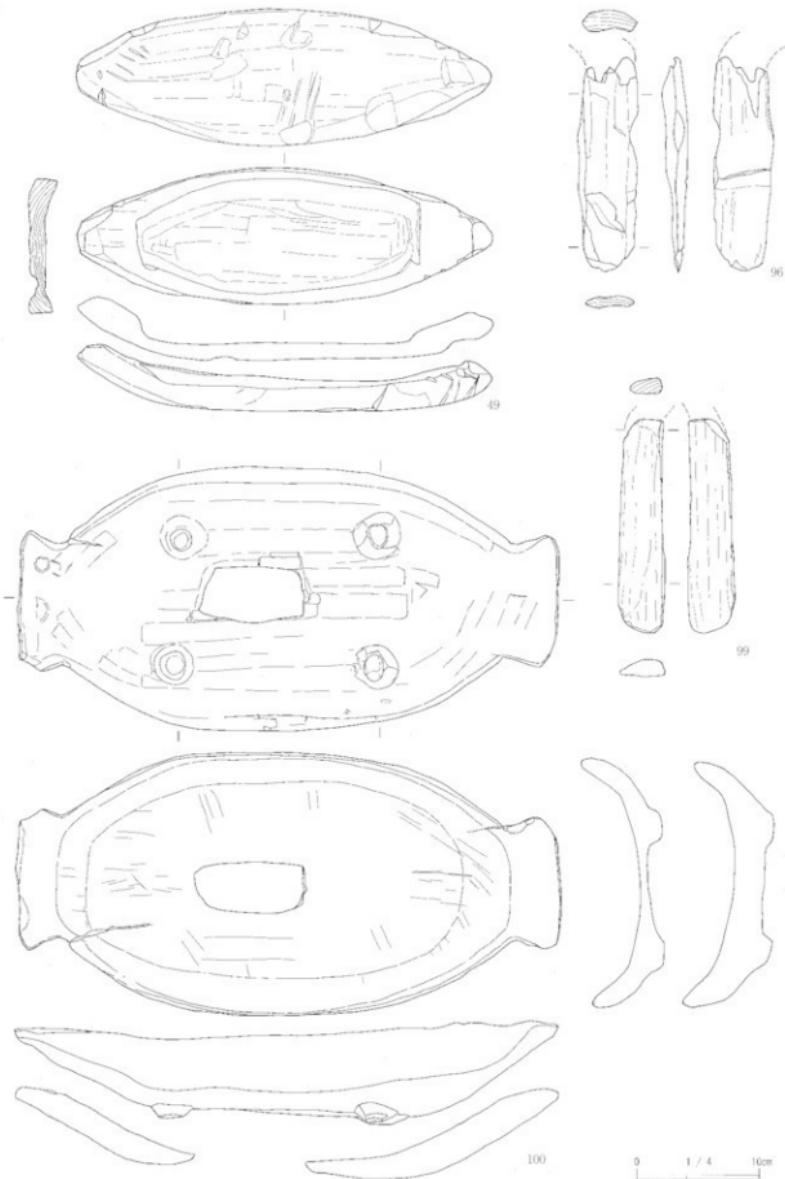


Fig.68 蒼海(19) 泥炭層出土遺物①

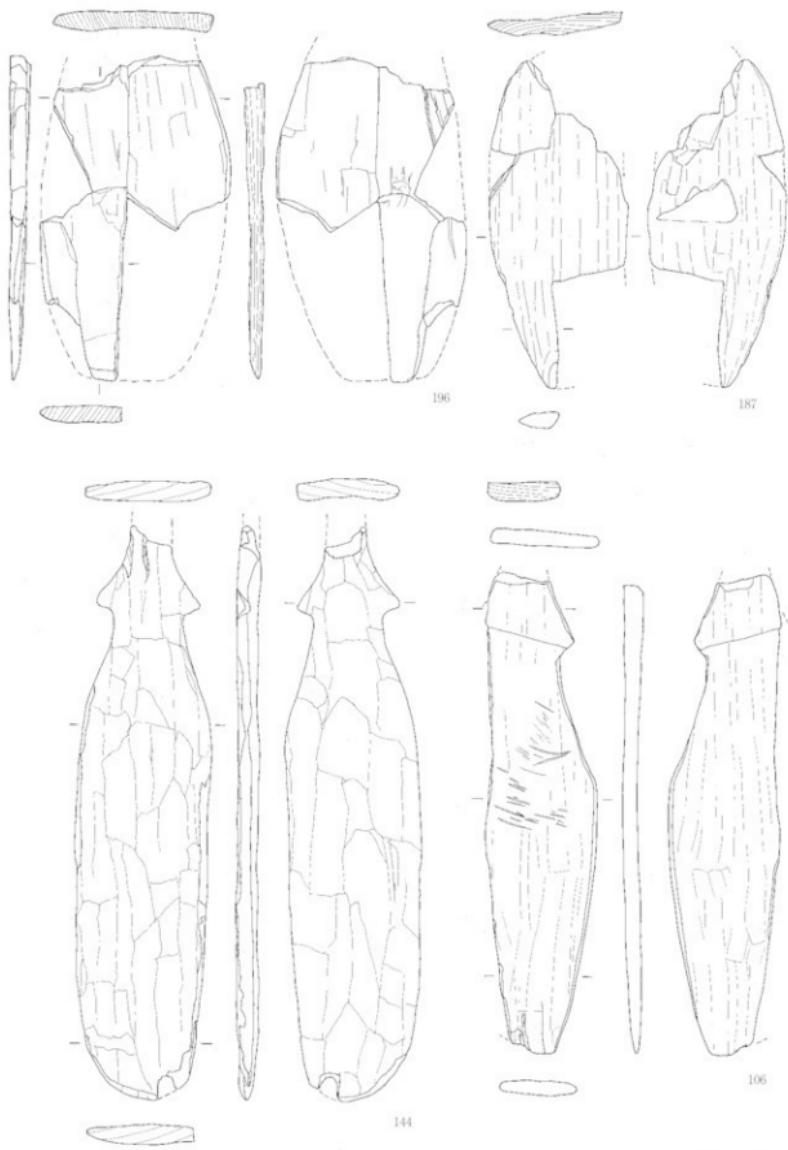


Fig.69 著海(19) 泥炭層出土遺物②

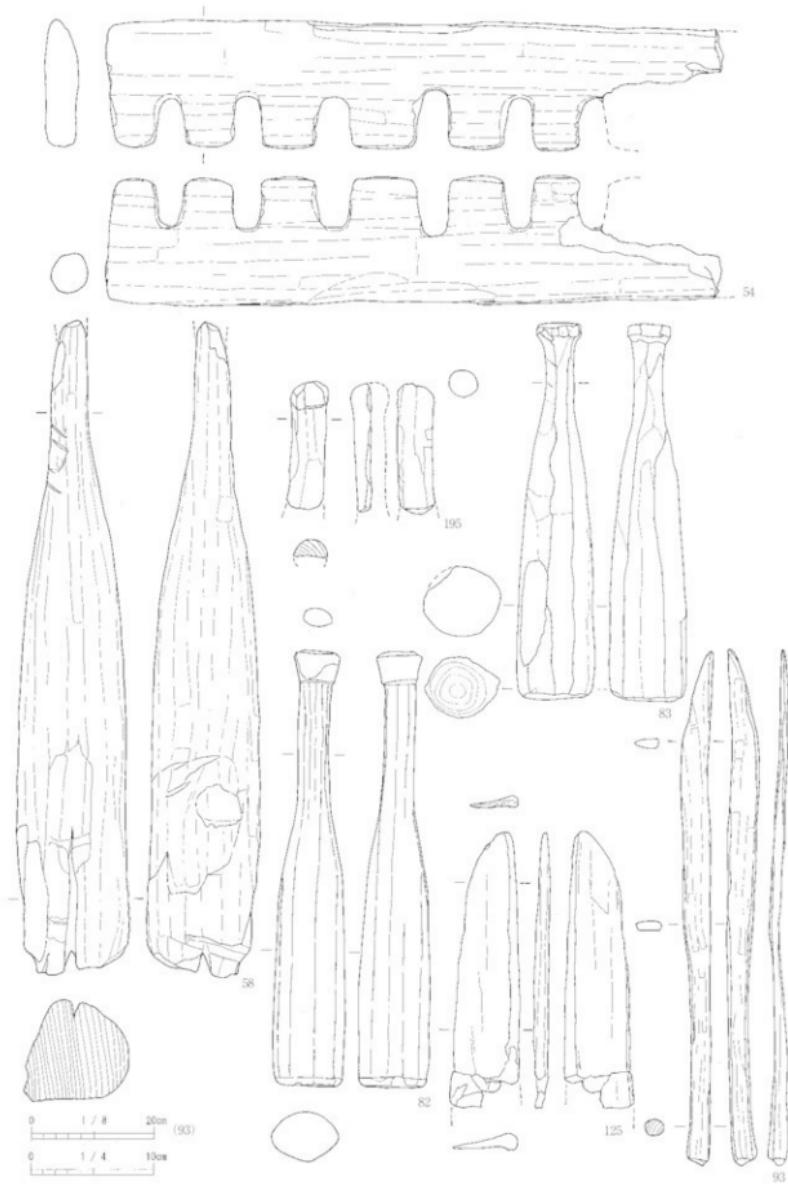


Fig.70 蒼海(19) 泥炭層出土遺物③



Fig.71 董海(19) 混炭層出土遺物④

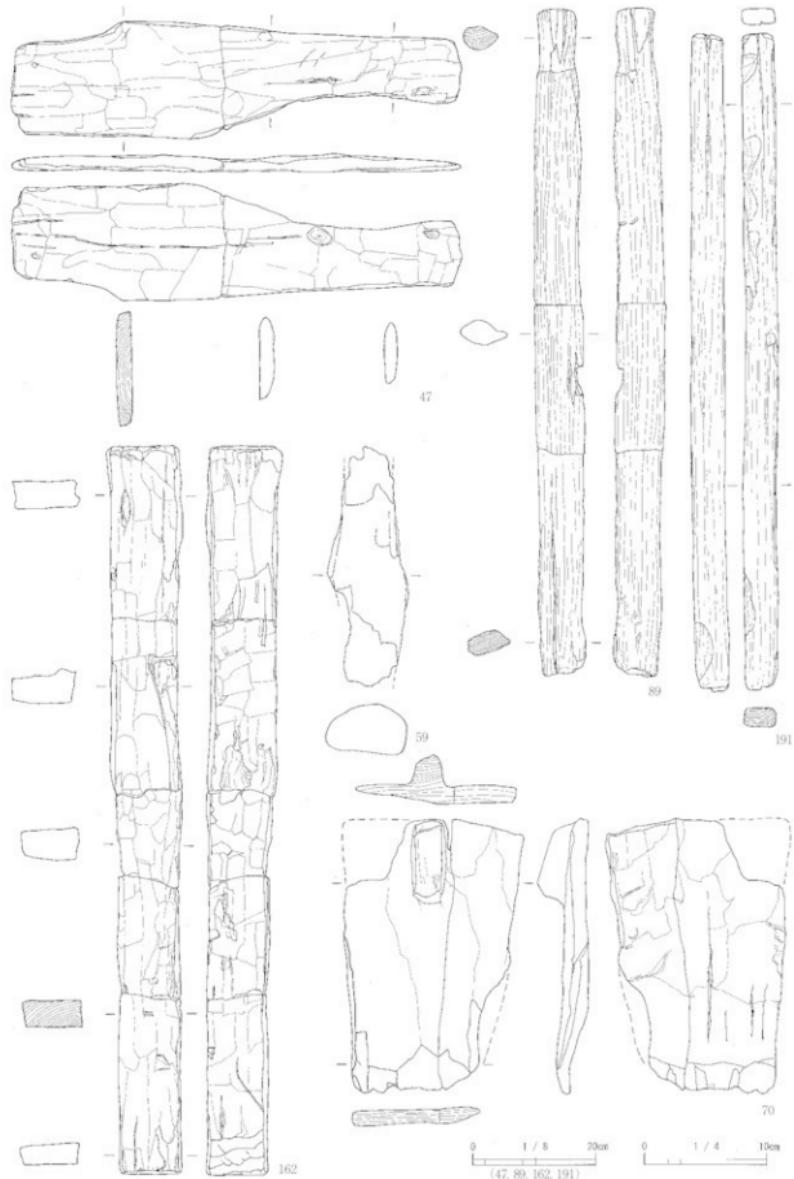


Fig.72 蒼海(19) 泥炭層出土遺物⑤

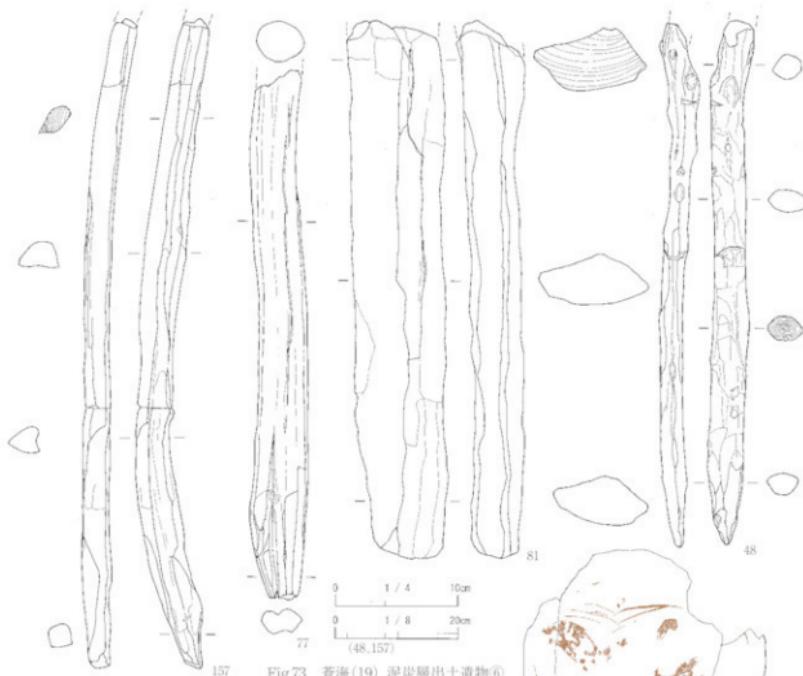


Fig.73 蒼海(19) 泥層出土遺物⑥

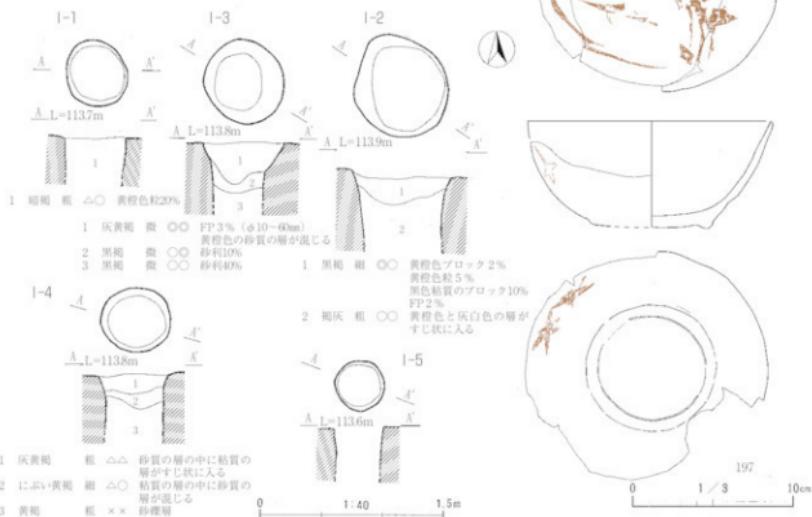


Fig.74 蒼海(19) 井戸跡

Fig.75 蒼海(19) I - 2 出土遺物

Tab. 8 遺構計測表

(1) 桁小区画水田

区画 No.	位 置	規 模		面積	備 考	区画 No.	位 置	規 模	
		東西	南北					東西	南北
1	X239Y95 X239Y96	1.8	(0.85)	1.53	一部残存	24	X241Y94	1.1	(0.7)
2	X239Y96	(1)	1.1	1.1	一部残存	25	X241Y94 X241Y95	1.4	0.9
3	X240Y95	1.9	0.8	1.52		26	X241Y94	1.4	(0.8)
4	X240Y95	1.9	1.7	3.23		27	X241Y95	1.6	1
5	X239Y96	1.4	(1)	1.4	一部残存	28	X241Y95	1.6	(0.6)
6	X240Y96	1.3	1.1	1.43		29	X241Y95	1.35	0.9
7	X240Y95 X240Y96	1.4	0.9	1.26		30	X241Y94	(1.4)	(1.1)
8	X240Y95	1.6	0.75	1.2		31	X242Y94	1.35	(0.5)
9	X240Y95	1.8	1.05	1.89		32	X242Y94	1.25	0.6
10	X239Y96	1.8	(0.65)	1.17	一部残存	33	X242Y94	1	(0.7)
11	X240Y96	1.65	1	1.65		34	X242Y94	1.1	0.6
12	X240Y96	1.6	1	1.6		35	X242Y94	0.9	(0.9)
13	X240Y96	1.6	0.9	1.44		36	X242Y94	0.9	0.6
14	X240Y96	1.6	0.9	1.44		37	X243Y94	1.05	(1.1)
15	X241Y96	1.65	1.15	1.9	一部残存	38	X243Y94	1	0.6
16	X240Y97	(0.3)	(0.3)	0.09	一部残存	39	X244Y95	(2.1)	1.9
17	X240Y97	(0.5)	0.9	0.45	一部残存	40	X244Y94	(1.9)	(0.7)
18	X240Y96	(0.9)	0.9	0.81	一部残存	41	X244Y95	1.6	0.8
19	X240Y96	(0.85)	0.85	0.72	一部残存	42	X244Y95 X245Y95	1.5	0.95
20	X241Y96	(0.8)	0.95	0.76	一部残存	43	X245Y95	1.5	1
21	X241Y96	(0.9)	(1.4)	1.26	一部残存	44	X244Y95	(0.5)	0.8
22	X240Y94	(0.5)	1.1	0.55	一部残存	45	X245Y95	(0.5)	0.8
23	X240Y94	1.1	1.05	1.16		46	X245Y95	(0.3)	0.7
								0.21	一部残存

(2) 井戸跡

遺構名	位 置	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	形 状	備 考
I - 1	X239Y94		82	75 (55)	円形	
I - 2	X239Y95		124	115 (93)	円形	漆椀 1
I - 3	X241Y96		104	96 (84)	円形	
I - 4	X241Y95		85	70 (75)	円形	
I - 5	X241Y94		62	60 (50)	円形	

注) 1 東西・南北等の単位はmである。現存値を()で示した。

2 井戸跡の備考には、出土した遺物の種類と数を記載。

Tab. 9 土器観察表

番号	出土遺構 部位	種類名	①口径 ②底径 ③高さ	④胎土 ⑤焼成 ⑥造形度	器種の特徴・整形・調査技術	登録番号	備考
1	水田	土師器 环	① 12.6 ② 5.4 ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦造形度4/5	口縁部：直立から瘤状や外反、内・外面横擦で。交換点に後有り。 底部：浅い丸底、内面擦で。	2	
2	水田	土師器 环	① 13.0 ② 5.1 ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥明赤褐色 ⑦完形	口縁部：直立から瘤状や外反、内・外面横擦で。交換点に後有り。 底部：短く外傾し、瘤状が僅かに後立する。内・外面横擦で。 底部：丸底、内面擦付さず。外面横擦削り。	5	
3	水田	土師器 环	①[14.2] ② (5.5) ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦1/2	口縁部：瓶や壺に外反する。内・外面横擦での後挽き。交換点に弱く後有り。 底部：深い丸底、内面擦の後挽き。	18, 20	
4	水田	土師器 环	①(12.8) ② (5.3) ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥澄 ⑦1/2	口縁部：直立から瘤状や外反、内・外面横擦で。交換点に後有り。 底部：浅い丸底、内面擦で。外面削り。	182はか	
5	水田	土師器 环	①(12.0) ② 5.3 ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦1/2	口縁部：短く外傾し、内・外面横擦で。体部：内面暗文有り。 底部：丸底、内面擦で。外面横擦削り。	293はか	
6	水田	土師器 高环	① - ② (5.4) ③ 10.3	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦土師部	底部：丸底、内面擦で。外面横擦削り。 底部：丸底、内面擦付さず。外面横擦削り。	8	
7	水田下	手生燒	①(16.8) ② (8.4) ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥灰黄褐 ⑦口縁・胴部破片	口縁部：瓶や壺、内面・横擦で。外面淡状文有り。 口縁部→底部：内面横擦で後挽き。外面斜縫目挽き。 底部：内面擦で。外面上位に成状文1条。		壺式
8	水田下	土師器 环	①(10.8) ② 5.7 ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦3/4	体部：口縁部・丸底の周部から内側し、瘤部や内縦。 口縁部：内・外面横擦で。底部：内面暗文有り。外面黒削り。 底部：内面擦で。	222	
9	水田下	土師器 台付型 环	① - ② (4.1) ③ 5.4	④細粒 ⑤良好 ⑥粗灰 ⑦台部	台部：外面部横擦で、内面擦で。		石川式?
10	W-1 覆土	土師器 环	①(14.0) ② 5.3 ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥明赤褐色 ⑦1/2	口縁部：瓶や壺に外反する。内・外面横擦での後挽き。交換点に弱く後有り。 底部：丸底、内面擦と外面黒削りの後挽き。	115	
11	W-1 覆土	土師器 高环	① - ② (5.9) ③ (11.0)	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦1/2	底部：内面擦有り。外面黒削り。脚部：内面擦で。外面横擦で。後挽き。 底部：内面擦付さず。脚部：内面擦で。外面横擦で後挽き。	37はか	
12	W-2 覆土	土師器 环	①(17.5) ② 7.9 ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥明赤褐色 ⑦1/2	口縁部：瓶や壺で後挽き。瘤部が僅かに直立する。内・外面横擦で。 底部：丸底、内面擦有り。外面黒削り。底部：浅い丸底、外面黒削り。	38	
13	W-2 覆土	土師器 环	① 14.2 ② 4.7 ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦4/5	口縁部：瓶や壺で後挽き。瘤部が僅かに直立する。内・外面横擦で。 底部：丸底、内面擦有り。外面黒削り。底部：浅い丸底、外面黒削り。	623はか	
14	W-2 覆土	土師器 环	①(12.0) ② (5.0) ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦1/2	体部：口縁部・丸底の周部から内側し、瘤部や内縦。 口縁部：内・外面横擦で。体部：内面暗文有り。底部：外面黒削り。	66	
15	W-2 覆土	土師器 环	①(12.4) ② 6.1 ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥明赤褐色 ⑦2/3	体部：口縁部・劣り氣味の浅い丸底の底部から内側し、瘤部紅く。 口縁部：内・外面横擦で。体部：内面暗文有り。外面擦で。 底部：外面範囲り。	77はか	
16	W-2 覆土	土師器 环	①(12.8) ② 5.7 ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥澄 ⑦1/3	口縁部：瓶や壺に外反する。内・外面横擦での後挽き。交換点に弱く後有り。 底部：浅い丸底、内面擦と外面黒削りの後挽き。	161はか	
17	W-2 覆土	土師器 高环	①(19.6) ② (14.5) ③ (12.1)	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦1/2	口縁部：外反。内面横擦で後挽き。暗文有り。外面横擦で。交換点に弱く後有り。 脚部：内面黒削り。底部：内面横擦で。外面黒削り。	125はか	脚部外面黒削りか?
18	W-2 覆土	土師器 环	①(26.0) ② (9.0) ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥明赤褐色 ⑦环部破片	底部：内面横擦で後挽き。外面横擦で。斜筋崩毛日後挽き。	96はか	
19	W-2 覆土	土師器 高环	① - ② (5.3) ③ 10.2	④細粒 ⑤良好 ⑥明赤褐色 ⑦土師部	底部：欠損。脚部・底部：内面横擦で後挽き。外面擦で。	221はか	
20	W-3 弥生型	① - ② - ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥3次焼 ⑦1	外面織文LR。緻しく浅羅と消磨織で曲線的な文様を描き出す。	114	弥生中期後半?	
21	W-3 弥生型	①(15.2) ② 6.5 ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥澄 ⑦1/2	口縁部：直立から瘤状や外反、内・外面横擦で。交換点に後有り。 底部：丸底、内面擦で。外面黒削り。			
22	W-3 弥生型	①(13.4) ② [10.0] ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦2/3	口縁部：内面横擦で後挽き。外面横擦で。 底部：内面擦と外面黒削り。脚部：内面擦で。外面黒削り。 脚部：欠損。外沿面黒色處理。	36		
23	W-3 弥生型	① (9.0) ② 2.8 ③ (6.0)	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦口縁・胴部破片	瓶蓋形。口縁部：欠損。底部：内・外面横擦で。横状文1条。 底部：平底。手持ち横削り。			
24	W-3 弥生型	① - ② (9.8) ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥灰白 ⑦3脚部破片	瓶蓋形。底部：欠損。脚部：内・外面横擦で。			
25	W-3 弥生型	① - ② (8.4) ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦3脚部破片	口縁部：底部：欠損。体部：内・外面横擦で。			
26	W-3 弥生型	① - ② (16.3) ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥青灰 ⑦1/2	瓶蓋形。口縁部：欠損。底部：中位・膨大部を持つそばは人玉形。 脚部：中位・膨大部・内面横擦で。外縁削り。			
27	W-4 覆土	土師器 环	①(20.4) ② (5.0) ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥澄 ⑦1/2・底部破片	口縁部：直立の大きく外縁部、内・外面横擦で。交換点に弱く後有り。 底部：浅い丸底、内面擦で。外縁削り。		
28	W-4 覆土	土師器 高环	①(19.6) ② (7.3) ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥灰白 ⑦口縁部破片	口縁部：直立の外縁部、内・外面横擦で。 底部：丸底、内面擦で。外縁削り。	298	
29	W-5 弥生型	① - ② - ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥灰白 ⑦3脚部破片	内・外面ともに磨耗が激しいが、日本深瀬が確認できる。			
30	W-5 覆土	土師器 环	① 11.2 ② 11.9 ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥明赤褐色 ⑦完形	口縁部：豊富な大津波を持つそばは人玉形。 底部：丸底、内面擦で。外縁削り。	297	
31	W-5 覆土	土師器 环	① 8.6 ② [8.5] ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥にぶい赤褐色 ⑦底部欠損	口縁部：外縁部、内・外面横擦で。底部：内面擦で。外面黒削り。 底部：欠損。	299	
32	A区	土師器 高环	①(12.1) ② (5.1) ③ -	④細粒 ⑤良好 ⑥小理 ⑦口縁部	口縁部：外縁、内・外面横擦で。底部：脚部・内面擦で。外面黒削り。		

注) ① 口径。器高等の単位はcm、重さの単位はgである。現存値を()、復元値を〔 〕で示した。

2 船上は粗粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm以下)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な物語がある場合に物語名等を記載した。

3 烧成は、極良、良好、不良の3段階とした。

Tab.10 木器観察表

番号	出土位置	部位	器種名	①最大長 ②最大幅 ③最大厚	木取り	遺存状態	形状及び加工の特徴	備考
49	X239Y94	泥炭層	舟形容器	① 34 ② 11.1 ③ 2	板目	完形	平頭な板に削りを入り、底部に向かって低く滑らかに調整。	保存処理
100	X241Y95	泥炭層	舟形容器	① 44 ② 21.5 ③ 4	分割材	141#完形	中心部に向かい低く削り調整。底面に四つ脚を削り出した。両端部は把手用に調整。各部の中央に長方形状の穴が開いているが、加工しようものとは不明。	保存処理
96	X240Y95	泥炭層	鉢	① (17.6) ② (4.7) ③ 1.6	板目	一部残存	表面先端部を平坦に削り出し。二あるいは三段階の一部か?	
99	X240Y95	泥炭層	鉢	① (17.6) ② (3.8) ③ 1.4	板目	一部残存	表面とも両面を平坦に削り出し。二あるいは三段階の一部か?	
196	X241Y95	泥炭層	鉢	① (26.4) ② (15.5) ③ 1.7	板目	一部残存	両部表は平坦に、裏は比較的急斜度に削り出。表面は中央が穂やかなくぼむ。	
187	X240Y97	泥炭層	鉢	① (26.7) ② (11.3) ③ 1.5	板目	一部残存	表面両面とも平坦に削りして調整。	
144	X240Y95	泥炭層	鉢 (ナスピ鉢)	① (46.8) ② (10.8) ③ 1.7	板目	着柄部欠損	笠部張り出しが明瞭、絞圧痕不明。刃部表裏とも削り。側面部に貫通孔有り。	保存処理
106	X239Y96	泥炭層	鉢 (ナスピ鉢)	① (39.2) ② (9) ③ 1.6	板目	一部欠損	笠部張り出しが明瞭、絞圧痕不明。刃部を削り出している。	
54	X239Y94	泥炭層	えぶり	① (50.4) ② 10.4 ③ 2.8	不明	端部欠損	刃端を側面的に加工。刃先の歯数は6本残存。	保存処理
58	X244Y94 X244Y95	泥炭層	杵	① (53.3) ② 8.8 ③ 8.1	板目	1/2欠損	削り出しで調整。扱き能率の摩減。縱方向の削れ有り(使用痕?)。	保存処理
195	X239Y95	泥炭層	横槌	① (105) ② 3.3 ③ 1.4	板目?	一部残存	握り部で鋸歯部にかけて丁寧な削り出し。端部に磨滅有り。	
82	X240Y94	泥炭層	横槌	① 35.5 ② 5.8 ③ 4.1	不明	完形	握り部から鋸歯部にかけて丁寧な削り出し。端部に磨滅有り。保存処理	
83	X241Y94	泥炭層	横槌	① 26.8 ② 6.4 ③ 5.7	芯棒	完形	握り部から鋸歯部にかけて丁寧な削り出し。側面部にも潰れる(使用痕?)。	保存処理
93	X241Y95	泥炭層	刀形木製品	① 83.2 ② 4.6 ③ 1.5	板目	完形	両部は外周を削り薄く調整。把手は断面を丸く削り出している。	保存処理
125	X241Y95	泥炭層	刀形木製品	① (22.6) ② 5.7 ③ 1.2	板目	一部残存	表面両面とも丁寧に平坦な削りで調整している。刃部に向かって薄く仕上げる。	
26	X241Y94	泥炭層	柄	① (18) ② 2.5 ③ 1.7	不明	一部残存	断面不定円錐、外周凸多い。端部は一方向から斜めに、平坦な削り。	
194	X240Y94	泥炭層	柄	① (47.7) ② 3.2 ③ 1.8	芯棒	端部欠損	側面横筋円柱状に外面調整。端部に一方向から斜めに平坦な削り。	
132	X240Y94	泥炭層	板	① (20.9) ② 10.8 ③ 4.4	板目	端部欠損	表面両面を平坦に削り。断面三角形状を呈する。左側縁が薄い。左側縁に圧痕?。	
146	X240Y95	泥炭層	板	① (24) ② 8.5 ③ 1.6	板目	両端欠損	両面を削り、厚さを調整。	
64	X239Y94	泥炭層	板	① (19.9) ② 8.4 ③ 4.1	板目	両端欠損	削りで厚さを調整。左側縁は斜めに削り。表面に圧痕?のようなもの。	
91	X241Y95	泥炭層	板	① 25.1 ② 15.3 ③ 6	板目	完形	表面凹凸有り。断面三角形状に表面面を整形。	
118	X240Y94	泥炭層	建材	① (61.2) ② 13.3 ③ 11.9	芯棒	端部欠損	両端部付近に幅15cm、深さ4cm程の溝状の削りがある。	
47	X239Y94	泥炭層	建材	① 73.5 ② 18.9 ③ 2.5	板目	ほぼ完形	端部に丁寧な削り。直径1cmの円形孔がある。	
162	X240Y96 X241Y96~97	泥炭層	建材	① (119.0) ② 12.4 ③ 5.8	板目	ほぼ完形	端部を平面化調整によって、斜めに丁寧に削り出している。表面に三稜形状に削り出した穴跡がある。表面面は全体的に平坦な削りで調整している。	
89	X241Y96	泥炭層	板材	① 110.3 ② 8.3 ③ 4.1	板目	完形	表面面とも削り出しによって調整。断面はレンズ状を呈する。	
191	X240Y97	泥炭層	角材	① 106.7 ② 5.4 ③ 3	板目	完形	断面四角形状、外周を平坦に調整。	
70	X239Y94 X239Y95	泥炭層	用途不明	① (22.4) ② 14.7 ③ 1.2(↑約7.5部分の厚さ12.4cm)	板目	着柄部欠損	端部を削り出しで作っている。端部は平坦な調整による丁寧な削り出し。	保存処理
59	X239Y94	泥炭層	杭	① (39.6) ② (6.3) ③ 4.3	不明	両端欠損	先端部に向かって削りがみられる。	
157	X240Y96	泥炭層	杭	① (106.6) ② 13.7 ③ 4.3	板目	端部欠損	表面は平坦な削りによって調整。断面大形状を呈する。中央部で斜めやくぼみ出。	
77	X240Y95	泥炭層	杭	① (43.3) ② (5) ③ 3.3	芯棒?	端部欠損	先端部を斜め方向から細密に削り出している。	
81	X243Y94	泥炭層	杭	① (44) ② (8.4) ③ 5	板目	両端欠損	表面全体を断面三角形状に削りで調整。先端部に向かって細かい削りがある。	
48	X239Y94	泥炭層	杭	① 8.5 ② 7.2 ③ 4.2	芯棒	ほぼ完形	先端部を斜め方向から細密に削り出している。	
197	I-2	覆土	漆椀	①器高 (6.7) ②口徑 (30.1) ③底径 (7.3) ④厚0.8	横木取り	口縁部欠損	輪轉整形。高台内部の削り出しは明瞭ではない。内外面黒漆。保存処理内外面に朱色の文様を施す。	

4 まとめ

— 蒼海遺跡群(19) 検出のFA下(IV層直下)水田の様相 —

(1) 概要

蒼海遺跡群(19)の主な遺構の検出としては、Hr-FA（棒名山：6c初頭）直下の水田址が挙げられる。

遺物は、内斜口縁环や須恵器模倣环、环部と脚部の接合部が広く広がる高环などが出土し、特徴からテフラの時期と合致する。

調査区の大部分は牛池川の旧河道で占められており、水田址はその間に僅かに残されている。As-C（浅岡山：4c中葉）下面では、旧河道によってほぼ全面が削平されていて、水田址は確認できなかった。

以下、本遺跡で検出された水田と水田に付随する施設等について記述する。

(2) 水田の状況

調査区の大部分を3つの旧河道が占め、その間の削平を受けていない部分である、調査区の南西～中央部・北部・東部の三箇所に島状に残存していた。水田址検出面の河道は、調査区北西部から北壁に沿って東流するW-2、調査区西部から東部方向に10mほど流下し、その後大きく屈曲して東流するW-3、調査区南部から緩やかに湾曲して東流するW-4である。

検出した範囲での水田面の標高は、最高部の調査区中央部で113.71m、最低部の調査区東部で113.4mであった。

調査区の南西壁の隅と北東壁の隅から採取した資料からは、イネが検出されている。南西壁の隅と北東壁隅の標高差は約20cmあるが、イネは標高の高い南西壁隅から多く検出されている。

(3) 水田に伴う施設

水田に伴って検出された施設には、極小水田、大畦畔、極小区画を仕切る小畦畔、畦畔の補強材、水口、用水路(W-1)がある。また、水田面には不定形の小さなくぼみが多数みられたが、全体的に風化が激しく方向性も確認できなかつたため、足跡群の可能性は低いと判断した。

① 畦畔と水田区画

まず、調査区の南側に幅約2.0m高さ約30cmの畦畔が東西に2条確認できる。東側の畦畔は中央に水口をもち、緩やかに曲がる。西側の畦畔は中央あたりで南に屈曲している。調査区の中央には、南の畦畔よりやや小さい、幅0.8m水田面からの高さ10cmの畦畔が直線的に伸びている。この南と中央の畦畔の間は約6.0mあり、幅20～30cm高さ数cmの小さな畦畔によって細かく仕切られている。

この小さな畦畔は、高さ数cmのものがほとんどで、全体的に偏平でその形状を僅かにしか確認できない。これは、土圧が生じたことや放棄された状態が長かったことなどの理由も考えられるが、調査区のほとんどを河道が占める、氾濫の頻発したことから、洪水によって上面が磨耗・流亡した可能性が高い。

また、この小さな畦畔によって仕切られた区画は、完全に残存していないものも含めて46区画確認できた。残存する区画は、長方形状を呈するものがほとんどで、方形状のものが僅かにあるという比較的の整然とした区画である。平均すると東西約1.26m、南北約0.9m、面積約1.2m²と、一区画が非常に小さい。

本遺跡のFA下水田址では、幅約0.8m以上高さ約10cm以上の南と中央の畦畔を大畦畔とし、幅約20cm高さ数cmの畦畔を小畦畔とした。また、大畦畔で仕切られた範囲を大区画、小畦畔で仕切られた範囲を小区画とした。

② 畦畔の補強材

調査区中央の大畦畔の西端部には、板状の木器が用水路(W-1)との境に整然と埋め込まれている。さらに大畦畔の中央部でも自然木などが用水路との境から多く検出されており、これらは畦畔の補強材として用いられたのだと考えられる。西端部にある板状の木器の中には、えぶりを転用したものも含まれている。畦畔の補強について近隣の遺跡では、元総社明神遺跡の杭と草束による補強が行われていたことが知られている。だが、農具(えぶり)を畦畔の補強材として転用しているということは本遺跡の特徴であるといえよう。

③ 水口

調査区南部西側の大畦畔には、幅約1.0mの水口が存在し、北側に広がる小区画水田に向かって僅かに傾斜している。牛池川から取水し、小区画水田へ配水していたと考えられる。これ以外の水口については、はっきりとは確認できなかった。

④ 用水路

本遺跡では、検出された溝状の遺構は全て遺構名称の溝として扱っている。その中でW-1は、溝幅が比較的均一であること、蛇行がないこと、両脇に明確な畦畔が見られることから、小区画水田に給排水を行う水路であると判断した。W-1は小区画水田の東西方向の畦畔に平行して、東流すると考えられるが、河道・水田との合流や分歧点は確認できなかった。

この用水路と小区画水田の境では、FA下水田面からその直下の泥炭層において多くの木器・自然木等が出土している。出土した遺物は、舟形容器や刀形木製品、鉗、板、杭等である。舟形容器については、元総社寺田遺跡（事業団）から船形木製品、太田市下田遺跡、同米沢中遺跡から船形土製品が出土している。しかし、それらとは形態・加工方法が大きく異なっている。

元総社寺田遺跡（事業団）の「舟型容器」や寺田遺跡（前橋市）の「田舟」等と非常に類似しており、端部の作り出しが三ツ寺I遺跡出土の削抜き盆の把手様の調整加工に近いが、本遺跡の資料のように底部に脚を持つものは見つかっていない。

刀形木製品については、今回の調査では2点出土した。2点ともW-1付近の泥炭層からで、近接した場所からみつかっている。1点は刃先部分のみであるが、もう一点は完形であり、長さは約80cmである。刃先は非常に鋭角的に作り出されている。

（4） 結び

蒼海遺跡群（19）の周辺には、本遺跡から上流約40mの元総社北川遺跡、上流に隣接する元総社牛池川遺跡、下流に隣接する総社閑泉明神北IV遺跡、下流約150mの総社閑泉明神北V遺跡、下流約600mの元総社明神遺跡、南北西方向に約1kmの元総社寺田遺跡からもFA下水田址が見つかっている。の中でも元総社北川遺跡、元総社牛池川遺跡、本遺跡、総社閑泉明神北IV遺跡、総社閑泉明神北V遺跡は、牛池川によって形成された沖積地の延長約700mにわたって、幅約20~50mで遺跡が連続しており、層位や出土遺物から同時期に形成された一連の水田であると考えられる。

本遺跡のFA下水田の様相は前述した通りであるが、牛池川左岸流域に展開する遺跡の内で、大区画のなかに小区画水田がつくられる形態をとるものは、元総社北川遺跡のB区・D区、総社閑泉明神北IV遺跡のC区である。それ以外の区域では、大区画のみあるいは小区画のみが確認されている。

では、それぞれの遺跡から検出された水田の大区画・小区画を本遺跡と比較してみよう。

表1 各遺跡の大畦畔の間隔と小区画水田の大きさ

遺跡名	大畦畔の間隔		小区画水田		
	南北(m)	東西(m)	長軸(m)	短軸(m)	面積(m ²)
蒼海遺跡群（19）(前橋市)	6	—	126	0.9	12
元総社北川・A区東（事業団）	—	—	1.4	0.8	1.1
元総社北川・A区西（事業団）	5~8	17	—	—	—
元総社北川・B区南（事業団）	4.5	48	1.7	1	17
元総社北川・B区北（事業団）	—	—	1.9	1	1.9
元総社北川・C区（事業団）	—	—	—	—	—
元総社北川・D区南（事業団）	17	20	2	0.7	15
元総社北川・D区北（事業団）	—	—	57~58	3~5	19~27.5
元総社牛池川・A区（事業団）	—	—	1.5	0.7	1.3
元総社牛池川・B区（事業団）	—	—	2.8	1.6	4.5
総社閑泉明神北IV・C区（事業団）	15	4~10	1.4	1	1.6
総社閑泉明神北IV・D区（事業団）	—	—	1.5	0.7	1.3
総社閑泉明神北V・B区（前橋市）	—	—	1.9	1.4	2.16

表2 各遺跡の大・小畦畔の大きさ

遺跡名	大畦畔		小畦畔	
	幅(m)	高さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)
蒼海遺跡群(19)(前橋市)	0.8~2.0	10~30	20~30	数cm
元總社北川・A区東(事業団)	0.8	20	30~60	数cm
元總社北川・A区西(事業団)	0.5~1.3	5~10	—	—
元總社北川・B区南(事業団)	0.5~1.3	5~10	30~50	数cm
元總社北川・B区北(事業団)	—	—	30~80	数cm~10
元總社北川・C区(事業団)	0.5~1.8	数cm~20	—	—
元總社北川・D区南(事業団)	1.5~3.5	10	30	数cm
元總社北川・D区北(事業団)	1.5~2.2	5~30	30~70	5~10
元總社牛池川・A区(事業団)	0.6~1.0	10~15	20~30	数cm
元總社牛池川・B区(事業団)	0.8	10	30~70	数cm~10
總社開泉明神北IV・C区(事業団)	0.7~1.0	5~15	30~40	数cm
總社開泉明神北IV・D区(事業団)	0.6~1.0	10~15	20~30	数cm
總社開泉明神北V・B区(前橋市)	—	—	20~30	数cm

近接する遺跡と比較すると、小区画水田の長軸・短軸・面積の値については、元總社北川遺跡 A区東や元總社牛池川遺跡 A区などは本遺跡の区画に規模が比較的近いことがわかる。しかし、大畦畔の間隔・小区画の規模は遺跡ごとあるいは地点ごとに様々であることが明らかとなった。

また大畦畔については、特に元總社北川遺跡 D区北と本遺跡南側のものは高さ20~30cmと際立って高いことがわかる。

このように、牛池川左岸流域に連続して造成されたこれらの水田は、地点ごとに環境に合わせて区画の規模や畦畔の作り方を変えながら、牛池川によって形成された沖積地に広く展開していたと考えられる。

(引用参考文献)

- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『清里・陣場遺跡』、群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981年
 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『上野四分掛寺・尼寺中間遺跡1~8』、群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986年~
 群馬県史研究会編『群馬寺古史』、群馬県史研究会編『奈良・平安時代の土器の編年』 1986年
 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『上野四分寺』、群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年
 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『三ノ寺1号道路』、群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年
 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『下東山遺跡』、群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987年
 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『元總社寺田遺跡1』、群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993年
 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『元總社寺田遺跡2』、群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994年
 群馬県埋蔵文化財調査事業団編『元總社牛池遺跡』、群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007年
 東京都埋蔵文化財センター『資料目録』、(株)東京都埋蔵文化財研究会 東京都埋蔵文化財センター 1991年
 奈良国立文化財研究所『奈良の墓集団研究』、奈良国立文化財研究所 1993年
 奈良国立文化財研究所『山崎城二「奈良の研究」』、奈良国立文化財研究所 2000年
 群馬県地域展示実行委員会編『斬新考古進路』、96群馬県地域展示実行委員会 1996年
 稲田紀雄・浜田博一『元總社牛池遺跡』、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1996年
 前島義典・井上義夫『元總社牛池遺跡』、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1999年
 山口考古学研究所編『總社開泉明神北道路』、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000年
 真理明男・飯田正二編『「上野四分寺」尼寺中間遺跡』、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000年
 鈴木雅浩・高橋一彦編『「總社宅地遺跡」、上野四分寺尼寺中間遺跡』、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000年
 山武考古学研究所編『元總社菅海道跡群』、元總社小見内遺跡、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001年
 山武考古学研究所編『元總社菅海道跡群』、元總社小見内遺跡、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001年
 齐木一敏・近藤雅輔編『元總社菅海道跡群』、元總社甲種荷坂大道遺跡・總社開泉明神北道路・元總社甲種荷坂大道Ⅱ道路】
 齐木一敏・高坂麻子編『元總社菅海道跡群』、元總社小見内Ⅳ道路】、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002年
 高橋一彦・近藤雅輔『元總社菅海道跡群』、元總社小見内Ⅳ道路】、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002年
 山武考古学研究所編『元總社菅海道跡群』、元總社小見内Ⅳ道路】、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002年
 山武考古学研究所編『元總社菅海道跡群』、元總社小見内Ⅳ道路】、元總社草作Ⅲ道路】
 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002年
 高橋一彦・高坂麻子編『元總社菅海道跡群』、元總社小見内Ⅳ道路】、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003年
 元總社菅海道跡群『元總社小見内Ⅳ道路】、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003年
 元總社菅海道跡群『元總社小見内Ⅳ道路】、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003年
 元總社菅海道跡群『元總社小見内Ⅳ道路】、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003年
 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003年
 岩崎勝郎・高坂麻子編『元總社菅海道跡群』、元總社小見内Ⅳ道路】、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005年
 山武考古学研究所編『元總社菅海道跡群』、元總社小見内Ⅳ道路】、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005年
 スカニア環境測定株式会社編『元總社菅海道跡群(3)』、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005年
 高橋一彦・高坂麻子編『元總社菅海道跡群(4)』、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2006年
 大崎和久・遠藤かみ美編『元總社菅海道跡群(6)』、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2006年

VI 自然科学分析

1 元総社蒼海遺跡群(14)

㈱古環境研究所
早田 勉

(※ II. プラント・オバール分析には、試掘調査の分析も含む。)

I. 元総社蒼海遺跡群(14) の土層とテフラ

1.はじめに

関東地方北西部前橋市域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壤の中には、赤城、榛名、浅間、御岳など北関東地方や中部地方の火山、さらには中国地方や九州地方などの火山に由来するテフラ（火山さいせつ鉢屑ぶつ物、いわゆる火山灰）が多く認められる。その中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構や遺物包含層の層位や年代を知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層が検出された前橋市元総社蒼海遺跡群(14)においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ層やテフラの濃集層についてテフラ検出分析を実施して指標テフラの層位を把握し、土層の層位や年代に関する資料を収集することになった。

調査分析の対象となった地点は、3トレンチ西壁、3トレンチ東壁、4トレンチ東壁、4トレンチ西壁の4地点である。

2. 土層の層序

(1) 3トレンチ西壁

3トレンチの基本的な土層断面が認められた西壁では、下位より黒灰褐色土（層厚29cm以上）、亞円礫混じり暗灰褐色砂質土（層厚11cm、礫の最大径9mm）、黒灰褐色土（層厚15cm）、灰色軽石に富む暗灰褐色土（層厚6cm、軽石の最大径14mm）、暗灰褐色土（層厚8cm）、灰色土（層厚8cm）、成層したテフラ層（層厚3.2cm）、砂を多く含み色調がやや暗い灰褐色土（層厚11cm）、砂混じり灰褐色土（層厚17cm）、炭化物混じり灰色作土（層厚19cm）が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より青灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、褐色軽石混じり灰褐色粗粒火山灰層（層厚2cm、軽石の最大径6mm）からなる。このテフラ層は、層相から1108（天仁元）年に浅間Bテフラ（As-B、荒牧、1968、新井、1979）と考えられる。

(2) 3トレンチ東壁

3トレンチ東壁では、下位より黒灰褐色土（層厚7cm以上）、灰色軽石に富みやや褐色がかった黒灰色土（層厚8cm、軽石の最大径6mm）、黄色砂質細粒火山灰層（層厚3cm）、白色軽石混じり暗褐色土（層厚16cm、軽石の最大径5mm）、褐色がかった灰色土（層厚9cm）、やや色調が暗い灰褐色土（層厚11cm）、灰褐色粗粒火山灰層（層厚3cm）、砂を多く含み色調がやや暗い灰褐色土（層厚16cm）、砂混じり灰褐色土（層厚12cm）、やや褐色がかった灰色作土（層厚15cm）が認められる。

これらのうち、灰褐色粗粒火山灰層については、層理構造は明瞭ではないものの、その特徴からAs-Bと考えられる。

(3) 4トレンチ東壁

4トレンチ東壁では、下位より黒褐色泥層（層厚10cm以上）、灰色軽石に富む黒色土（層厚8cm、軽石の最大径7mm）、黄色砂質細粒火山灰層（層厚3cm）、暗灰褐色土（層厚5cm）が認められる。その上位は谷により切られており、谷は層理の発達した灰色砂層（層厚20cm以上）で埋まっている。その上位には、さらに下位より白色

軽石混じり暗灰褐色土（層厚18cm）、灰褐色粗粒火山灰層（層厚3cm）、砂を多く含む灰褐色土（層厚8cm）、砂混じりで褐色がかった灰色土（層厚21cm）、灰白色粗粒火山灰を含む灰色土（層厚14cm）、盛土（層厚52cm）が認められる。

これらのうち、灰褐色粗粒火山灰層については、層理構造は明瞭ではないものの、その特徴からAs-Bと考えられる。また、盛土直下の灰色土に含まれる灰白色粗粒火山灰については、その層位や岩相などから、1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A、荒牧、1968、新井、1979）に由来する可能性が考えられる。

(4) 4トレンチ西壁

4トレンチの基本的な土層断面が認められた西壁では、下位より暗灰色泥層（層厚10cm以上）、灰色軽石を多く含む暗灰色泥層（最大層厚5cm、軽石の最大径7mm、試料3）、黄色砂質細粒火山灰（試料2）ブロックを含む暗灰色土（最大層厚10cm）、わずかに褐色がかった灰色粘質土（層厚14cm）、やや色調が暗い灰色粘質土（層厚7cm）、かすかに成層した灰褐色粗粒火山灰層（層厚7cm）、暗褐色土（最大層厚5cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚19cm）、鉄分を多く含む黄褐色土（層厚9cm）、灰白色粗粒火山灰を含む灰色土（層厚11cm）、盛土（層厚38cm）が認められる。

これらのうち、かすかに成層した灰褐色粗粒火山灰層については、層理構造はさほど明瞭ではないものの、その特徴からAs-Bと考えられる。また、盛土直下の灰色土に含まれる灰白色粗粒火山灰については、その層位や岩相などから、As-Aに由来する可能性が考えられる。

2. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

地質調査の際にテフラ層やテフラ粒子の濃集層から採取された試料のうちの5点について、テフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料8gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。3トレンチ東壁の試料1には、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径2.9mm）が比較的多く含まれている。この軽石の斑晶鉱物には、角閃石や斜方輝石が認められる。火山ガラスとしては、この軽石の細粒物である白色の軽石型ガラスが多く含まれている。

4トレンチ東壁の試料3には、比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径7.1mm）が多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や單斜輝石が認められる。火山ガラスとしては、この軽石の細粒物である灰白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。また試料2には、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径5.3mm）が比較的多く含まれている。この軽石の斑晶鉱物には、角閃石や斜方輝石が認められる。火山ガラスとしては、この軽石の細粒物である白色の軽石型ガラスが多く含まれている。

4トレンチ西壁の試料3には、比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径3.8mm）が多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や單斜輝石が認められる。火山ガラスとしては、この軽石の細粒物である灰白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。また試料2には、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径3.2mm）が比較的多く含まれている。この軽石の斑晶鉱物には、角閃石や斜方輝石が認められる。火山ガラスとしては、この軽石の細粒物である白色の軽石型ガラスが多く含まれている。

3. 考察

テフラ検出分析の対象となった3トレンチ東壁の黄色砂質細粒火山灰層（試料1）は、層相や含まれるテフラ粒子の特徴から、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名ニツ岳洪川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）と考えられる。

また、4トレンチ東壁の試料3が採取された土層中に含まれるテフラ粒子は、その層位や軽石および火山ガラ

スの岩相などから、4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石（As-C、荒牧、1968、新井、1979、友廣、1988、若狭、2000）に由来すると思われる。したがって、3トレンチ西壁の暗灰褐色土中に多く含まれる灰色軽石についてもAs-Cに由来すると考えられる。一方、黄色砂質細粒火山灰層（試料2）は、層位や層相さらにテフラ粒子の岩相などから、Hr-FAと考えられる。

4トレンチ西壁の試料3が採取された土層中に含まれるテフラ粒子は、軽石および火山ガラスの岩相などから、As-Cに由来すると思われる。また、ブロック状に含まれる黄色砂質細粒火山灰層（試料2）は、層位や層相さらにテフラ粒子の岩相などから、Hr-FAと考えられる。

4.まとめ

元社蒼海遺跡群（14）において、地質調査とテフラ検出分析を実施した。その結果、下位より浅間C軽石（As-C、4世紀初頭）起源のテフラ粒子、榛名二ヶ岳洪川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）、浅間A軽石（As-A、1783年）起源と考えられるテフラ粒子軽石などを検出できた。また、Hr-FAとAs-Bの間に谷を埋めた砂の堆積が認められた。

文献

- 新井房夫（1979）関東地方西北部の構造時代以降の示標テフラ層、考古学ジャーナル、no.53、p.41-52。
 荒牧重雄（1968）「浅間火山の地質」、地誌研報、no.14、45p.
 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス、東京大学出版会、276p.
 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス、東京大学出版会、336p.
 収口 一（1986）榛名二ヶ岳起源 FA・FP 層下の土器と須恵器、群馬県教育委員会編「荒紙北原道路・今井神社古墳群・荒紙青柳道路」、p.103-119。
 早田 勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害、第四紀研究、27、p.297-312。
 若狭 勝（2000）群馬の弥生土器が終わるとき、かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く～古墳が成立する頃の土器の交流」、p.41-43。
 友廣哲也（1988）古式土器出現期の様相と浅間山C軽石、群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」、p.325-336。

表1 テフラ検出分析結果

地 点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
3トレンチ東壁	1	++	白	29	+++	pm	白
4トレンチ東壁	2	++	白	5.3	+++	pm	白
4トレンチ東壁	3	+++	灰白	7.1	++	pm	灰白
4トレンチ西壁	2	++	白	32	+++	pm	白
4トレンチ西壁	3	+++	灰白	38	++	pm	灰白

++++：とくに多い、+++：多い、++：中程度、+：少ない、-：認められない。

最大級の単位は、mm、bw：バブル型、pm：軽石型。

II. 元総社蒼海遺跡群(14)における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1.はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

2. 試料

分析試料は、3トレンチ西壁、3トレンチ東壁、4トレンチ東壁、4トレンチ西壁、および三俣町試掘1-40-9の5地点から採取された計11点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスピーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻³g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、ミヤコザサ節は0.30である（杉山, 2000）。

4. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1、図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ムギ類（穂の表皮細胞）、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

[樹木]

はめ縫パズル状（ブナ科ブナ属など）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

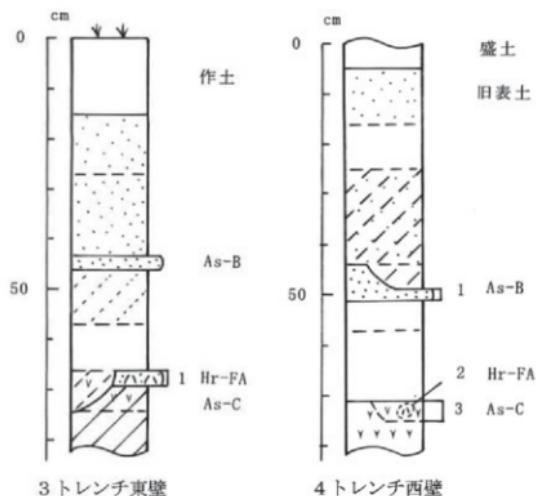
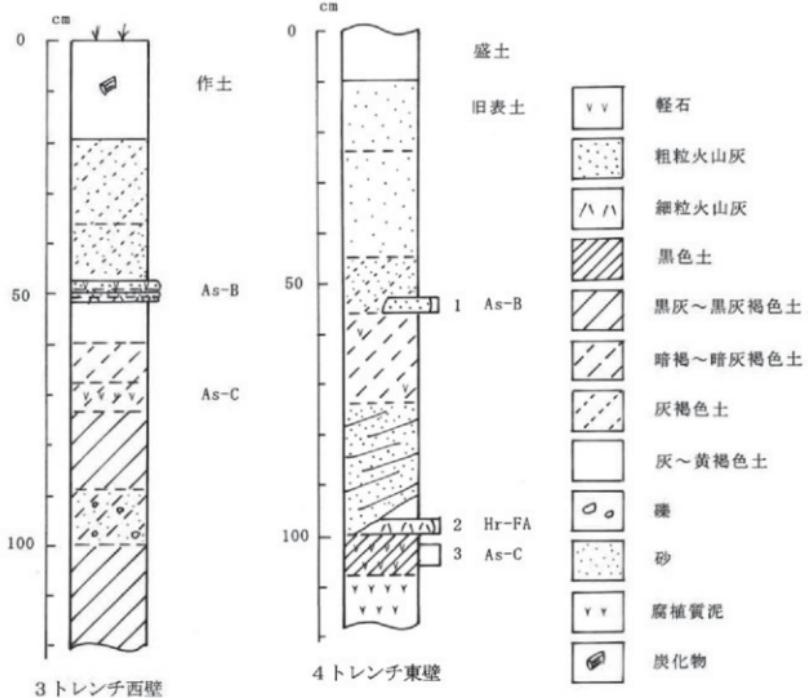


図1 菅海遺跡の土層柱状図(数字はテフラ分析の試料番号)

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オバール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 3トレンチ西壁

As-B直下層（試料1）について分析を行った。その結果、イネが7,800個/gと高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) 3トレンチ東壁

As-B直下層（試料1）と下位のサク部（試料2）について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。このうち、As-B直下層（試料1）では密度が6,600個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

サク部（試料2）では密度が2,100個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。なお、畑稲作（陸稲栽培）の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休耕期間をおく必要があることから、イネの密度は水田よりもかなり低く、1,000～2,000個/g程度である場合が多い。

3) 4トレンチ東壁

Hr-FAの上層（試料1）について分析を行った。その結果、イネが検出されたが、密度は700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

4) 4トレンチ西壁

As-B直下層（試料1）とその下層（試料2）、およびHr-FA混のサク部（試料3、4）について分析を行った。その結果、試料1～3からイネが検出された。このうち、As-B直下層（試料1）とその下層（試料2）では密度が7,000個/gおよび7,500個/gと高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。Hr-FA混のサク部（試料3）では、密度が2,000個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

5) 三俣町試掘1-40-9

As-B下（試料1）、As-B～FPF1（試料2）、FPF1下（試料3）について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、As-B下（試料1）とAs-B～FPF1（試料2）では密度が6,300個/gおよび5,400個/gと高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。FPF1下（試料3）では密度が1,400個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類とヒエ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1) ムギ類

ムギ類（穂の表皮細胞）は、4トレンチ西壁のAs-B下層（試料2）から検出された。密度は600個/gと低い値であるが、穂（穀殼）が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

2) ヒエ属型

ヒエ属型は、3トレンチ東壁のAs-B直下層（試料1）と4トレンチ東壁のHr-FA上層（試料1）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌヒエなどの野生種が含まれるが、両者の差異は植物分類上でも不明確であり、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である（杉山ほか、1988）。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根茎類などの畑作物は分析の対象外となっている。

6.まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、元總社蒼海遺跡群(14)の浅間Bテフラ（As-B、1108年）直下層では各地点ともイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、As-Bの下層でもイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。下位のサク部でも、比較的の少量ながらイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、4トレンチ西壁のAs-B下層では、ムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

三俣町試掘1-40-9では、As-B下およびAs-B～FPF1でイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、FPF1下でも比較的の少量ながらイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。

文献

- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学、同成社、p.189-213。
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学、9、p.15-29。
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－。考古学と自然科学、17、p.73-85。

表1 前橋市、苦海遺跡群における植物珪酸体分析結果

分類群	学名	地點・試料				3トレンチ西				4トレンチ東壁				4トレンチ西壁				三保町試掘			
		1	1	1	1	1	2	1	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3		
イネ科	Gramineae																				
イネ	Oryza sativa	78	66	21	7	70	75	20	6	63	54	14									
ムギ類	Hordeum/Polygonum (husk, Phytolith)			7	7	14	7	7	7	7	7	7									
ヒエ属型	Echinocloa type			20	13	21	27	14	25	33	34										
キビ族型	Panicoidae			Phragmites																	
ヨシ属	Zoysia	20	13	21	27	14	25	33	34												
シバ属	Miscanthus type	20	13	21	27	14	6	6	6												
スキ属型	Andropogoneae A type	39	66	34	27	42	25	33	40	84	40	35									
ウシクサ族A	Andropogoneae B type	7	7	14	14	13	13	13	13	13	13	7									
ウシクサ族B	Bambusoideae																				
タケ亜科	Pleinoblastus sect. Nipponocalamus	13	7	6	6	63	44	93	148	35	20	28									
メダケ類型	Pleinoblastus sect. Nezusa	59	72	34	34	7	7	34	34	13	13	35									
ネギサ油型	Pleinoblastus sect. Crassinodi	7	7	14	13	27	40	7	7												
ミヤコサ油型	Others	39	20	21	27	14	27	40	7	7	7	7									
未分類等	Others																				
その他のイネ科	Husk hair origin	33	33	41	7	49	44	7	7	28	47	14									
表皮毛起源	Rod-shaped	234	164	178	121	119	101	87	108	147	134	105									
棒状珪酸体	Stem origin																				
茎部起源	Others	443	354	357	229	371	390	314	289	253	194	188									
未分類等	Abraded																				
樹木起源	Jigsaw puzzle shaped (Fagus etc.)																				
木はく材	Polygonal plate shaped (Quercus etc.)																				
多角形板状 (コナラ属など)	Others	13	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7									
その他	Sponge																				
(海綿骨質)	Total	966	839	769	491	7	7	7	7	7	7	7									
植物珪酸体数																					
打ち抜き断面の割定牛畜量 (単位 kg/m²cm)	Oryza sativa	230	193	61	61	2.6	2.22	0.59	1.86	1.57	0.41										
イネ	Echinocloa type		0.55	0.56	1.23	0.83	1.30	1.70	0.88	1.59	2.11	2.12									
ヒエ属型	Phragmites			0.16	0.26	0.15	0.08	0.17	0.08	0.07	0.08	0.08									
ヨシ属	Miscanthus type			0.28	0.35	0.26	0.16	0.30	0.21	0.45	0.71	0.17									
スキ属型	Pleinoblastus sect. Nipponocalamus			0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02									
メダケ類型	Pleinoblastus sect. Nezusa																				
ネギサ油型	Sasa sect. Crassinodi																				
ミヤコサ油型																					

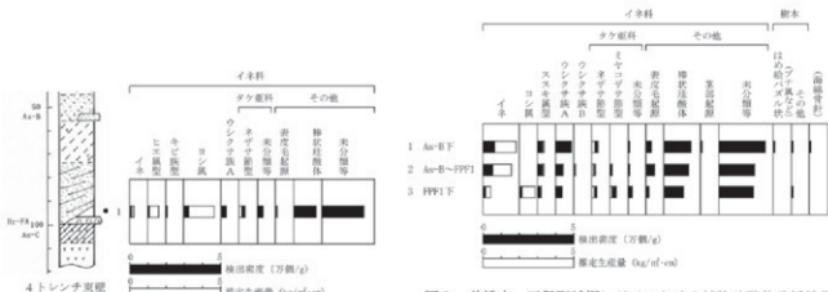


図2 前橋市、三保町試掘1-40-9における植物珪酸体分析結果

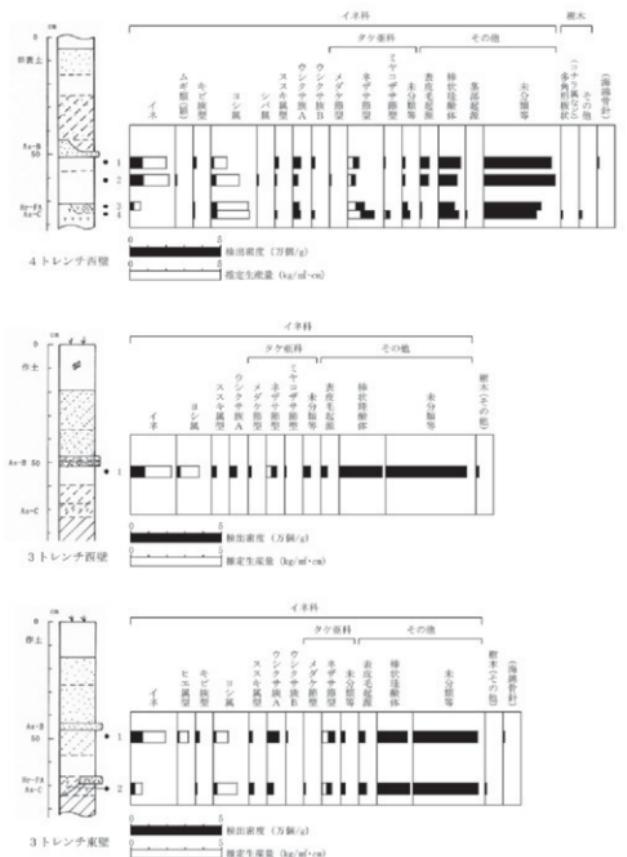
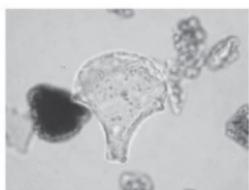
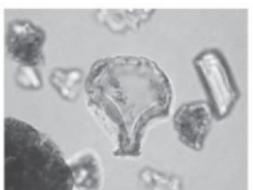


図1 前橋市、若海遺跡群における植物珪酸体分析結果

元絶杜蒼海遺跡群(14) の植物珪酸体 (プラント・オバール)



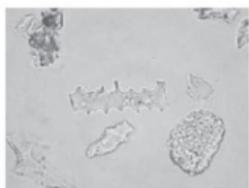
イネ



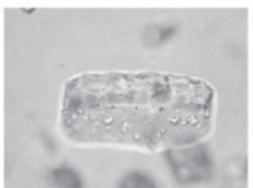
イネ



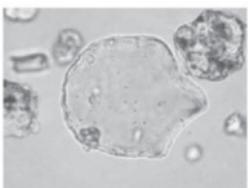
イネ (側面)



ムギ類 (葉の表皮細胞)



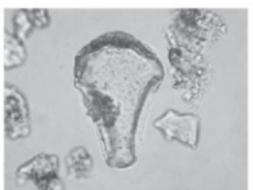
ヒエ属型



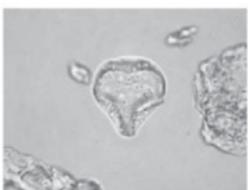
ヨシ属



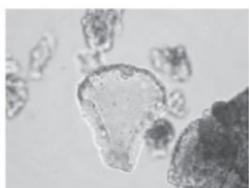
ススキ属型



ウシクサ族B



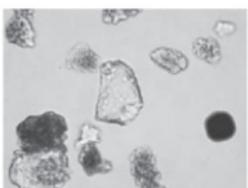
シバ属



メダケ節型



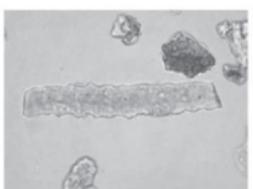
ネザサン節型



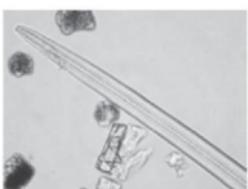
ミヤコザサ節型



表皮毛起源



棒状珪酸体



海面骨針

— 50 μm —

2 元総社蒼海遺跡群(19)

(株)火山灰考古学研究所
早田 魁

(※Ⅱ. プラント・オパール分析には、蒼海(14)の2トレンチも含む。)

I. 元総社蒼海遺跡群(14)の土層とテフラ

1.はじめに

関東地方北西部前橋市域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壤の中には、赤城、榛名、浅間、八ヶ岳、御岳など北関東地方や中部地方の火山、さらには中国地方や九州地方などの火山に由来するテフラ（火山碎屑（さいせつ）物（ぶつ）、いわゆる火山灰）が多く認められる。その中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構や遺物包含層の層位や年代を知ることができるようになっている。

そこで、発掘調査の際に水田遺構が検出された前橋市元総社蒼海遺跡群(19)においても、水田の検証および探査のための微化石分析に先立って地質調査を行い、テフラを含めた土層層序を記載するとともに、プラント・オパール分析に供する試料の採取を実施した。調査分析の対象となった地点は、調査区の東隅地点および西隅地点の2地点である。

2. 土層の層序

(1) 東隅地点

調査区の基本的な土層断面が認められた東隅地点では、下位より黒灰色砂質泥層（層厚15cm以上）、灰白色軽石層（層厚11cm、軽石の最大径8mm、石質岩片の最大径2mm）、灰白色軽石に富む暗灰褐色泥層（層厚10cm、軽石の最大径7mm）、暗灰色泥層（層厚1cm）、灰色砂層（層厚0.3cm）、砂混じり暗灰色泥層（層厚11cm）、黄灰色砂と灰褐色泥の互層（層厚6cm）、黒泥層（層厚2~20cm）、灰白色砂層（層厚0.3cm）、黒泥層（層厚2cm）、成層したテフラ層（層厚9.4cm）、桃褐色シルト層（層厚0.3cm）、白色軽石混じり灰色砂層（層厚10cm以上、軽石の最大径12mm）が認められる（図1）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より桃褐色細粒火山灰層（層厚3cm）、淘汰の良い黄色粗粒火山灰層（層厚1cm）、黄褐色細粒火山灰と黄灰色粗粒火山灰の互層（層厚4cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚1cm）、桃色砂質細粒火山灰層（層厚0.4cm）からなる。このテフラ層は、その層相から、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳浜川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）と考えられる。発掘調査では、このHr-FAの直下から水田遺構が検出されている。

Hr-FAのすぐ上位にある洪积水および泥流堆積物に関しては、Hr-FAの噴火に関係して発生した火山泥流堆積物（早田、1989）と考えられる。一方、Hr-FAの下位にある灰白色軽石層については、層位や層相などから、4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石（As-C、荒牧、1968、新井、1979、友廣、1988、若狭、2000）に同定される可能性が高い。

(2) 西隅地点

微高地に位置する西隅地点では、下位より黒灰色砂質泥層（層厚21cm以上）、灰白色軽石に富む黒灰色泥層（層厚21cm、軽石の最大径7mm）、砂混じり黒灰色泥層（層厚10cm）、灰色砂のレンズを多く挟在する暗灰色泥層（層厚7cm）、黒泥層（層厚9cm）が認められる（図2）。さらにその上位には、前述のHr-FAのブロックを含む黒灰色泥層（層厚7cm）があり、それは白色軽石混じりの青灰色砂質泥流堆積物（層厚19cm以上、軽石の最大径14mm）により覆われている。この泥流堆積物も、層位や層相などからHr-FAの噴火に関係して発生した火山泥流堆積物（早田、1989）と考えられる。

3. 考察

土層の観察の結果、発掘調査により検出された水田遺構は、Hr-FA直下にあると考えられる。微高地（西隅地点）では、Hr-FAに関係した火山泥流堆積物の直下に、Hr-FAをブロック状に含む黒灰色泥層が認められた。この地点でも、プラント・オパール分析の結果（後述）から、Hr-FA降灰前に水田耕作が行われていたと思われる。Hr-FA降灰直前の土地利用については不明な点があるものの、そのような場所が、Hr-FA降灰後に人為を含む何らかの擾乱を受けた可能性が高いと考えられる。人為とすれば、降灰後の復旧作業などが考えられるのかも知れない。

4.まとめ

元総社蒼海遺跡群(19)において地質調査を実施した。その結果、下位より浅間C軽石(As-C, 4世紀初頭)と、榛名二ヶ岳洪川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)およびそれに関係する火山泥流堆積物が認められた。本遺跡で検出された水田遺構の層位は、Hr-FA直下にあると考えられる。

文献

- 新井房夫(1979)関東地方北西部の繩文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
荒牧重雄(1968)「浅間火山の地質」。地図研専報, no.14, 45p.
町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.
坂口 一(1986)榛名二ヶ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原道路・今井 神社古墳群・荒砥青柳道路」p.103-119.
早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
若狭 雅(2000)群馬の発生土器が終わるとき、かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く-古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.
友廣智也(1988)古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古 學」, p.325-336.

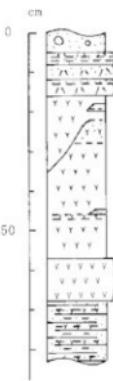


図1 東隅地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

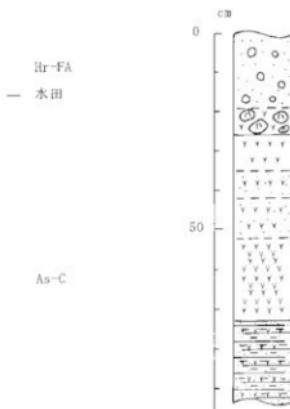


図2 西隅地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

II. 元総社蒼海遺跡群(14・19)における植物珪酸体(プラント・オパール)分析

1.はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO_2)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

分析試料は、蒼海遺跡群(19)の東隅地点と西隅地点、蒼海遺跡群(14)の2トレンチ北と2トレンチ南の4地点から採取された計7点である。試料の採取層位を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻³g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。

イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は631、ススキ属（ススキ）は1.24、ネササ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～図3に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ジェズダマ属、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、Aタイプ（くさび型）、Bタイプ

〔イネ科－タケ亜科〕

ネササ節型（おもにメダケ属ネササ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、地下茎部起源、未分類等

〔樹木〕

はめ縫パズル状（ブナ科ブナ属など）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オバール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 元總社蒼海遺跡群(19) 東隅地点（図1）

Hr-FA直下層（試料1）からAs-C直下層（試料4）までの層準について分析を行った。その結果、Hr-FA直下層（試料1）からイネが検出された。密度は1,400個/gと比較的低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

2) 元總社蒼海遺跡群(19) 西隅地点（図2）

Hr-FA直下層（試料1）について分析を行った。その結果、イネが4,900個/gと比較的高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

3) 元總社蒼海遺跡群(14)

2トレンチ北地点および2トレンチ南地点のFPF1直下層について分析を行った。その結果、2トレンチ北地点のFPF1直下層からイネが検出された。密度は1300個/gと比較的低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本道跡の試料からはジュズダマ属が検出された。

ジュズダマ属は、蒼海遺跡群(19)西隅地点のHr-FA直下層（試料1）および蒼海遺跡群(14)2トレンチ北地点のFPF1直下層から検出された。ジュズダマ属には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態から栽培種と野草のジュズダマとを完全に識別するには至っていない。また、密度も前者で700個/g、後者で2,000個/gといずれも比較的低い値であることから、ここでハトムギが栽培されていた可能性は考えられるものの、野草のジュズダマに由来するものである可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。

1) 元總社蒼海遺跡群(19)

各地点・各層ともネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族Aなども認められた。おもな分類群の推定生産量によるとおむねヨシ属が優勢であり、ネザサ節型も多くなっている。以上の結果から、As-C直下層からHr-FA直下層にかけては、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用してHr-FA直下層の時に水田稲作が行われていたと推定される。また、遺跡周辺の比較的乾燥したところにはネザサ節などの竹葉類をはじめ、スキ属やチガヤ属なども生育していたと考えられる。

2) 元總社蒼海遺跡群(14)

各地点のFPF1直下層ではヨシ属が多量に検出され、スキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、ヨシ属が卓越している。

以上の結果から、FPF1直下層の堆積当時は、ヨシ属が繁茂するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して調査区の一部で水田稲作が行われていたと推定される。また、遺跡周辺の比較的乾燥したところにはスキ属やチガヤ属、ネザサ節などが生育していたと考えられる。

6.まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、元總社蒼海遺跡群(19)西隅地点のHr-FA直下層では、イネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、蒼海遺跡群(19)東隅地点のHr-FA直下層および蒼海遺跡群(14)2トレンチ北地点のFPF1直下層でも、比較的少量のイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

文献

- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社。p.189-213。
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学。9, p.15-29。
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探し－。考古学と自然科学。17, p.73-85。

表1 前崎市、蒼海遺跡群における植物付属体分析結果
検出密度(単位: ×100個/m²)

分類群	学名	地点・試料	蒼海遺跡(19)				蒼海遺跡(14)			
			1	2	3	4	西原	2トレス	2トレス	西原
イネ科	Gramineae									
イネ	Oryza sativa	14					49	13		
キビ族型	Panicae type	22					7	13		
シエスマ属	Coxii						7	20		
ヨシ属	Phragmites	51	28	40	21	21	196	172		
ススキ属型	Miscanthus type	29	21	7	28	14	20	7		
ウシクサ族A	Aridopogoneae A type	29	49	54	28	35	33	7		
ウシクサ族B	Andropogoneae B type									
Aタイプ(くさび型)	A type	7	7	7	7	7				
Bタイプ	B type									
タケ亜科	Bambusoideae									
ネギサ属型	Pleioblastus sect. Nezasa	166	176	87	154	98	65	7		
ミヤコザサ属型	Sasa sect. Sasaetc.	7	7	7	7	7				
未分類等	Sasa sect. Crassiodi	22	28	13	14	7	7	7		
その他のイネ科	Others									
表皮毛起源	Husk hair origin	22	21	28	20	14				
棒状柱體	Rod-shaped	174	147	107	140	133	183	213		
茎部起源	Stem origin	14				7	13	34		
地下茎部起源	Underground stem origin	7				7	20	14		
未分類等	Others	297	295	298	224	273	469	268		
樹木類	Arboreal									
はめ込みパズル状(ブナ属など)	Jigsaw puzzle shaped(Fagus etc.)	7	7	7	7	7	7	7		
多角形板状(コナラ属など)	Polynigonal plate shaped(Quercus etc.)	Others	22	7	14	14	35	13	7	
その他	Total	890	800	537	678	720	1080	748		
植物付属体総数										
おもな分類群の確定生産量(単位: kg/m ² ・cm) : 試料の面積を10と仮定して算出										
イネ	Oryza sativa	0.43					1.44	0.38		
ヨシ属	Phragmites	320	1.77	2.54	1.32	1.32	12.34	10.83		
ススキ属型	Miscanthus type	0.36	0.26	0.08	0.17	0.17	0.24	0.09		
ネギサ属型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.80	0.84	0.42	0.74	0.47	0.31	0.03		
ミヤコザサ属型	Sasa sect. Sasaetc.	0.05	0.05	0.05						
未分類等	Sasa sect. Crassiodi	0.02	0.02	0.02	0.10	0.02				
タケ亜科の比率(%)										
ネギサ属型	Pleioblastus sect. Nezasa	97	92	86	88	96	100	100		
ミヤコザサ属型	Sasa sect. Sasaetc.	3	2	4	12	4				
ヨシ属	Sasa sect. Crassiodi									

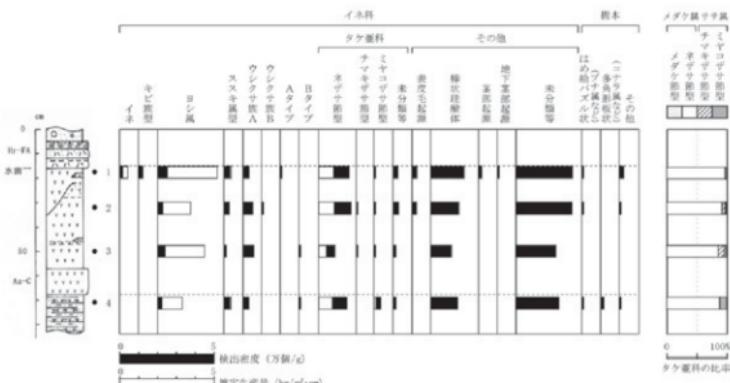


図1 著海道路群(19) 東隣地点における植物珪酸体分析結果

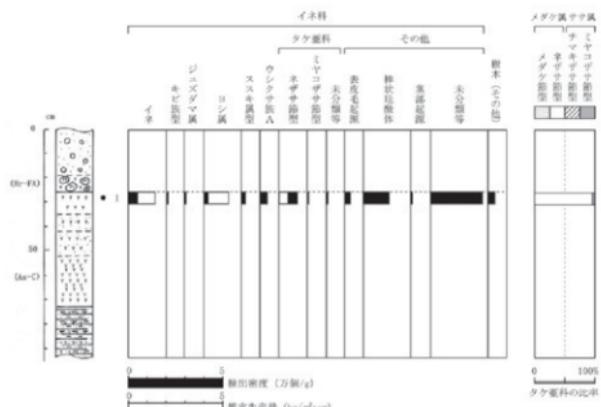


図2 著海道路群(19) 西隣地における植物珪酸体分析結果

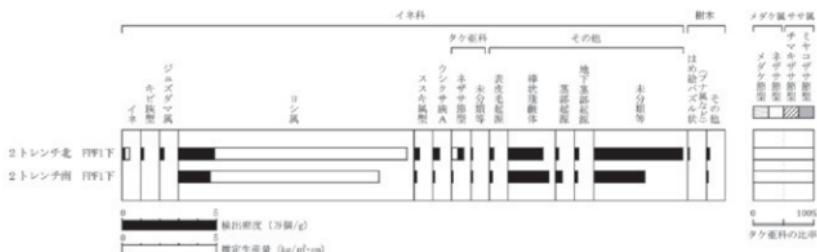
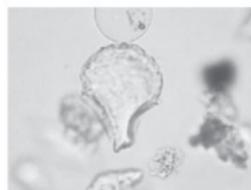
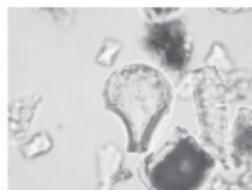


図3 著海道路群(14) における植物珪酸体分析結果

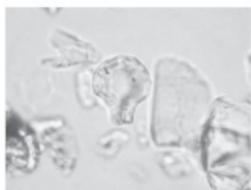
蒼海遺跡群の植物珪酸体（プラント・オパール）



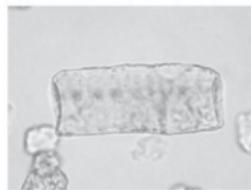
イネ
蒼海19西隅 1



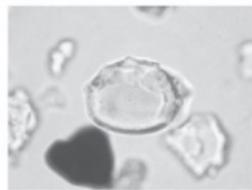
イネ
蒼海14 2トレンチ北



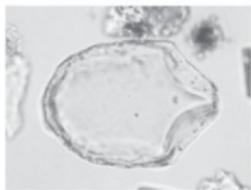
イネ
蒼海19西隅 1



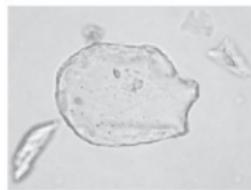
キビ族型
蒼海14 2トレンチ北



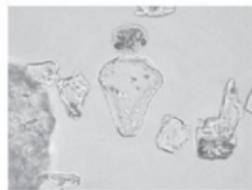
ジュズダマ属
蒼海14 2トレンチ北



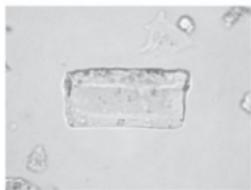
ヨシ属
蒼海14 2トレンチ北



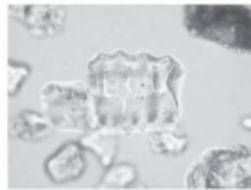
ヨシ属
蒼海19東隅 3



ススキ属型
蒼海19東隅 1



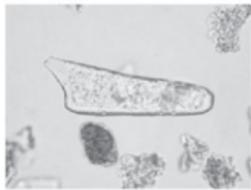
イネ科Bタイプ
蒼海19東隅 3



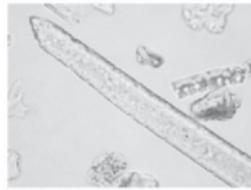
ネザサ節型
蒼海19東隅 2



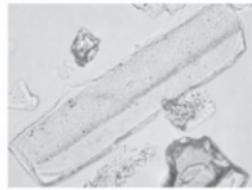
ミヤコザサ節型
蒼海19東隅 4



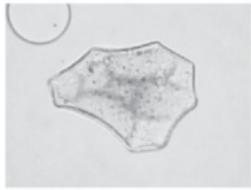
表皮毛起源
蒼海19西隅 1



棒状珪酸体
蒼海19東隅 1



イネ科の茎部起源
蒼海19東隅 1



多角形板状
蒼海19東隅 4

— 50 μm —



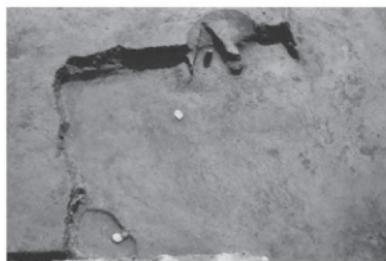
H-1号住居跡全景（西から）



H-1号住居跡全貌（西から）



H-3号住居跡内遺物出土状況（西から）



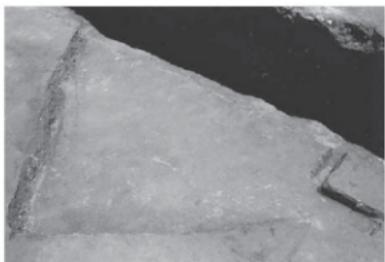
H-3号住居跡全景（西から）



H-3号住居跡全貌（西から）



H - 4号住居跡全景（西から）



H - 5号住居跡全景（西から）



H - 7号住居跡観り方（西から）



W - 1号溝跡全景（東から）



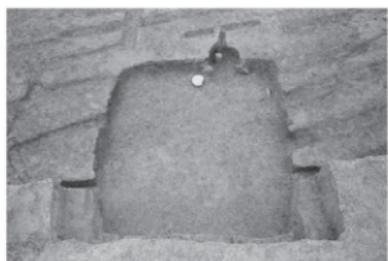
3 トレンチ状遺構（中央～南）全景（北から）



3 トレンチ畝状遺構（北）全景（南から）



H-11号住居跡遺物出土状況（西から）



H-11号住居跡全景（西から）



H-11号住居跡遺物出土状況（西から）



B-11号掘立柱建物跡全景（東から）



4 トレンチ西壁セクション（東から）



4 トレンチ畝状遺構全景（南から）



4 トレンチ北側部全景（北から）



5 トレンチ調査区全景（西から）



H-31・33号住居跡全景（北から）



H-34号住居跡遺物出土状況（東から）



H-32号住居跡全景（東から）



H-32号住居跡遺物出土状況（東から）



W-31号溝跡南壁（東から）



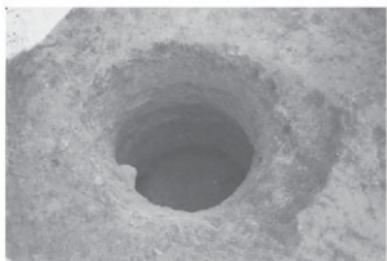
W-32号溝跡全景（北から）



W-33号溝跡全景（南から）



5 トレンチ土坑重複状況（北から）



1-37号井戸跡全景（北から）



1-40号井戸跡全景（北から）



蒼海(19) 調査区全景（西から）



蒼海(19) 畦畔セクション（東から）



蒼海(19) 大畦畔セクション（東から）



蒼海(19) 木器出土状況（北から）



蒼海(19) 土器出土状況（北から）



4



6



26



11



16



27



12



14



28



13



10



7



8



9

PL. 8



22



20



21



23



24



30



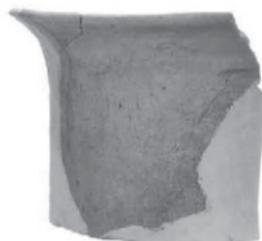
32



31



33



25



47



48



49



50



44



45



46



54



63



62



64



67



65



73



66



77



74



79

PL.10



82



81



93



88



96



98



97



114



83



100



102



94



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫



⑬



⑭



⑯



⑯

PL.12





49



70



100



106

144



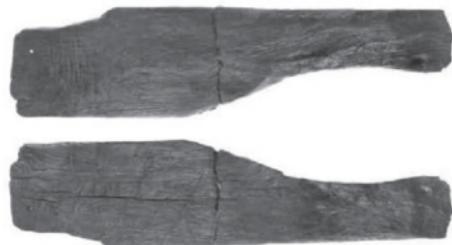
58

83

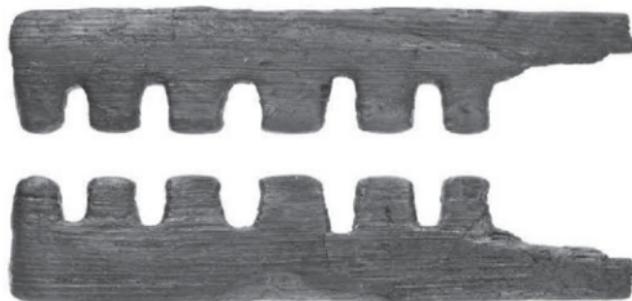
82



118



47



54



93

抄 錄

フリガナ	モトソウジャオウミイセキグン(14)・モトソウジャオウミイセキグン(19)
書名	元総社蒼海遺跡群(14)・元総社蒼海遺跡群(19)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海上地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	近藤 雅順・村越 純子
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	西暦2008年3月18日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置(日本測地系)		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
モトソウジャオウミイセキグン 元総社蒼海遺跡群 (14)	前橋市總社町 総社3598-3 ほか	10201	19A130 -14	36°23'28" 139°02'25"		20070521 / 20071025	約1,176m ²	前橋都市計画 事業元総社蒼 海上地区画整 理事業
モトソウジャオウミイセキグン 元総社蒼海遺跡群 (19)	前橋市モトソウジ 町3070-1番	10201	19A130 -19	36°23'25" 139°02'21"		20071029 / 20071214	約336m ²	前橋都市計画 事業元総社蒼 海上地区画整 理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元総社蒼海遺跡群 (14)	集落跡	古墳時代	堅穴住居跡14軒、水田址、 畝状遺構	土師器、須恵器	
		奈良・平安時代	堅穴住居跡6軒、掘立柱建 物跡2棟、溝跡4条	土師器、須恵器、鐵製品、 石製品、瓦	
		中世	溝跡4条、井戸跡13基、 堅穴状遺構1軒	軟質陶器、石製品、瓦	
元総社蒼海遺跡群 (19)	水田址	古墳時代	小区画水田	木器、土師器、須恵器	
		中世	井戸跡	漆器	

元総社蒼海遺跡群(14)(19)

2008年3月5日 印刷

2008年3月18日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市三俣町二丁目10-2

TEL 027-231-9531

印刷 日本特急印刷株式会社

前橋市下小出町二丁目9-25

TEL 027-233-2002

